

して下さい。私は今まで色々な事で人を恨んだり不足を云つたりしましたが、此頃では毎日檀那寺の和尚さんが、臨床法話をお聞かせ下さいますので、今ではすっかり安心しました。妻のやうな者でも大慈の阿彌陀様は救つて下さいますさうです。妻は此お慈悲に浴して立派なお浄土へ参らして載きます——と。私はこれ聞いて眞に意外に思つた。平素熱心な天理教徒であつた姉は自分が死んだら大和のお教祖様の膝下へ行くのだと、いつも口癖のやうに云つて居つたのに。今となつて平素殆ど口にしなかつたお浄土参を喜ぶのであつた」と。然しながら余から観ればそれは意外でも不思議でもない。昔から三河阿徒と云はれて居る眞宗繁昌の地に生れ、又さうした空氣の漲れる家庭に育つた此人が、たとひ一時は他教に傾いてゐても、幼少時に於ける無意識的感化が、如何に強く残つて居るものであるかを證明して居るに過ぎないのである。

又我基督教界に相當の名ある一牧師は、その郷里なる常陸に歸省中、一日妻君同道にて鹿嶋神社方面に遊んだ。社前に至るや牧師先生思はず頭が下がるのも知らなかつたといふ程、無意識に頭を下げた。所がその妻君なる人は、堅苦しい基督教信者の家庭に育ち「汝我面の前に我の外何ものをも神とすべからず……之を拜むべからず、之に事ふべからず」と教へ込まれてゐたから、今夫君の斯うした禮拜姿を見てどんなに驚いたかは、想像に餘りあるが、抑も此牧師の両親とい

ふは、結婚後久しく子なきを憂ひて、敬神家であつた彼等は、子供欲しさに鹿嶋神社に祈願をこめて出来たのが今の牧師である。されば彼は所謂神様の中し子として、その名も鹿島の「鹿」の一字を拜領に及んで居らるゝ。牧師先生は神社拜禮の一件に就いては、苦しい辨解をして居らるゝが、余はど、こまでも先生は鹿島様の信奉者として、その一生を貫くべき運命の持主として、生れ育つた人のやうに思へてならないのである。

東北地方では、かくし念佛——眞宗の一異論——が繁昌してゐる。其方法は地方々々によつて多少の相違はあるが、要するに善知識といふのがその中心人物である。此人が信者の入信来信を制することになつてゐるが、その善知識を中心に御脇御用人、御用人、御引立と云つた數多の世話人がある。先づ御引立と稱はるゝ人が、諸方面から信者となるべき者を勧誘してくる。一定の日を選んで此れ等勧誘された所謂お客様に、彼一流の入信式を行ふのであるが、これは自分等以外の人々には絶対秘密を要するから、既信者の家で廻り番といふのを定め、その家の土藏の内等に集つて、表には嚴重に番人を置くのである。さて先づ御修行と稱して一週間は秘密裡に法座を開き、御用人御脇御用人が彼等獨特の説法をやる。御客様は御引立と共に聽聞するのであるが、聽聞といふよりは寧ろ盛な念佛の連呼に酔はしむるのである。さていよいよ一週間の終りには善

知識の審判があり入信式を行ふのであるが、その方法は要するに感覺や暗示を利用して「助かつた」といふ強い觀念を懐かせるのであるが、これには子供の時が有効であるといふので、大體六七歳の頃に所謂信仰を「頂かせる」のを例としてゐる。かくして「頂かせ」られた者は、將來堅く南無阿彌陀佛に凝り固つて、他の宗教などは本能的に排するやうになる。余の知れる幾多の人には斯うした頑固な信仰の持主も尠くない。所が「頂いた」人の一人、或機會に基督教信者になつた。其後彼は如何にも熱心なクリスチャンとしての生活振りを發揮して居つた。しかるに此人が偶然重病に罹つて生死の程もおぼつかないといふ段にせりつめた時、彼は背つて「頂かせ」られた南無阿彌陀佛が、新しい力を以て復活して來た。さうして彼はクリスチャンであることを全く忘れ切つたかの如く、念佛三昧で息を引き取つて行つたのである。

斯うした實例は際限もなく提供することが出来るが、要するに宗教々育上、幼少年時代に於ける宗教的感化力は、無意識的精神力となつて潜在しつゝ、後日期を得て再び意識の表面に活躍するものであることを證明するものである。

第三節 人性の二方面と幼な心

幼な心と活動性 前章に於て余は人性に實質的方面と活動的方面との二方面あることを論じ而して我惟神道に於ては、それを「性は誠なり」といふ意味と、「性は勢なり」といふ意味によつて現はされてあることを述べて置いた。今幼兒の生活に於ても、此兩方面が著しく現はれて居ることを見るのである。即ち活動そのものともいふべき子供は、暫くも靜止してはゐない。何かな活動を續けてゐなければならぬのが、子供の性であつて、やがて性の勢たる所以を現はしてゐる。彼等の眼は常に好奇の希望に輝いてゐる。彼等の耳は何物をも聴き漏らすまじと忙はしく働いてゐる。彼等の手は何物かを握らんとして常に待かまへてゐる。彼等の足は到らざる所なく而して彼等の口はいつも動いてゐる。三尺の竹切れは忽ち馬となり劍となり鐵砲となる。彼等は忽ちにして乃木大將となり加藤清正となり孟母となる。粘土を弄んでは三月食を忘るゝ藝術家となり、團體の名譽の爲めには自己を忘るゝ勇士となる。彼等の生活はその身體も精神も、唯これ活動の權化、個體完成てふ生命の道に突進する勢そのものではあるまいか。而してその性の誠たる實質的方面は、子供に於ては特に偉大な力を以て、吾人に迫まるものがある。

幼な心とその偉大性 子供の天真は實に罪のないもの、無垢なもの、無邪氣なものである。彼等はその耳目に觸れる程の總てのものを、自己と同じ無邪氣なものに化して仕舞ふ。彼等は總

てのものが笑顔を以て彼等を迎へて呉れるものと思つてゐる。否彼等は鳥であらうが犬であらうが、笛であらうが人形であらうが、總てのものを人格化し、それを自分の友とし、仲間と思つて嬉々として楽しむのである。萬物を人格化する彼等は更にそれ等を神化することすらある。斯くして彼等は物と人と神とに愛せられ、又それ等を愛してゐるのである。されば世界は彼の天國であり、極樂である。彼等はその短かき過去も樂しき未來も現在一つに集めて、唯現在の生活に全身全力を打ち込んでゐる。現在に生き現在を樂しむより外に、彼等の生活はないのである。彼等は現實主義者であり、樂天主義者であり、又自然のままなる神そのもの、性を帯びて居る。されば彼等は又よく人を動かし人を靈化する偉大なる靈能を持つて居る。誰か邪念を以て子供に向ひ得る者があらう。偶邪念を持つて向ふものも、忽ちその純真無垢に溶かされて仕舞ふのである。こゝに彼等の性が誠たる所以を發揮してゐる。

某基督教婦人矯風會員の談る所によれば、其婦人ホームには家を飛出した不良少女、出來心から法律上の罪を重ねた婦人、或は男に欺かれて身を過つた婦人等を收容して居るが、此等の婦人の中には子供を連れて來る者もあり、又妊娠せる者も澤山ある。ホームではかゝる人々のひがんだ冷たい心を、温かい人間の本心に立ち歸らせることに骨折つて居るのであるが、それ等罪の女

を悔悟せしむるに最も有力なものは、子供の愛と無邪氣とであるとされて居る。如何に罪を重ねた女でもその連れて居る子供は、不良の群に入れたくない、立派に世の中へ出してやりたいとの切なる願を持つて居る。又妊娠した女もやがて子供を生むが、その生れたまゝの何の罪もない神様のやうな清い笑顔を見ては、どうかして此子供は立派な人間に育て上げたいとの願を起す。かうなると自然今までの自分のやつて來た罪を悔い改め、やがて本當の美しい人間の心に立ち歸るやうになる。又その天真爛漫な子供を見たり、母の子に對する赤い心を見て、他の不良少女達も翻然として改悟し、早く我家へ、両親の許へ歸りたいと願ふやうになる。かうして子供や赤ん坊の垢なき美しい心によつて、婦人ホームの事業の大半は達成さるゝといふことである。

子供の天真無垢な心に動かさるゝ例は幾らもある。嘗て日露戰爭當時、出征の佐倉聯隊の一兵卒柴田某は、千葉町通過の際、一人の少女がその楓葉のやうな手を差し延べて「どうぞ勝つて下さい」と云つて手渡して呉れた小旗を忘るゝことが出來なかつた。彼の苦闘奮戦の裏面には、常にこの少女の至誠が深く銘して居たと云つて居る。又スペリー提督が横濱に上陸したとき、提督萬歳の歡呼に迎へられつゝ、最初の程は靜かに黙してその歡迎を受けて居つたが、可愛い少女達が、「提督萬歳」と叫んで、馬車の中なる提督の膝に投げた花束を、感涙を溢へて眺めたとして

その時の感激は永く忘れ得なかつといふことである。義理やお附合ではなく、純真そのものともいふべき少年少女の行爲には、鬼神をも泣かしむる力が籠つて居る。それは無邪氣にしてしかも粘り強い底力を持つた力である。

永遠の春 明治天皇の御製に「天地を動かすばり言の葉の、誠のみちをきはめてしがな」といふのがある。或人この『誠のみちをきはめ』ることの秘訣を、時の御歌所頭であつた高崎正風男に尋ねたとき「自分の流に傳はれる肝要は、たゞ幼なくよめ、幼な心でよめと云ふ許りである」と、答へられたといふことである。これは

思ふことうちつけにいふ稚兒の

言葉はやがてうたにぞありける

といふ御製の思召に外ならない。されば『天地を動かすばかり言の葉の誠のみち』とは、畢竟幼な心そのまゝの心を持つことを仰せられたものと思はるのである。又或新聞の和歌の選者が選歌の標準を示して「幼くもまことの心こもりたる歌を佳しとし、我は選めり」と云つて居た。幼兒の誠心になるといふことが、人の心を動かす歌の極意であるやうである。明治天皇は常にこの

幼な心を求めさせ給ひ、

つくろはむことまだしらぬうなむ子の

もとの心のうせすもあらなむ

すなほなるをさな心をいつとなく

忘れはつるが惜しくもあるかな

かざらんと思はざりせばなかくに

うるはしからむ人の心は

と詠ませ給ひ、又その幼な心の本質を

思ふこと思ふがまゝに言ひいづる

をさな心や誠なるらむ

浪花江のそのよしあしもまだ知らぬ

をさな心や誠なるらむ

と詠ませ給ふた。そしてこの幼な心の誠そのまゝが、彼の

鬼神も泣かするものは世の中の

人のこゝろの誠なりけり

目に見えぬ神の心にかようこそ

人のこゝろの誠なりけれ

てふ至誠そのものを指させ給ふたものと恐察し奉るべく、されば幼な心の純真以外に、神の心に通ふ心はないのであつて、此心即ち誠の道を一向に踐み続け歩み続けて行きさへすれば、別段に神に祈るの要もない。所謂「心だに誠の道にかないなば、祈らずとも神やまもらむ」。この道に眞剣に進む相が、やがて神に通ふ道であり、又そのすがたそのまゝが神の相であるから、別段に以外に、祈るべき神を要しないのである。彼の「聖人は直ちに天なり。天真爛漫なり」と云ひ、或は「子供の如き心を失へるは、虚偽の心や罪や放埒から来るのである。偉人はたしかに自らその内に、子供心を有して居る」といひ、或は又「孩提を我に來せよ。彼等を禁る勿れ。神の國に居るものは斯の如き者なり」とも云ひ、或は「子供はどうかすると、甚だ神に近いものである」

とも、「天國は子供のものなり」ともいふ。古今東西の宗教家哲人達が、口を揃へて子供を讚美する所以はこゝにある。「神佛聖人の心は只一個の誠なり」といふ、その偽なき誠は幼な心に於て見出さるゝからである。吾々凡人が清き無邪氣な幼な心に動かさるゝ所以もこゝにある。畢竟吾人々類の要求する理想が、幼な心に於て見出さるゝ純真にあるからであつて、その幼な心を受するは、やがて彼等がその理想を愛し、その神の如き純真を受するのである。されば吾人の理想は幼な心そのものにあるといふべきではあるまいか。

多くの人々から尊敬さるゝ人格者、或は人生の長途を渡り盡した好老爺には、どことなしに幼な心の髣髴するものがあつて、吾人を惹き付ける力を感じることは、屢實驗する所である。世に「年寄と子供」といふ、どこか平和な氣が溢れて居る。又還暦の老人を祝ふに子供の好む緋衣着物や玩具を贈る習俗にも、深長な意味が漂ふて居る。確かに幼な心には吾人の心を惹き付ける偉大性を持つて居る。「吾々はその子供心が欲しい。されどそれは子供に身を下すことではなくして、吾人自身の幼時の永遠の春を再び發見することである」。「我まことに爾曹に告ん。改まりて嬰兒の如くならずば、天國に入ことを得じ」。先哲古聖の進軍喇叭は、幼な心へ幼な心へと吹奏する。余はこゝに再び、明治天皇の御製を偲び奉る。

思ふことつくろうこともまだしらぬ

をさなごゝろのうつくしきかな

いつはりの世をまだしらぬ幼な子が

心や清きかぎりなるらむ

第四節 幼な心とその統一性

無分別心と分別心 欲しくなつたから菓子をねだるのである。與へてくれないから號泣するのである。そこに在つたから喰つて見たのである。うまかつたから喜こんだのである。之が幼な心といふものである。そこには大人の持つやうな、ねだつては悪るかろうか、喰つてもよいのだらうかといった、思慮分別はない。彼は唯、その本然の性が要求するまゝに無分別にねだりもする喰いもする。こゝに子供の自由の世界があり、喜悅の天國があるのである。一見、矛盾撞着、殆ど無統一の如く見ゆる幼児の生活は、彼の本能の要求そのまゝを現はした一本調子のものである。丈に、彼れ自身には調和あり満足あり、統一ある自由そのものともいふべき生活である。然しな

がら彼等もやがて家庭に於て、學校に於て、智惠の木の實を喰い始める。そして段々分別といふものを覺へ始める。『浪花江のそのよしあしもまだしらぬ幼な心』にも、そろ／＼と是非善惡の見分けをつけるやうになる。『つくろはむことまだしらぬうな子』の心にも、人目外見を飾ることの利口を感じ始める。『すなほなるをさな心』にも、利害得失を打算し始める。勿論『天地のなしのまゝなる』『つくろはぬ』『うつくしき』『清きかぎりなる』『すなほなるをさな心』が全く消え失せる筈はないのであるが、年を重ねるに従つて所謂利口者になる。時と場合といふことも考へねばならなくなる。人の顔色を窺ふやうにもなる。利害得失の算盤もはじかねばならず、一利一害、それも一理これにも半面の眞理があるといった、曖昧な態度で胡魔化してゐなければならぬ必要も起つてくる。社會の組織が、制度が、餘儀なくしかせしむるのである。強ち彼の本能の要求ではないが、左様して居なければ生きて居る譯に行かないから、止むを得ず左様して居るのである。無論多くはさうした本能の要求てふことを顧みる事もなく、斯くの如きものなりと濟まして居るのであらうが、彼が眞剣に彼自身を反省したならば、そこには幾多の虐げられたる自我の要求が、不平不満の状態となつて沈滞して居る。所謂社會主義なるものは、かうした不平不満の原因を、社會組織の不公平にありとして、外に向つて改造を叫ぶものである、所謂煩悶懊惱と

いふも、この眞我の要求と、生活の必要から来る自我相との矛盾不統一、換言すれば現實と理想との不調和に對する心的鬭争に外ならないのである。かうして大人の生活は常に内心の統一を缺き、不調和不自然、不自由不満足な生活に壓迫されて、怏々として樂まずと云つた生活を餘儀なくされてゐるのである。

自我の分裂と懊惱苦悶

然しながら生活の出發點が、生きんとする自己本然の要求にある以上、此要求を壓殺して居るといふ状態は、とても堪え難いものであることは云ふまでもない。是に於て社會主義者のいふ如く、社會組織の改造といふことも勿論必要となる。がしかし、彼等の希望する理想の状態が、今直ぐ實現する筈のものでもなく、と云つて自己の生活を見合せて居るといふことも無論出來ない。こゝに外的の社會状態は兎に角、先づ内に向つて自己の精神界の調和統一を計らねばならない。確乎不動の信仰を求めんとする。理想が明かに輝き、現實が鮮かに浮ぶに従つて、益、生活と信仰、現實と理想との鬭争は甚だしくなる。あらゆる悲痛な信仰生活が始まる。

「われ願ふ所の善は之を行はず、反つて願はざる所の惡は之を行へり。若われ願はざる所を行ふときは、之を行ふものは我に非ず、我に居るところの罪なり、是故に我善を行はんと欲ふときに

惡の我に在る此一つの法あるを覺ゆ。蓋わが内なる人に就ては神の律法を樂めども、わが肢體に他の法ありて我心の法と戦ひ、我を擽にして我が肢體の中に在る罪の法に従はざるを悟れり。噫われ困苦人なる哉。この死の體より我を救はん者は誰ぞや。是われらの主イエスキリストなるが故に、神に感謝す。然ば我みづから心にては神の法に服ひ、肉にては罪の法に服ふなり」(保羅)

「悲しき哉。愚禿釋鷲、愛欲の廣海に沈没し名利の大山に迷惑す」(親鸞)

「罪業もとよりかたぢなし、妄想顛倒のなせるなり。心性もとよりきよけれど、この世はまことの人ぞなき」(親鸞)

懊惱苦悶のドン底には既に一道の光明は久遠に輝きつゝありき。即ち救済といふ。

「我キリストと偕に十字架に釘られたり。既われ生るに非ず。キリスト我に在て生るなり。今われ肉體に在て生るは、我を愛して我が爲めに己を捨てし者、すなはち神の子を信するに由て生るなり」(保羅)

「慶しき哉愚禿、仰いでおもんみれば、心を弘誓の佛地に樹て、情を難思の法海に流す。光明の廣海に浮びぬれば、不退の風航風靜かに、衆禍の波轉す」(親鸞)

統一の願求と兒童の宗教心 此懊惱苦悶の始めから、安心立命の曉に至るまでには、多くは

幾多の波瀾曲折を重ねる。曰く罪惡、回心、悔改、慈悲、愛、救濟、感謝と云つた所謂宗教生活の花々、舞臺が展開さるゝ。その花々しき活動振りが、如何にも他の生活と際立つて見ゆる所から、從來宗教と云へば、この特に悲しみ殊に慶ぶ方面のみと考へられ、従つて人生の辛酸を嘗め盡した大人、少くとも分別心の盛な青年相手のものとの思ひ込みに至つたのも無理はないがその歸する所は無分別に歸ることにある。眞我の發揮にある。純眞な幼な心に立ち還るに外ならないのである。されば宗教の理想は寧ろ兒童の心そのものにあるといふべきではあるまいか。兒童こそ宗教の理想たる純眞な心の持ち主であり、生命そのもの、生活者である。この純眞を出来る丈、完全に育て、行くことが、とりもなほさず宗教の使命ではあるまいか。然るに世屢、兒童の宗教心の有無を論じたり、甚だしきは、兒童に宗教的要求がないからと云つて、宗教々々の無用を叫ぶ者もある。それも一般の常識論としては兎も角、所謂學者識者と持て囃され、我教育界に重きをなす某博士の言として「人間が熱烈に宗教を求むるのは青年時代である。生ける信仰は本氣に之を求むる時に與へるに限る。さればまだ宗教的要求の生ぜざる學齡期にある幼少年者に向つて、宗教的信念を與へんとするが如きは、畢竟無駄骨折である」といつて居らるゝ。勿論宗教的信念てふ言葉の意味の取りやうにもよるが、少しく言ひ過ぎではあるまいか。あの持ち

倦んだ宗派的宗教のみを宗教と思ふならば、或は無駄骨折であるかも知れない。否、寧ろ兒童には有害無益のものとして、余と雖も斷じて採らないが、宗教を今少し廣い意味に取つて、統一的生活の實現を意味するものであるとするならば、あの統一味の豊かな、しかも平和的氣分に満ちた子供心こそ、宗教味に充ち満ちたものではあるまいか。天壤無窮への發展、現實と天國との調和味、すべてこれ兒童の心に於て、最も鮮かに見出され得る事實ではあるまいか。

第五節 童心の憧憬と宗教理想の内容

過去と將來との融合 兒童の身心がその自然の發達を、自然に發達して行く計りでなく、當人自身も然か發達せんことを強烈に望んで止まない。しかし又一面に於て、既に發達を遂げた所謂大人となつても幼な心を慕ひ子供時代を憶ふものである。

つくるはむことまだしらぬうなる子の
もとの心のうせすもあらなむ

成熟し切つた大人のみならず、發達の途中にある青年ですらも「今一度子供になつてみたい」と

の願が、心の何處かに絶えず動いて居る。されば吾人の生活目標は、常に將來のみにあるのではなくて、一面既に過ぎ去つた過去にあるといふべきである。即ち吾人の理想は、神に向つての前進であると共に、一面その神に盛るに、過去の純真な幼な心を以てしつゝあるものである。神と幼な心、天國の生活と子供時代、將來にあるものと過去にあつたもの、前方にあるものと後方にあつたもの、融合調和したる状態、これが吾々の理想の内容ではあるまいか。而してその理想實現とは「幼時の永遠の春を再び發見することであり、「改まりて嬰兒の如く」になつて天國に入ることである。即ち再び調和統一あり、平和あり自由ある幼な心に、更生せんとする努力に外ならないのである。而してその過程に於ては十人十色は勿論のこと、同一人に於ても、常に正直し出直しするのである。即ち經驗が複雑となるに従つて、分裂しよう分裂しようとする自我を、統一しよう統一しようとする努力の連続であつて、分裂統一分裂統一を繰返しつゝ、漸次その内容が豊富に又その統一が堅實さを増して行くのである。されば統一といふも、畢竟變通自在な動的統一であつて、其統一理想の内容にはその人の經驗せる幼な心が、常に力強く働く。而して、國民の精神に常に建國の理想が新しく生きつゝある間、その國家が常に若々しき發達を遂げ得る如く、幼な心を常に自己に復活することによつて、吾人は永遠に新しく生き得るのである。

尙古と改新　こゝに余は再び、我古代民族の生活を思ひ出さすにはわられないのである。それは大人が童魂を慕ひ、「幼時の永遠の春を再び發見することによつて、その理想我を活躍せしめ得ると同じ意味に於て、過去を振り返るのである。さうしてそこに兒童の發達段階と同じ段階にある我等の祖先の純朴な生活の上に、童魂の閃きを見出して無限の意味を感ずるのである。殊に異常に爛熟したる文化に疲れ切つた現代に於ては、上代への逆轉の必要が痛切に迫つてくる。

(二編六章、五節)今や各國民が、各自國文化に目ざめ、その基礎の上に新しき文化を建設することによつて、世界人類に貢獻せんとする傾向が、年と共に強烈になつて行く事實は、即ち此必然の人間性を雄辨に證明するものである。吾々の氣持の中にも、ハイカラに對する所謂蠻カラなる言葉が、妙に意味あり氣に響くではないか。そこには一種の意氣と自然味とを湛へた懐かし味が湧くのである。けれどもあの尺なす頭髮を梳らず、これが自然兒そまゝの姿で御座ると云はんばかりに、敢て蠻カラを氣取る青年には感服出來ない。矢張時代相當の敢てつゝろはぬ生活に則する和魂が望まるるのである。此所の人情の機微は、明治天皇の御製によりて、遺憾なく味ひ奉ることが出来るように思はるゝ。即ち幼な心をこよなくあこがれ給ふた 明治天皇は、

いかに世は開けゆくとも古への

國のおきてはたがへざらなむ

いにしへの姿のまゝにあらためぬ

神のやしろぞたふとかりける

いそのかみ古きてぶりをのこさなむ

改めぬべきこと多くとも

石上ふるきてぶりぞなつかしき

しらぶる琴のこゑをきくにも

と古き神代に御心を運ばせ給ひ、しかも

世の中の人におくれを取りぬべし

すゝまんときに進まざりせば

進むべき時をはかりて進まずば

危き道にいりもこそすれ

いそのかみ古きためしをたづねつゝ

新らしき世のこともさだめん

古への御代の教にもとづきて

開けゆく世にたゝむとぞ思ふ

開くべき道はひらきて神つ代の

國のすがたを忘れざらなむ

開けゆく世のさまみればなかくに

昔にかへることもありけり

天てらす神のみいづを仰ぐかな

開けゆく世にあふにつけても

と尙古的思想と改新的思想との自らなる調和を味はせ給ひ、ここに

ちはやぶる神の教をうけつぎて

人の心ぞたゞしかりける

ひと筋をふみて思へばちはやぶる

神代の道もとほからぬかな

ちはやぶる神の御代よりひとすぢの

道をふむこそうれしかりけれ

ふむことのなかたからむ早くより

神の開きし敷島の道

千早ぶる神の開きし道をまた

開くは人のちからなりけり

と『神代の道』の中に、人間心の如實相、眞人の生活の實際、自我實現、現人神體現の道あることを示させ給ひ、又こゝに教育の理想と大方針との存することを示させ給ふべく。

吳竹のなほき心をためずして

ふしある人におほしたてなむ

よきたねをえらびくゝて教草

うゑひろめなむのにもやまにも

敷島のやまとしまねのをしへぐさ

神代のたねの残るなりけり

すゝみゆく世に生れたるうなるにも

昔のことは教へおかなむ

わがしれる野にも山にもしげらせよ

神ながらなる道をしへぐさ

いつはらぬ神の心をうつせみの

世の人みなにうつしてしがな

と吐露せさせ給ふたのである。

かうして子供心と、子供心を生活した上代民族的な生活の中から、吾々の宗教味を味ひ出すことは意味深いことではあるまいか。

大人と子供に於ける宗教の同異

あの平和な自由な伸び／＼した幼な心の純真さこそ、宗教生活の本質ではあるまいか。彼の罪の自覺や懺悔といった従来宗教と離るべからざるもの、如く考へられたものは、偶此本質の上に派生する波の如きものであつて、元より本質のものではないのである。例へば、旅は辛苦困難の多き程、後日の印象興味も深いが、しかし辛苦困難必ずしも旅の目的ではない。旅の目的は寧ろ他に存するのである。偶辛苦困難の派生した旅が面白いからと云つて、それを理想的旅行とするにも及ぶまい。深刻な罪の自覺や懺悔は、宗教的生活の旅行に於て、屢遭遇する所の興味ある辛苦困難ではあるが、それは決してその目的ではないのである。その人その人に於ける特異の状態であつて、これを以て直ちに一般的普通の宗教生活とすることは出来ないのである。余は尙までも宗教生活の眞實理想は、幼な心に復活しつゝ常に新しく生きて行く所にあると主張したのである。

宗教をかくの如く観する余輩からすれば、大人に於ては唯、理想としての童魂の憧憬であり、

子供に於てはその現實的生活そのものであるといふ差があるで、兒童にも立派に宗教があると信するのである。

しかしながら大人の宗教と子供のそれとの間には、又一面大に異なるものゝあることは云ふまでもない。即ち子供に於ては持つて生れたまゝの理想であり、大人に於ては生活の或經驗を経て後に出来た理想である。それは丁度年寄と子供とが同等に取扱はれつゝ、しかも異なる所あるが如く彼は還暦して六十の三ツ子になつたのである。即ち「改まつて嬰兒の如く」なり。「再び幼時の永遠の春を發見」したものであるから、嬰兒そのもの、幼時の永遠の春そのものとは、自ら異つて來なければならぬ。それは「吳竹のなほき心をためずして」、しかも「ふしある人におほしたて」たものである。要するに、その年齢相應に宗教の相は變つても、「つくろはぬ」「天地のなしのまなる」本質に至つては、些も變らないのである。そこで兒童の宗教は、彼等の自然的生活そのまゝの相の上に於て見出さるゝといふのである。これを譬ふれば、兒童の宗教は自然のまゝなる樹木であり、大人のそれは巧みに人為の施された庭木の如く、人為を以て自然美を損せず、却つて自然の美を助成發揮せしむることによつて、自然そのまゝの相を生かす所に精神があるのである。此意味に於て余は、彼の「兒童はどうかすると、甚だ神に近いものである」。「天國は兒童の

ものである」と云つた。古聖の言葉に深長の意味を噛みしめるものである。之を要するに、子供の生活は雑多不統一にして、屢悪い意味に於ける利那主義者の如く取らるゝが、彼自身の主観から云へば、無自覚ではあるが、より善く生きんとする本然の要求によつて、統一あり調和あり、しかも自由平和な生活を續けて居るのである。これに比ぶれば大人の生活は經驗といふ磨きがかゝつて居る丈に、如何にも一定の主義信仰に生きて居るかに見ゆるが、實は固定し沈滞し切つて、容易に變らないから、自然固陋偏狭であることは免れない。従つて大人の生活は、理想信仰なるものゝ特質を失つて、彼れ自らを理想信仰によつて殺すの結果に陥り易い。そこで吾人は、常に幼な心に立ち還つて、絶えず向上努力せんとする新しい若々しい氣分に生きなくてはならない。これが即ち「幼時の永遠の春を發見する」ことであつて、やがて眞の宗教的生活に進み行く相である。

第三章 兒童の生活と宗教々育

第一節 幼な心と信仰性

白紙主義の生活 子供の觀察は正直である。彼等の心は、直ぐなるもの、曲れるもの、白きもの、黒きもの、そのまゝを有の儘に寫す。そこには大人が知慮分別を通して見る如き曖昧はない。「あれは曲つて見ゆるが、實は何々の理由で左様見ゆるのであらう」とか、「これは黒く見ゆるが實際は白ろいのだらう」と云つた主観化がない。飽くまで見へた通りのありのまゝである。曲つて居るから曲つて居ると見、白いから白ろいと見るのである。そこにはしか觀することを邪廢する主観の複雑さがない。曇りなき明鏡に向ふが如き嚴肅さを示して居る。されば能く言はるゝ「子供は正直ですから」といふ言葉には、單に僞を言はないと云つた消極的意義以上に、動かすべからざる嚴肅さを以て迫るものがある。

余嘗て江戸橋を通つて居た。十二三歳と七八歳との姉妹らしい少女が通りがゝりに、その姉の方が「これは江戸ばしよ」と云つた。すると妹の方が「さうちやないわ、江戸はしよ」と訂正し

たので、更めて橋の標柱を注意して見ると、如何にも「江どはし」と書いてある。余及姉の方は世間に呼び慣された通り、「江戸ばし」といふ主観が手傳つて居るから、妹のやうに正直に讀めなかつたのである。又余の尋常二年になる子供が、讀書しながら「お父さん、これは何といふ字」と尋ねるから、「時と讀むのです」と教へた。しかし子供は怪訝な顔付で「ちがいます、ときではありません」といふ。「時と云ふ字ではないか」といふと、「時と云ふ字とは少しちがつてゐる」と云ふ。それでも余は氣が付かない。「こゝがちがつてゐます」と云はれて見れば、成程活版がまづいたために、「時」の字の作りが「寺」とはなつてゐない。「土」が「上」となつてゐる。毫も主観を差挟まない明鏡の如き子供の眼には、かゝる些細な點までが、そのまゝ明かに寫るのであるかと、驚かざるを得なかつた。又、余嘗て金澤に居た時、某家によつて強盜が忍び込んだことがある。よつとは顔を墨で塗りつぶしてゐたので、家人達は、その人相を警官に告げることすら出来なかつた。ところが彌太郎さんといふ七八歳の兒が「お母さん、昨夜のよつとはお向ひのおちさんだつたね」と云つた。子供の言葉に餘り期待もしなかつた警官は、念の爲めに所謂向ひのおちさんなる人を調べて見た。驚くべし。彼の頸の圍りには墨痕が淡く洗ひ残されてあつたので、今更子供の岡眼に驚かざるを得なかつた。

子供の斯うした正直な觀察、鋭い眼光に驚かざるゝことは決して尠くない。そは大人には既有的豫定觀念や固定概念、その他種々な偏見習慣の類を持つて居るから、その見聞覺知は、これ等主観の色眼鏡に迷はされて、ものそのものゝ真相に徹することが困難になつてゐる。胸に一物を持つて居る丈に、大人の心の明鏡は曇つて居る。そこで普通の人間のやらないよつとは、通常人とは違ふ。少くとも平素交際してゐる人達とは違ふといふ。豫定觀念が強く働いて居るが爲め、まさか向の主人がよつとをやるとは夢にも考へられない。否さうした考を起さうともしなかつたのである。併し子供には、斯うした込み入つた考がないから「はあ向ひのおちさんが眞黒な顔をして入つて來たな」と、有りの儘に見たのである。げに無心な子供の心こそ、明鏡止水である。

複雑な觀念や概念の擲となつて、ものそのものゝ真相を見誤り勝ちの我々は、子供心の正直さが欲しいと共に、「此寶鏡を視ること吾れを視るが如くせよ」との神訓を理想した、我上代民族の純眞な生活を憶がれずにはゐられないのである。その「子供は正直だ」と嘆ずる心には、かうした神の心に近い幼時の心。上代民族遺傳の正直心そのものが、潜在的精神活動として、たえず精神の表面に働きかけてゐることを證する。これをそのまゝ生かす所に我等の眞の生活が展開される。又これを生かさんとする所に眞の意義の宗教生活があるのである。

その信する父母や教師などから話し聞かされた事を、凡てそのまゝ信じ込んで仕舞ふのである。彼等には聞くことがやがて信することである。斷定の世界と眞理の世界とがまた判然しない彼等には、その見聞する一切の事物が必然的に實在の色を帯びて居る。彼等は何のこたはりもなく聞くまゝを眞實として受け容れることが出来るのである。彼の小公子フォントル、ロイの祖父はロイに對して常に荒々しい鬼のやうな態度を採つたのであつた。しかし賢明なるロイの母は、ロイに對して常に言ひ聞かせるのであつた。それは老祖父は世にも稀なる情深き人である。恐らくは世界にこれ程善い人はあるまいと、常に教へ込んで怠らなかつた。ロイは現在眼の前に頑迷冷酷な祖父を觀つ、母の言ふ所を深く信じ込んだ。そして祖父を神の如く敬愛して止まなかつた。信するは力である。斯うして善人として迎へられ、慈愛の人として遇せられた老祖父は、ロイの此天真瀾漫なる信の力に動かされて、遂に人間如實の光を放つに至つた。そして眞實ロイが信じた如く、慈愛に富む祖父と生れ更つたといふ物語がある。此場合母の斷定そのまゝが彼に取つては眞理であつて、無上のオーソリティーであつた。眼前のこれに反する事實を以てしても、猶ほ阻害することが出来ない程の權威として受け容れられた。そは絶對の眞理として何等の抵抗

もなく信じられ、又かく信することは純眞なロイに取つては、子供の自然であつた。父母教師の云ふことは、それ等の人々の言葉であるからといふ以外に、何等の理由なしに信じ込むのが、子供の一大特徴である。されば父母教師の信する所、及社會共通の信仰の如きは、一種の權威としてそのまゝ彼等の信仰となるのである。

斯うして多くの兒童には、神を怖れ或は信することを教へられ、それが彼等の信仰の如くになつて居る。併しながらこは彼等の信じ易い心理に付け込んで、偶大人の宗教が紛れ込んだのである。元來彼れ自らの思慮を絞つて打ち込んだものでないからして、彼等の經驗が重ねられ理智が発達するに従つて、それ等神佛に對する意識に變化を來すのは寧ろ當然である。十四五歳になつてから、一時反宗教的とも思はるゝ態度を示すのは、かうして新たに發達した理智作用が、嘗て教へ込まれるまゝを忘れた神佛に對する、懷疑となつて現はれたものである。然しながら一度その生まゝの頭腦に刻み付けられた神佛の意識は、決して消失するものではなく、強い潛勢力となつて懷疑思想を支配して居る。そこで懷疑は從來の信仰を打ち壊はすといふよりも、新しく擡頭した理智作用を如何に屈服すべきかに働いてゐると見る方が、眞實に近いやうである。かくして人々によつて懷疑時代の長短、その程度に差異はあるが、幾多の内的苦闘の末、多くは幼時

に植ゑ込まれた信仰、少くともそれに基いて作られた信仰を確立するものである。

第二節 兒童の信仰性と宗教教育

兒童の生涯を決定する力 吾人の人格なるものは、主として無意識界に於ける潜在的精神活動によつて決定されるものであるといふことは、前章第二節に於て既に述べた所である。實際、明鏡止水の如き無心の幼な心に一度印象された影響は、その何たるを問はず彼等の生涯を通じて消失しない類化の規範となつて、その後につづつて来る所有事物を主観化しまたそれを處理する力、いはゞ彼の生活の基調となるのである。生れ故郷の言葉やアクセントは、それ／＼深く印象して、その後他郷に於ける永き生活にも破壊されず、彼は依然としてその方言國訛りの傳燈者であることは、誰れしも經驗することである。某鐵道會社の重役の談に、「子供に無賃乗車をさせることは結局會社の利益である。それは子供時代に充分旅行の樂みを味はせて置くと、その成人の後も旅行好になるからである」と云つて居る。又ライオン齒磨本舗が、特に子供用齒磨を賣出したのも、彼等の生涯を通じて、ライオン齒磨を愛用せしむる基を作る爲めであるといふことである。又某政治家の談に「國民は對外政策と云へば、たゞ強硬の二字あることのみを知つて、多少

でも之に反することがあれば、直ちに外交軟弱、國際的地位の低下を叫ぶ癖がある。世界の情勢思想の推移等に對しては深く顧慮する所もなく、事毎に、軟弱だ失敗だと騒ぎ立てられては、それこそ國際的孤立無援となるを宛れない。特に有識者間に於て斯うした頭腦の持主の多いには驚く。しかし上下擧つて、小學校時代に——太陽は日本のものだ、外國を照して遣るのだ。日本は小さくても頭だ、歐羅巴は手足だ。だから汽車(足)や機械(手)などを發明する。亞米利加は胴だ。だから大きくても馬鹿で(水戸の相澤伯郷氏の新論中の所言)——と云つた。自尊排他主義的攘夷論を吹き込まれた人々の事だから無理もない。小學校時代に無理解のまゝ入込んだ思想程強いものはない。後に入つてくる如何なる思想の力も、それには打克てない程の底力を持つて居ることを覺つて、今後の小學校教育には十分の注意を拂つて行かないと、人類共存の大精神をシンミツと味到させることは出来まい」と言つて居るが、大に味ふべき言葉ではあるまいか。

殊に彼等の肺肝に到徹するやうな宗教的刺戟は、最も強く最も深く彼等の心魂に印象するものである。

幼時の感化と余の信仰生活 余は眞宗の某寺院に生れたものであるが、両親が早く世を去つた爲め、六人の兄弟姉妹はそれ／＼離散するの止むなき悲運に立ち到つた。當時まだ五歳であつ

た余のみは、その後へ坐つた住職夫妻の酷遇の下に、獨り淋しく取り残されたのであつた。人面鬼心と云はふか彼等夫妻の虐待は、幼い身のよきも耐え得たことよと、今も猶思ひ出す毎に戰慄を禁じ得ないのである。斯うした涙の中にも、私の心を明るい世界に導いてくれた者が、唯一つあつた。それは村の神職夫人の親切であつた。寺の住居からは遠く離れた本堂裏の闇黒部屋に一人寝さゝれた幼い余は、神職夫人のものやさしい姿を、見知らぬ亡き母と慕ひつゝ、幾夜を泣き明かしたことであつたらう。廣い天地に頼るべき人もなき余に取つては、此神職夫人こそ第二の母であつた。私は屢此母の家に遊んでは、共に神様を拜んだ。拍手も打つた。會々遊び忘れて夜遅く寺に歸り、門に入るを許されない時など、泣きながら第二の母の下に走つた。微笑を以て迎へてくれる夫人の親切は、百千の説教よりも有効に小さい胸に迫つた。「佛の慈悲を説く僧侶でありながら、何んとした無慈悲な仕打であらう。可愛そうに。だから私は佛教なんて大嫌いだ」と獨語する夫人の言葉は、一々尤もに聞へた。そして親のやうに愛してくれる此夫人こそ、彼女がいつも聞かしてくる神様のやうに慕はれた。余が十三の時に、此第二の母も亡くなつて仕舞つた。追慕の情禁じ難く、余は衷心から涙と共に、神様と夫人の靈とを拜んだ記憶は、今も鮮かに生きて居る。斯うした幼い經驗が、將來私の生活を決定する信仰を生まふとは誰が想像し

得るであらう。

しかしながら余は依然寺の子であつた。その後も矢張り法衣を着せられ佛に事へせられた。その後師範學校に在學中、某基督教々師の宅に出入したのが縁となつて、基督教を學び宗教に興味を持ち始めた。そこで余は東京に出て真宗中學を経て真宗大學に入り、前後七年間佛教特に真宗の教義を學びつゝ、傍ら基督教々會に出入することを怠らなかつた。然しながら私はその何れの信者でもなく、全くの無宗教者であつた。無信仰な職業的宗教家が、無信仰な職業的宗教家を製造する宗教學校に於ては、とても生きた信仰に觸れることは出来ないことをしみじみ感じた余は、それ以來學校の課業はそこ／＼に、専ら倫理學書を耽讀した。「人類は即ち神である。之を崇拜するの儀禮は、即ち人が人類に對する愛情の發表された種々の形式に外ならない」といつた、コントの人類教にぶつかつて、無性に喜れしがつた。又日本倫理學史を讀んで、垂加神道の「上古の神は眞の神にして人にあらず。然れども人を離れて神なし。人々慾を去り、本性に復すれば、神人唯一の妙境に到達す」とふ言葉に接して、コントの言葉と思ひ合せて、眞の宗教はこゝだと思はれた。それ以來神道方面の書を讀み始めたのである。斯うして年限が來たので押し出さるゝやうにして、學校を卒業させられたが、さて確たる信仰

もなく、どうして生活すればよいのかと殆ど途方に暮れた。止むなく多くの宗教學校出身者がやるやうに、學師布教使てふ肩書を振り舞はして、信仰の押賣りに一年有半を無意義に過ごした。持たない信仰の宣傳ほど心苦しいものはない。余はかゝる矛盾に耐え切れなかつた。その裡に修身科教育科の中等教員免許状を得たので身を教育界に投じ、その後約十年間師範學校女學校に奉職した。此間余は前の矛盾の生活苦から免れ得たけれども、自己の信仰問題は依然として残されてあつた。さればこの間に於ても宗教書類を手放すことは出来なかつた。

その後職を辭して東京に出で閑散な生活に入つてよりこゝに十有二年、靜かに讀書の機會を得ると共に、求道の念に驅られてあらゆる宗教書類に讀み耽つた。

機縁が熟したといふのであらう、何時の間にか余は、神代以來の我惟神道の信仰生活を慕ふやうになつた、その全我活動的生活、蓋直に信じたまゝを生活せんとする努力に生きつゝある生活は、余の全體を捕へ。そは私が久しく望んで得ざりしものを、今與へられた喜びを以て、直ぐに余そのもの一つになつた。余の惟神道的生活はこゝに始まることゝなつたのである。

顧みれば永い余の生活に於て、幽玄らしく見ゆる教理を味つたこともある。高遠らしく聞こゆる眞理を弄んだこともある。しかしその幽玄なる教理も高遠なる眞理も、遂に余を囚へることは

出来なかつた。余のどこかにそれ等の教理や眞理を受け付けけない一種の不足感が伴つて居た。換言すれば、余の潜在的な精神活動が首を横に振つて居たのであるが、惟神道的生活を始むるや、余の全我は吸ひ込まるゝやうに動いて行つた。

余はこゝに、嘗て余を愛してくれた神職夫人を思ひ出さずにはゐられない。あの時余の精神に深く喰ひ込んだ神様に對する憧憬が、精神のどこか深い處に潜在的活動力となつて爾後の約四十年間、余の求道過程の上に、暗々裡に働いて居たことを信せずにはゐられないのである。而して幽玄な哲理及高遠な理想は、余の精神の最下層部にあつて、意識界に向つて發動せんと蕩がきつゝあつた潜在的活動力を堰止めて居たものであつた。しかし最後の勝利は、幼時に植ゑ付けられた強い印象であつた。之を要するに、余の求道の徑路は、幼時に於ける宗教的感化を發見するまでの苦しい經過であつたのである。此經驗は潜在的な精神活動の如何に偉大なるかを證すると共に、入信の徑路は、彼の回心といつた急激な動機によるよりも、斯うした永い生活の裡に漸次に養はるゝことも屢あるといふことを證明するものである。

第三節 兒童の斷行力と宗教々育

信即行の生活 兒童に取つては聞くことは信することであると同時に、^{〇〇〇〇〇〇〇〇}やがて行ふことであるといひ得る。兒童には強い模倣性がある。彼等は何か見て居る間に強い衝動を感じつゝ、不知不識模倣して居る。一人の子供が菓子を食つて居ると、その周囲を取り巻いて他の幼兒達が、同じやうに口を動かして居ることは屢見る所である。彼等には又旺盛なる想像力がある。女兒がお人形を世話して遊んでゐる時は、お人形は單なるお人形ではなく、女兒の強い想像力が、お人形にも生命を吹き込む。そして自分は純然たる母になり切つて、生きた赤ん坊の世話をすると同様に、本氣で愛して居る。自分の好きな偉人の話を聞くと、その強い想像力を以て自らもその偉人になり切ることが出来る。余の知人に八九歳位の男兒があつた。或雪の日、その友達と二人して何處かへ出て行つたきり、夜になつても歸つて來ない。家族の者は大騒ぎをして探し廻つたが、漸く翌朝になつて、附近の某家の廐に夜を明かしたのであるといふことが解つた。どうしてこんな奇抜な真似をしたのであるかを段々調べて見ると、前日學校で福島安正氏のシベリヤ騎馬旅行のお話を、先生から聞かされたのであつた。彼は福島安正氏の勇敢なる行爲

に痛く感激した。そして友達と二人して、折柄の雪の夜を、シベリヤの荒野に於ける福島氣取で、否福島それ自身になつて馬の傍に眠つたのであつた。

大人であれば、智慮分別に阻害されて信することも困難である。たとひ信じ得たところが、それを實行することは一層困難である。いろ／＼の複雑な思想觀念に阻まれて、有耶無耶に過ごして仕舞ふことが多い。そこになると兒童は痛快な斷行家である。彼等は斷行を阻む思慮分別を缺くのみならず、寧ろ斷行を煽ふる模倣の衝動と、想像の翼が惠まれてゐるからである。

殊にそれが彼等の信頼せる先生の言はれたことでゞもあると、これを絶対の眞理として遵奉する。先生が足袋を穿くなと言つて聞かせると、雪の日でも素足で登校する。此際子供いたはしの両親が、いくら道理を説いて聞かせても全く無効である。彼はたゞ「先生が言はれたから」との唯一の理由で斷行する。親が心配しようが、足が痛たからうが、總て問題でない。唯聞いて信じたことを斷行せねば氣が濟まないのである。之も余の知れるお嬢さんであるが、先生の言はれたことは一言一句も違へず實行するので有名であつた。先生が常に「學校の行き復りには道寄りしてはならない」と教へて居た。そこでこのお嬢さんは、學校の往復にはハガキ一枚でもポストへ入れてくれない。登校の途中に他に立寄るといふことは、先生の教に反するといふので、必ず別

にポストへ往つて、更に登校するといふ調子で、随分親達を手古摺らせたのである。聞即信、信即行の子供の心理を雄辨に物語つて居る。こゝになると彼の絶對的動機論者であつた我上代民族が、唯一の至誠の動く前には、名譽も利害も權力もない、向ふ先き見ずに斷行して悔いなし、我惟神道の精神に頗る似通つた所がある。

信仰とオーソリチー

元來宗教的信仰なるものは、その信じた所を斷行する所に意義がある。詳しく言へば、その教へられた所を、絶對の眞理として受け容れ、その受け容れたものが自己の精神活動の中心となつて、自己の生活全體がこの中心に統一されつゝ、活動して行くやうになつてこそ、始めて信仰の本義に觸れ得るのである。これが爲めには、その受け容れられた眞理なるものが、單に主觀的に絶對性を持つに止まらず、客觀的にも絶對性を持つものと信じられなければならない。換言すれば、種々の事件にぶつかつて得た體驗の結果として、自己の主觀に生れた信念であつても、それは唯自分だけが斯く考へ斯く信じてゐるが、その實はどうも怪しいものであるといつた程度の信念では駄目である。自己主觀の所産であるといふことすら氣付かずに直ちにもう絶對の直理そのものとして、自己を動かしてゐるといふ程の權威あるもの、即ちそれは客觀的に存在し、無上の權威を以つて自己に臨みつゝあることを、感ぜざるを得ないと云つた

ものでなくてはならない。斯うした強いオーソリチーとしての信仰にして始めて、全我を動かし死を賭しても、その所信を賞かんとするの力が湧いて來るのである。彼の宗派宗教に於ける教權なるものは、實は斯うした權威の形式化せるものである。即ち彼等は單に經典の言葉なるの故を以て、或は開祖の教なるの故を以て、無條件に信じ切つて居る。即ちその眞理は客觀的オーソリチーを以て信者の胸に迫つて居る。併し余は、或る學者の如く教權を以て、宗教成立の根本的要素の一と數へんとするものではない。教權をそのまゝ無條件に受け容れるといふことは、文化の程度の低い所謂善男善女にのみ可能であつて、苟も批判力が盛んに活く理性の持主には出來ない仕事である。そこには教權を信する前に、少くとも先づ主觀の共鳴を體驗せねばならないからである。そこになると胸に一物をも持たない兒童、理智的批判力の發達しない兒童は、善男善女に頗る似て居る。即ち彼等はその強い模倣性と斷行力を以て、聞くがまゝに信じ、信じたまゝを實行することが出来るのである。しかしこゝに又、兒童の宗教教育に十二分の注意を拂はねばならない所以が存する。何故かならば、彼等の模倣は盲目的であり、彼等の斷行は無分別であるからである。勿論、兒童の注意は暫くも停止しない。彼等の心は轉々として變つて行く。又彼等は將來理智が發達し經驗を積むと共に、嘗て妄信した信仰に向つて、理性的反省を加ふることゝ

る。しかし前にも一言して置いた通り、たとひ成人の後、彼等が合理的宗教を確立するとするも其根柢をなすものは、矢張り幼少時に於ける先入觀念が、潜在的精神活動として強く働くといふことは、疑のない事實であるから、幼少時に於ける宗教的感化の内容に就いては、細心の注意を要する譯である。

第四節 子供の信仰と人格的權威

子供は信じ易い、而して信じた所を直ぐ斷行する。その基く所は常に或種のオートンチアリーを感じるからである。しかもその權威は教の眞理なることを信ずるからではなく、教の由て出づる人格を信賴するのである。元來具體的な而して現實的な子供の心理は、抽象的理論を玩味し、非人格的な權威を認むる丈の能力を持つて居ないから、教の眞理なることを信じて、而して後にその教を垂れた人を信ずるのではなく、先づその人の權威を認むるが故に、その教にも服従するのである。教の眞理非眞理は問題にはならない。彼等はたゞ「親の命令であるから」「先生の教であるから」といふ以外に、それを遵奉するに何等の理由がある譯ではないのである。即ち彼等は、具體的有形的な人格的權威たる親、先生に服従するのである。

元來子供は、その未だ母の懷に抱かるゝ頃から、既に他に信賴する傾向を本能的に表はすものである。この感情は主として恐怖の本能と結び付いて、益顯著に現はさるゝ。夜間便所に行くに姉に付添ふて貰はねば安心が出来ない。雷が鳴れば母の袖の下に潜伏する。火事と聞けば父に縋り付く。地震と云へば先生の下に駆け付けると云つた風に、何かを信賴せずにはゐられないのである。此幼時の信賴が如何に強いものであるかは、殊に依賴心強き女にはその四五十の分別盛りになつても、不意に轟く電鳴に思はず「おッ母」と叫ぶによつても解る。道理の上では釋迦が説いても權平が言出しても、眞理は眞理、非眞理は非眞理であるべき筈である。眞理非眞理は法そのものにあつて、之を説く人にあるのではないのであるが、それでも「孔子曰く」「ソクラテス曰く」と云へば、法が一層確實性を帯んでくる。近くは「何々博士曰く」と云へば、何んでも間違のないものと思ひ込む。その法即説の眞理非眞理は敢て穿鑿するまでもなく、悉く眞理と信じ込む。即ち理窟の上では「法に依つて人に依らず」と云ひながら、實際は「人に依つて法を信ずる」のである。幼い時から人を信賴した習慣が成人の後までも支配して、不知不識人を信せしむるのである。以て如何に幼時に於ける信賴心が強いかを知ることが出来る。特に宗教的眞理に至つては、前にも説明して置いた通り、或人格に包まれてこそ、始めて眞理としての權威を持つも

のであるといふことは、耶蘇なる人格を離れては考へられない基督教に熱があり、又「法に依つて人に依らず」と標榜する佛教徒が、嘗て大乘非佛説に對して大騒ぎしたのに依つても明かである。して見ると「人に依つて法を信する」といふことは、豈たゞに幼少年者のみに局つた譯ではないやうである。殊に子供に於ては飽までも人格的權威に信賴し、しかもその信賴は絶對的にして、その間餘念を狭む餘地はないといふのが、子供の特徴である。

この事實は兒童の宗教々育に於て、その教ゆる者の人格といふものが、如何に大切であるかを示すのみならず、兒童の神佛に對する意識を考察する上にも、重要な特徴である。何故かならば、兒童のこの人に信賴する感情そのまゝが、纏て神を信賴するそれであるからである。否時としては、彼等は父母教師を神様であるとすら、考へて居る場合が決して尠くはないのである。

第四章 兒童の宗教觀

第一節 兒童の神觀

神と佛とに對する相異 兒童の神觀に關して、歐米の學者によつて調査發表されてゐるものも決して尠くない。しかしそれをそのまゝ取つて、我國兒童の神觀を考察することは甚だ正鵠を失する。何故かならば、基督教國たる歐米兒童の神觀には、自然基督教の神の意識が現はれてゐる如く、神佛二教の影響せる我國兒童には、自ら神道及佛教の神佛觀が鮮かに窺はれる。而して基督教の神と日本の神佛とが各異る内容を持つ如く、歐米兒童と日本兒童との神觀も亦異るのはいふまでもないからである。されば日本兒童の神佛觀を研究するには、歐米學者のそれ等は有力な参考とはなるけれども、日本兒童には又それ〴〵特別の調査を要する次第である。しかし此方面に於ける我國の研究は、僅かに二三の人士によつて僅少な材料が提供されて居る丈であるから、正確な結論を得ることは甚だ困難である。今それ等の僅少な調査及余の調査に基いて、その大體を考察するに、

1. 佛に關する意識は、佛教殊に他力教の盛に行はれて居る地方と、その以外の地方とに依つて非常な相違がある。その最も著しきは、前者に於ては阿彌陀佛を中心に、子供流な神觀を相當に持つて居るに反し、後者は一般に死者或は祖先を以て佛と考へてゐる。従つて前者は佛に對して愛護の恩を感じ、親愛の情を示して居るが、後者は、幽靈、人魂、墓場等を聯想して、佛を氣味悪いものと觀じてゐるのである。その佛を祖先と考へてゐるものは、その信仰の内容が頗る神道の神觀に類して居る點がある。

2. 日本の神に對する觀念は、多くは小學校に於ける國語讀本、建國の歴史及び地理科に於ける著名神社の記事等から來て居るやうであるが、又神社の祭禮式典等より、相當神に對する智識を持つて居る。

3. 佛と神とに對する差異點を擧げて見ると、

(イ)、八九歳までの幼兒に於ては餘り大差は無いやうである。即ち神佛は「人形のやうな形をして神棚佛壇の中に」住んで居て、吾人を見て居られる。そして行儀のよい子供に「よいものを與へて下さる」とか、「よい子供にして下さる」と云つた、漠然たる能力を信じてゐる。

(ロ)、十一二歳以後になると、その相異が著しく、佛は慈悲柔軟な愛護者であり、神は正義正

直の監視者であるといふ色彩がはつきりとしてくる。殊に十二、三歳の子供には、日本の神として建國以來の偉人、傑士及忠良の士は、この時代の少年の特徴たる、英雄崇拜の精神と結び付いて、非常に明瞭に且つ感興を持つて意識されて居る。

(ハ)、神佛の能力に就いては、佛は我々を助けて下さる方、正しい善い人にして下さる方として、之に親愛の情を示してゐるが、神様に對しては、家庭の幸福、國家の安寧を保障して下さる方として、之を崇敬して居る。

(ニ)、神佛を拜む感じに就いては、幼少者はいづれも物質的幸福を與へて下さるとか、正直な勉強の出來る善い人間にして下さるといふ願を以て向つて居る。年を取るに従つて、佛を拜むと「有り難い」「嬉れしい」氣持がするといつた、精神的な満足を感じるやうになり、神は不正な者を罰するといふ正義の感を以て向ふものが多い。即ち愛神ではなくて敬神である。一般に佛に對しては親愛の情を感じ、神に對しては威嚴を感じてゐるやうである。

以上は、その極めて大體を瞥見したに過ぎないが、要するに十歳以後のそれは、餘程大人の宗教意識が混じてゐることは疑のない事實である。殊に學校に於ける、建國諸神の物語や歴史地理科の影響も著しく、又佛教日曜學校の勃興せる今日、その教誡感化によるもの多きことも認めね

ばならない。されば比較的純粹な子供の神觀としては、十歳以前に之を求めなければならぬのみならず、余は寧ろ、幼兒即四五歳より八九歳までの兒童に於ける宗教的教育の必要を感じる者なるが故に、項を更めて、此時代に於ける兒童の神觀に就いて考察したいと思ふ。

幼兒の神觀 物我の區別未だ判然しない三四歳の幼兒は、凡てのものを自己同様生けるものと考へて居る。柱に頭を打ち付けて泣く時、母が柱を打つてやれば満足する。植木に殘香を打ちかけて、「どうぞおあがり〜」と頻りに挨拶する。人形が思ふやうに立たないと云つて怒る。土屏の破れ目に小さい手を差し入れて、恰も人間の腋下をこそぐる如き態度で、「コチヨ〜」と云ふ。これ等は皆柱、人形、植木、土屏を以て自己同様、感覺や運動を有するものと考へるからのことである。斯くの如く彼等幼兒には、世界の森羅萬象は凡て生きて居るのである。それは丁度我古代民族が、自然を人格化して國生み神生みの神話を殘こしたのと同じ心理である。余の子供の如きもお月様はお母さんで星はそのお坊つちやんである。而してその大きな星は兄さん、小さいのは赤ちやんであると信じて居つた。又その月の斑點を説明して、お月様の顔に墨が付いて居る。鼻は大層大きい耳は遠い、から見へないと云つた。斯うした月の見方は、埃及や印度に於ける月や太陽に關する神話と規を一にしてゐる。幼兒や原始人の眼には、月や星も人間同様に生

きものと映するのである。そして原始人があらゆる智能を絞つて作り上げた太陽神話の如く、幼兒も彼の有り丈の智慧を絞つて説明を試みる。そこにはこの不可思議なる存在に對する、彼等の強い求知心が動いてゐる。中には原始人が月や太陽を禮拜した如く、楓葉のやうな兩手を合せて月を拜む幼兒も見受ける。即ちこの不可思議體に對する驚異が神秘の感をそゝり、何か力あるものとして兒童に迫るのであらう。幼兒は又屢、自分の智慧で分らないものに對して、神わざであるとの推斷を下す傾向がある。瓦斯のメートル器を見て神の御家だと云つて禮拜する子供がある。神社の前で負ふた子に教へられて、今更の如く頭を下げる親もある。思はぬ場所に脱ぎ棄てられた下駄を見て、神様が脱いで行つたのだと緊張する。かうした心理は神話時代の民族心理と似通つて居る。即ちあらゆるものを人格化し、更に進んで神化せんとする傾向を持つて居るのである。

次に五、六歳の幼兒になると、物我の區別が次第に明瞭になつてくると共に、前に云つた荒唐無稽な觀方は漸次消失してくる。しかも彼等の世界はまだ〜不可解なものに充ちて居る。そこで彼等はその總てを神化せんとする傾向を盛に働かせて、神の力を認めんとする。神棚や佛壇の中に於ける神佛が、人間と同じ姿をして、その偉力を示すものと感ずるのは此時代である。余の子供は神に供へた供物がそのまゝ残つて居るのを見て「神様は昨日から御留守だ」と云つた。

又此時神棚に御神酒を供へると、「あ、神様は馬鹿だ」といつた。余が常に酒を飲む人は馬鹿だと教へてゐたからである。これ等は神を以て人間同様に飲食し給ふものと思つて居るのである。次に八九歳にもなると、家庭や學校に於て神に關するいろ／＼の話を聞くことによつて、彼等の從來持つてゐた神の意識を、一層鮮やかなものにする。しかし彼等は具體的のものよりは解らないから、神の如きも頗る人間的に考へる。神はにんぎやうみたひのかたち「ねむつてゐるやうで、人の形になつてゐる」と云つた風に考へる。そこで親や先生が神の能力を説明しても、そのまゝでは解らない。「神は偉いお方で何んでも出来る」と教へると、彼等の頭の中には、身體巨大にして腕力飽まで強きあるものを描いてゐる。この描いた偉大な人と、現在見てゐる小さいお人形のやうな神との間の、矛盾を結び付けやうと努力する。そこに彼等の強き想像力が働いて子供流に解決して、「は、あ、すると神は忍術を使つて、どんな所へでも自由に出没するのだな」と云つた風に頗る童話めいた形に改造して、始めて受け容れることが出来る。かゝる考へ方は大人に取つては頗る滑稽ではあるが、子供には何の無理もない自然の解決である。彼等には、驚くべき想像力が恵まれてゐるからである。

愛は神を生む 兒童の神を拜む氣持は、如何にも具體的であり、且利己的である。「福が來ま

す」勉強がよく出来るやうになります「偉い人になれます」といつた風である。しかしながら余は、子供を以て單に利己一逼のものとする學説には反對するものである。余は寧ろ彼等の持つ愛他傾向が、神を生むのであることを高調するものである。勿論純愛他的の愛は、多くの學者のいふ如く、一定の社會生活を経た後でなければ發達して來ないであらう。しかし幼兒にも愛の現象はある。母や乳母の愛を味つて、その受けた愛を母や乳母に返すことによつて彼は満足を感じ、又見知らぬ幼兒が相會した場合、互に好意を以て親み合ふことは大人よりも早く且つ深い。殊に女兒が人形を愛する時、如何に濃厚な母性愛を示すかを見よ。勿論その動機は純愛他的のものではないが、やがてその萌芽ではあるまいか。されば幼兒の愛を以て單に利己的動機に出づるものとして、一概に葬り去ることは餘りに慘酷である。寧ろ愛他的傾向がその本來的のものではあるまいか。「神は私達をまもつて下さる」、「佛様は私を可愛がつて下さるお方」と彼等が漏らす言葉には、確かに愛他的の愛を味得してゐるやうに思へる。又彼等の父や母に對する愛を押し振げて、神の愛を感じせしむることは出来る。現に「神様は先生のやうなお方です」と云つて居る。先生から感ずる愛を神に結び付けたのである。自己の内にある愛を以て、神の愛を感じ、更に神の愛を自己の内に生かすことも可能である。内在的にして超越的な神を、漠然としたものでは

あるが味ふことは出来るやうである。

余は寧ろ、彼等が親に依つて味つた愛が神を生むのではあるまいかと思ふのである。されば「神は愛なり」といふよりも、「愛は神なり」と云ひたいのである。愛を感じぬ子は、親も單なる大人でしかあるまい。その親を親たらしむるものは、愛を以て向ふ子供の心ではあるまいか。愛が親を生み更に神をも生むのである。されば親は最初の神である。少くとも親に對するあの絶對の信頼がやがて神に對する信頼であると思ふのである。

之を要するに、子供はその幼少時から、既に或る偉大な力に信頼せんとする傾向を持つて居る。しかしながら、その偉大な力は彼等の奇抜な想像が加はる爲め、時としては頗る滑稽、みだものに化して仕舞ふ。子供の理性が発達してくると共に、これ等滑稽じみた偉力に對しては、最早や信頼しなくなるのみならず、却つて反感を持つやうになる。多くの青年が宗教を馬鹿にするのは、その原因は決して二三ではないが、その主なる原因は此幼少時に於ける荒唐無稽の神觀をそのまゝ持ち續け、漸次啓發さるゝ理性のメスを以つて、それを解剖し盡すことに起因する。實際現今我國の少青年の懐く神なるものは、實に憐れなるものである。幼時に於ける幼稚な神觀を、そのまゝ茶化しあるか、或は打ち棄てゝ顧みないといふ状態である。かゝる連中が、一朝信仰の

切要に遭遇した場合には、低級な迷信に陥つて、自己を胡魔化すに至るのは、蓋し自然の成行きではあるまいか。

そこで余は、彼等がまだ幼少にして信頼心旺盛なる時に、その信頼心の向ふ對象、即ち彼等の神觀を正しく指導してやるといふことが、殊に必要であると信ずる。それには基督教や佛教の如く、大人の智慧でいろいろに作り上げられた六ヶ敷い神觀に基くものを、そのまゝ子供に與へては、それが子供の世界を離れて居る丈に、子供は益々空想を強いらるゝ。斯うしてより滑稽な神觀を懐かせることになる恐れがある。されば子供に示す神は、かうした架空的なものを避け、我惟神道に於けるが如き人格的の神が、最も相應しいものであると信ずる。即ち各神社に祀れる神は、嘗ては人として活動した神々にして、その神の功績は兒童にも理解が出来る。そして父母及教師に對する信頼の情を、そのまゝその神に移さしめることも容易である。兒童の理想が発達すると共に、漸次その神觀の内容を高めつゝ、遂には兒童自身が將來、彼自らの理性に應じた高尚な神觀を、構成する基礎を作つてやらなくてはならないと思ふ。要は、兒童の現はす信頼心を枯渴せしめないやうに指導しつゝ、後には彼自身の内なる理想に信頼するやう取計らうことが、最も健全な行き方である。

余が特に幼少時に於ける宗教々育を力説する所以はこゝにあるのである。

第二節 兒童の宗教と罪惡觀

「神の心を以て世の人を見る、人は皆神なりき」。「どうかすると甚だ神に近いものである」子供の心には、凡てのものは神である。「目に見えぬ神の心に通ふ」所の『人の心の誠』そのものともいふべき幼な心には、總ての人を神化せずには止まない力を持つて居る。フオントル・ロイの祖父は此力に觸れて慈悲心を開顯された。婦人ホームの倫落女も此力に觸れて本當の人間にまで立ち還つた。「隠微なく欺詐なき清明心、即ちまごゝろを以て交り得る所には、神の外に何ものもない。まごゝろに還へるが故に能く神を視るを得。神を知るが故にまごゝろ明かなるを得」といつたのは、正に幼兒の實生活を言ひ現はしたものであるまいか。

いつはりの世をまだしらぬ幼な子が

心や清きかぎりなるらむ

思ふこと思ふがまゝにいひいづる

幼な心や誠なるらむ

彼等の心は清き限りである、誠そのものである。然り「いつはらぬ神の心」である。斯うした心的生活をそのまゝ、「吳竹のなほき心をためすして、節ある人におほしたて」得たならば、將に理想的な發達過程であつて、やがて現人神の實現である。そこには、罪、悔改、救、と云つた消極的分子の入る隙もなく、持つて生れた彼等の純眞な生活を生き續ける丈である。之が我惟神道の救であつて、又吾人々類の眞要求であらねばならない。

「人の子」として生れて來た耶蘇は、人の子として極めて自然的な順序を逐ふて成長しつゝ、持つて生れたその神子振を發揮した、彼には罪の自覺は無かつた、従つて悔改の必要もなかつた。今更改つた宗教的經驗もなかつた。彼はたゞ生れたまゝの子供魂を、素直にすらりと伸したまひ、あるから、今教はれたりてふ際立つた意識もなかつたやうである。されば福音主義の基督教者は、耶蘇のかうした宗教經驗を、彼獨特のものとし、是を以て彼が神の子たる所以を證明せんとするのである。而して寧ろパウロ、アウガスチン、ルーテル、ウエスレーの如き、深刻に自己の罪に泣いた人々の宗教經驗を以て、人類に共通する標準的のものとせんとするのであるが、余は寧

ろ自由主義の基督教者と共に、パウロ、アウグスティン等の宗教経験を以て病的のものとし、耶蘇のそれを以て最も健全にして吾人の標準とすべきものなることを主張せざるを得ないのである。此主義の人々が「吾人々類の發達が順調に行つたならば、悔改めの必要はないのである。彼は最初より神と離れないからして、更めて神に復ることの要を認めないからである。耶蘇の生活は即ちそれであつた。宗教的發達過程の理想は、事後の悔改めにあらずして、事前の靈化になければならない。即ち未だ兒童が悔改めの必要の起らない以前に於て、親しく主の化育と訓誨とに親炙薰陶せしむるにある。換言すれば、基督教信徒の生活の理想は、悔改といふことを經驗する必要な點にある」と云つて居るのは基督教中に我惟神之大道を發見したかの感がある。基督教と云はず佛教といはず、その教權を離れて苟も人間の眞實に見入つたとき、そこには必ず神道的精神が横溢するのは、寧ろ痛快である。

勿論余は吾人の實際生活に於て、罪の自覺自己の微力を、全く感じないといふのではない。しかしそれが爲め宗教を以て、所謂「罪に打克つ爲めの方案、若くは罪人を救ふ設計」と計り考ふる思想を否定するのである。換言すれば、罪といふものが絶へて此世に、若くは人心になかつたとしても、宗教は必ず存立する、否、寧ろ無罪生活に於てこそ、宗教の理想が最も完全に實現

さるゝといふのである。彼の多くの人々が、宗教的生活に入る唯一の關門の如く心得てゐる、罪の深感といふものは、偶特殊の人に起つた特殊の一過程に過ぎないものであつて、決して宗教の基礎でもなく、又信仰の根柢でもないのである。しかしその所謂罪の深感なるものが、多くは罪を裝ふことによつて自己をその教理に無理から合はせようとする、不眞面極まつたものであるに至つては、沙汰の限りといふべきである。放蕩息子が罪を悔改めて再び父の膝下に歸るのは、誠に結構なことであるが、始めから天父の家に於ける兒僮として、父を離れない方が猶更結構なことではあるまいか。神の如き幼な子を、態放蕩息子にして罪を自覺せしめ、それからそろ／＼と悔改めさせ、次で父に歸らせると云つた、手數のかゝつた道を踏ませる必要は毫もないではないか。その天真のまゝを、そのまゝ持續せしむることが、寧ろ眞實の宗教的生活であらねばならない。我なやみ告げむとすれど君はしも、あまり稚く美しきかな。彼等は、罪を罪とも知らず、浪花江のそのよしあしもまだ知らずして、しかも『幼な心や誠』そのものを、生活して居るのである。彼等の生活は、丁度我上代民族が罪に心を囚はれずして、祓ひ清め禊ぎ清めて、常に新たな生き／＼した心を以て、至誠の道へと突進した如く、左様に單純である。又我等の祖先が、宗派的固定觀念から解放されてゐたが爲め、彼等の向上的努力を妨ぐる何等の障害もなく、人間性の發

揮、即ち現人神の實現に勇み立つことが出来た如く、幼児も亦頗る氣樂である。自由である。又彼等が罪とか救とかを念頭に置く暇もない程、現實の自己に没頭した如く、幼児も彼れ自らの生活に忠實である。しかも彼等幼児の生活は、罪、悔改、救てふ生活に無用の觀念を持つてゐない丈に、自然の愛の全分を味ふて居る。否、神の愛そのものと溶け合ふて居る。かゝる状態こそ、やがて吾人の理想にして又宗教的生活の本質ではあるまいか。フレエベルが「人の中に潜める神性を保育して、生活上に實現せしむること」を期したのもこゝにある。又釋迦が「奇なる哉、奇なる哉、一切衆生悉く如來の智惠徳相を具ふ」と叫んで、その本具の佛性を開顯することを旨としたのもこゝにある。彼等の「永遠の春」をそのまゝ開顯して行くことが、宗教々育の任務であらねばならない。彼の佛教日曜學校に於て、「人にはたんと悪いこと、あるが習と聞いて居る」と云つた類の、悲鳴を發せしむる如きは、抑も兒童の生活心理を解せざるの甚だしきものといふべきである。

第三節 兒童の宗教と厭世觀

「天國は子供のものである」といはるゝ。實に天國は子供のものであるやうである。大人も均し

く天國を理想とする。しかしそれは飽までも理想境として將來にあるのであるが、子供に於てはそれが眼前に展開されて居る。現實そのまゝの生活がやがて彼等の天國である。大人が生死の苦海と觀する現世も彼等に取つては無上の樂園である。「己先づ神となれ、さらば世は神の世とならん」といふのは、子供の世界に於ける真理である。「心淨ければ國土も亦淨し」といふのも、子供の世界に於てのみ鮮かに證明されて居る。子供の淨き神の如き心は大人の天國を地上に持ち來たしで、今現に樂しみつゝある。大人も子供の如く今現に樂しみたいのであるが、彼等の心はそれを樂むべく餘りに傷付いてゐる。されば望んで得られざる希望を、將來に期すべく餘儀なくされて居るのである。此意味に於て子供の生活こそ、大人も均しく望んで止まない宗教的理想であると云ひ得る。若しも吾人が、兒童の生活を生涯に延長し、更にそれを來世にまで開展せしめ得たならば、それは最も理想的生活であらねばならない。されば大人の悲觀よりも子供の樂觀は、より真理ではあるまいか。生を欣求愛樂することが、何故にしかく淺薄であるのであらうか。又これを悲觀厭世することが、なせそんなに高尚に見ゆるのであらうか。あらゆるぶつた思想の假裝を脱ぎ棄て、赤裸々の人間魂に立ち還つたならば、寧ろ生を謳歌するのが、彼の本音でもあり、且又彼の生の本義に對する正義ではあるまいか。最近青年男女達がさも幽玄の境に探り入るかの如く、

高尚がる悲觀厭世は、彼等がその生に對する信仰の缺乏に基くものと謂はねばならない。

されば余は、兒童をして飽くまでもその天賦の樂觀を完ふせしむることを願ふものである。若しも彼等からその無邪氣な歡喜を奪ふならば、彼等は忽ち意氣消沈、半死半生の老人地味た状態に陥らざるを得ないのである。されば宗教々育に於ては屢利己的宗教家によつて繰返さるゝ如く、徒らに兒童をして現在生活に對して、悲哀失望的な感情を抱かしむるが如き思想は、斷じて避けねばならない。兒童が今現にあるよりも、一層宗教的と爲さんと老婆親切の爲めに、兒童をして彼等の現在を否定し、假想的境地に行かんとするが如き慾望を起さしめんとする愚擧は、兒童の神聖を冒瀆するものである。眞に兒童の現在及將來の爲めに計る教育家及宗教家であるならば、宜しく彼等の現在生活を尊重せよ。そして彼等が今現に樂しみつゝある彼等の生を、益々意義付けてやらねばならない。換言すれば、彼等の單なる樂天を導いて、大生命即神の愛から生れた此世界を樂しむことが、やがて神の意志に順ふて、その生活を完ふすることであり、又さうすることが神の意志を永遠に生かして行く所以の、唯一の道であることを信せしむるにある。これが我惟神道に於ける天壤無窮の理想の徹底味である。此世界は永生不死の大生命の活舞臺にして、眞個に之を尊重し、神の意志を一步でもより多く實現する爲めに現人神を創造しつゝ飽くまでも

生き通さんとする積極的樂天主義に達せしむべきである。

然るに世屢、兒童の心理に無理解なる徒輩があつて、現世を迷里夢境と貶し、「争、妬、悲や、怒、悶に責められて、逃ぐるすべなき罪の世」とか、「げにこそ似たれや花の露や人の世かくて亡ぶるなる」と云つた悲哀の調を、敢て兒童に注ぎ込まんとするのである。何たる横暴ぞや。

由來基督教は特に罪惡觀を極度に高調する。佛教は又殊に厭世思想に勝れて居る。かゝる消極的思想は前に屢論した如く、二教に於ても決して本來的のものではないのであるが、從來高僧聖者或は熱烈なる求道者によつて、偶深刻に罪惡に泣き、極度に厭世するものがあつた。而してそれが如何にも際立つて見ゆる所からして、一般をして厭世悲觀を以て宗教の本質でもあるかの如く思惟せしめた。少くとも宗教の門に入るには、必然的に通過しなければならぬ關門と心得しむるに至つたのである。しかしながら、それは或特殊なる人の上に起つた特殊相であつて、之を以て一般のものと考ふことは、甚だ無謀といはねばならない。見よ、今日一般に健全なる思想を抱く者にして、眞にかゝる哀調に耳傾くる者、果して幾人あるか。況んや天真流露、たゞ此生の歡喜に餘念なき兒童に之を強いんとする、寧ろ余はその御苦勞千萬なる徒勞に感謝しなくてはならないのである。

第四節 兒童の宗教と現人神の理想

以上余は、子供の生活を主として、その宗教意識を述べたのであるが、兒童の宗教が如何に我惟神道的精神に似通つて居るかは、最早や贅言を要しないまでに、讀者は推察せられたことと思ふのである。

日々に伸びゆく子供の身體には、又日々に伸びんとする精神を宿してゐる、彼等は専ら進歩向上を欲して止まない。「僕が兄さん位になつたら」僕がお父さんのやうに大きくなつたら」と、事毎に自己が進歩發展することの豫想を樂んで居る。彼等は實に伸びゆく生命をさながらに生きて居る。「お母さんが百にもなつたら、お乳は足の所まで下つて來るのでせう」「お父さんが百になつたら、天井を突き抜けるでせう」とは、もの皆が伸び且つ伸びて止まないと云ふ、彼等の信仰から來る斷案である。みんなは僕をチビだチビだと云ふが、僕が五十になつたら、先生よりは、すつと大きくなりますよ、先生は割合に小さいなあ」といふ、何處々々までも伸びて行く、無限に伸びて行く生命そのもの、聲がするではないか。

彼等は又彼等自身の力を信じてゐる。彼等は父母先生に對する強き信頼を特つと共に、又彼等

自身の力を信ずることが強い。「お父さん、之は僕が作つたのですよ。先生にも誰れにも手傳つて貰はないで、僕獨りで作つたのです」と得意満面である。「お母さん、僕獨りで洗つたのですよ。頭も顔も手も足もね。お父さんに洗つて貰はずだよ」と、お湯にほとつた顔を一入輝かせる。斯くして彼等は、彼等が神の如くに信ずる父母教師のすることを、彼自らも爲し得たりといふ所に無限の歡喜を味つて居る。父母教師の勝れ技を、神の働きたと驚異の眼を睜つた彼等は、次ぎには之を自己に實現することによつて、より以上の喜びを感じる。神の力を信頼し、神の力を自己に實現することに無限の興味を持つことは、兒童の先天的性情である。彼等は自分自身に神となり得る力のあることを漠然と信じてゐる。我惟神道に於ける現人神の理想は、既に子供に内在する神性そのものではあるまいか。

神は子供の信頼の情に對しては、客觀的超越的存在であり、その自己信頼の情に對しては内在的主觀的事實である。内在的にして且つ超越的な神の信仰は、既に兒童の素質に具つて居る。今現に彼等があるまゝの永續ではなく、向上又向上、天壤と共に窮りなき永生の萌芽は、既に彼等の内に見出し得る。彼等の現在に單なる現在ではなくして、彼等の永生の裡に浮びたる現在にして、無限の價值を含むものである。大宗教的な生活の面影は、遺憾なく兒童の生活に現はれ

て居る。余は斯うした信仰の上に彼等の宗教々育を進めて行きたいと思ふのである。

第四編 教育編

本編は、以上説き來つた余が兒童觀と、惟神道的精神とに基く宗教的教育の實際的方面に關する、根本方針を明かにせんとするものである。勢、從來の宗教々育唯一の機關と考へられて居る日曜學校にも、多少論及せんとするものである。

第一章 宗教々育の過去現在及將來

第一節 歐米に於ける宗教々育の狀況

宗教と教育との分離問題 歐米の文明は基督教を除外しては考へることが出来ない。哲學であれ文學であれ、さては繪畫に彫刻に音樂に、其他一般の日常生活に至るまで、宗教は深く其根柢となり血脈となつて、今日に及んで來たのである。殊に教育と宗教との關係に至つては、頗る密接なものであつて、寧ろ宗教が教育といふものを支配して居つたといつた方が、適切であるかの觀がある。

斯の如くにして十八世紀の中葉まで來つたのであるが、フランス革命の頃から、宗教と教育と

を分離すべしといふ者が、そろ／＼頭を擡げて來たやうである。フランス革命は一方からいへば當時の一般思潮をなした理性主義の勝利といふべく、從來の傳統的宗教の價値は、之を認めなかつたのみならず、其掌中にあつた傳統的社會組織は、全く階級主義、貴族主義であつたが爲め、革命はこれ等の舊習を打破すべく、先づその傳統的宗派宗教に突衝つて行つたと云ふことは、蓋し當然なことであつたといはねばならない。茲に宗教と教育とを分離しやうとする運動も起り、長い努力の結果、一八八二年以後の佛國小學校は、其學科目から宗教科を除き、新たに修身科公民科を設けられることゝなつた。

獨逸は一八一八年、ワイマール憲法會議に於て、學校教育から宗教科を除くべきや否やが大問題となり、社會民主黨は専ら宗教科の廢止を主張し、宗教家側は極力その保存を固守し、所謂統一學校問題を惹起して紛擾動亂を極めたが、民主黨を代表として各社會黨は、「宗教は私事なり」といふ標語を押し立て、公の費用で維持する公立學校に於て、私事に屬する宗教を、教育内に取り入るゝことの非を鳴らし、幾多の接衝曲折の後、兎も角も、通常の形式としては混合學校を認め、之と共に宗教學校及非宗教學校が存することゝなつた。然しながら、宗教教育を實施するに否とは、教員の意味表示に、一任されて自由であり、又宗教々育の教課に出席するに否とも、兒童

の宗教々養を指定する者の意思表示に一任されて、これ亦其自由になつたのである。此決議を見するも、その如何に難多の主張が妥協折衷されたか窺はるゝ。

英國は宗教の勢力の強い國であるが、それでも表面上は小學校から宗教は除かれて居る。しかしそれを希望する者には、課してもいゝと云ふことになつて居る。

米國に於ても信仰の自由といふ立場から、學校教育から宗教を分離すると共に、一方日曜學校といふものが、非常に盛になつて來て居るのである。

宗教的に恵まれた歐米兒童　かく觀し來れば十九世紀の歐洲教育史は、一面宗教と教育との分離の爲めの奮闘史であつたともいはるゝが、宗教の勢力があらゆる生活の根柢深く喰ひ入つて居る歐米各國に於ては、如何に立派に論議され、又如何に制度は改められても、事實に於ては到底兩者を截然分離する事は困難である。勿論一部の過激な主張をなす者があつて、宗教そのものを無意義とし、基督教抹殺論を唱へる者もあるが、一般には依然宗教を尊重し、教會の必要は認められて居る。勿論その多くは習慣的であらう。然しこの牽として抜き難き習慣の勢力に窺はるべからざるものがあるのである。たとひその分離説を主張するにしても、それは信仰の自由、學校統一の必要、學校經濟の都合等に起因し、決して宗教無視の結果ではないのである。所謂倫理運動

が直ちに宗教に取つて代つたかのやうに考ふる學者もあるが、吾人々間の心性が、おいそれと早速宗教を棄て、仕舞ふ程、左様に薄つべらなものではないのである。さればこそ米國には約二十萬の日曜學校が、二百萬の教員を以て、約二十萬の生徒を訓練して居る。英佛二國はそれ〴〵方法を設けて、兒童をして學校以外に於て自由に宗教々育を受けしめて、以て彼等の靈性を枯渴せしめざらんことを努めて居る。殊に人格養成を主眼とする英國に於ては、中等學校以上の學校には、その校長に地方の有名なる僧正を戴くといふ習慣が、今猶盛んに行はれて居るといふことである。獨逸に於ても、止むなく學校を手離れた教會が、そのまゝ黙する道理はない。今後自由教會として一層覺醒したる活躍を生むだらうことは、豫想するに難くはない。最近文部省視察員の報告には、その宗教々育局が廢せられて、化學美術國民教育局が設けられたが、宗教學校は依然として盛況を呈して居る。又同宗教校では盛んに祈禱が行はれ、異宗學校ではその希望に應じて各宗派の教義信條が教へられて居ること、昔も變りはないといつて居る。

之を要するに、歐米諸國に於ける學校教育は、餘りに宗教と密接な關係の下にあつたが爲め、兒童の教育上、又信仰上兎角問題を惹起し、其度毎に教員父兄並びに教派團體の間に紛糾を生じたが爲めと、又一方學術思想の進歩の結果、學校に於て宗派的宗教を兒童に強ゆるといふことが、

兒童の心理に反するのみならず、又信仰の自由を無視するの恐あるが爲め、宗教を教育から分離し、宗教は宗教として其自由な發達を遂げしめんとしたのである。之を我國に於ける、頭から宗教を無視してかゝる從來の我教育界とは、決して同日に論ずることは出来ないのは勿論である。さればその宗教科を除いたからといつても、全然學校から宗教が除かれ切つたと即斷する譯には行かない。宗教的氣分が依然學校内に漂ふて居ることは、その國語讀本を一見した丈でも充分窺はれる。況んや其學校教師なるものが、彼の國柄として、我國の先生達に比して遙かに深い宗教的理解を持てるを以て、それ等教師の人格を通して、宗教的感化を生徒に及ぼすことも多大なるものであらう。又家庭に於ても社會に於ても、宗教的氣分に溢れて居ることは、到底我國の及ぶ所でないから、彼等兒童は殆ど宗教的空氣の中に生み落されたといつても善い。

殊にその宗教が、たとひ多くの宗派に分れ所謂宗教家の宗派争はあるにしても、一般信徒に於ては、其根本は同一聖書に依り、同一の神を拜し、等しく基督を大人格を中心とするものであるから、我國に於けるが如き、混雜なる宗教界とは譯が違ふ。彼等がかうしてその全生活から宗教的感化を受くる幸福を持つて居る。その會、學校から宗教を除いたといつても、それは單に學校に於ける宗教科てふ特別の時間と、特殊の科目を除いた丈のことである。それを全く事情を異

にせる我教育界へ、その皮相丈をそのまま模倣したから耐まらない。其購得たものは、豊かな感情を缺いた偏知主義の冷たい人の世であつた。

近時此弊に憤慨して、その虐げられた感情を救ふべく、新たに宗教々育運動、及藝術教育運動が起されつゝあることは、我國兒童の爲めに、心から祝福せずには居られない。

宗教々育の起源

日曜學校てふ名稱の生れたのは比較的近世の事であるが、基督教界に於ける兒童の宗教々育の起源は、遠くユダヤの古代に溯らなければならない。由來ユダヤ民族は、兒童の宗教々育には非常に重きを置いた民族であつた。その族長時代に於ては、會堂には必ず兒童の教室を有し、族長はその祭司として、又教師として大家族の宗教と教育とを司つて居つた。聖書の中に、アブラハムやコブやモーゼなどが、常に少年に信仰的教育を行ふたことを記載せるは、明かに之を證明する。又エホミヤ、パチャ、ヨシヤの時には宗教々育再興の運動をなせし記事、及びエヅラの時には聖書學校を設けた記事によつて、既に今日の日曜學校に似たものがあつたと、及ユダヤの教育の中心が宗教であつたことが知れる。

「ミシナ」に曰く「小兒をして五歳にして聖書を習ひ始め、十歳にして「ミシナ」を始め、十三歳にして律法の遵奉者たらしむべし」と、以て當時に於ける宗教々育の一般を知ることが出来る。

基督も十二歳の時、此種の學校に學んだといはれて居る。

ユダヤの教會とその制度とを採用した基督教が、その始めより兒童の宗教々育に重きを置いたことは明白なことである。ポロはユダヤ人の會堂を舞臺として盛んに傳道したのであるが、彼は傳道よりも寧ろ教室に於ける兒童教育に重きを置いたやうである。初代基督教の信仰問答學校は、ユダヤ教會附學校の繼續發展したものであることは疑ふまでもなく、彼の基督教の敵といはれたセルサスが「基督教が子供に重きを置く以上は、その盛大になるは當然なり」といつたに依つても、その如何に兒童教育に熱心なりしかと窺はれる。その後基督教が盛大となるにつれ、大人に重きを置いた爲め、兒童の宗教々育は目醒ましい活動もなく、唯着實なる人々の熱誠によつて、人知れぬ處に宗教々育の火は燃えて居つた。一五二九年ルーテルが日曜日に於ける一定の信仰問答教育を始め、宗教改革の行はれた地方は、何れも此制度を採つたのが、今日の日曜學校の監觸であるともいはるゝ。しかしながら、ルーテルが新教々義宣傳の目的で書いた問答書が、四百年後の最近まで猶ほ小學校に於ける宗教々育の基本となつて居るといふのを見ると、社會一般がまだ兒童の爲めの宗教といふことには、無頓着であつたことが知れる。

日曜學校の起源及發達

此種の學校が明かに日曜學校の名稱を以て生れたのは、英國グロチ

ニスター市の雑誌記者、ロバート、レークスに始まる。一七八〇年彼は、此市の特産留針製造工場に備はれて居る貧兒の群を見て、心太だ痛み、日曜日に教會堂に行はるゝ禮拜式の前後に、此等の兒童を集めて教育を施しその偉大なる功果は大に世人の注目を引いた。此學校は日曜日毎に開かれたので日曜學校と稱せられたのであるが、此所では、信仰問答の外普通教育も施して居つた。その後ジョン、ウエスレーは更に日曜學校から、普通教育の部分を除き、純然たる宗教々育を施す所として、彼の創立せるメソジスト派の諸教會に、日曜學校を設立せしめた。次で他の宗派も之に習つて争つて日曜學校を起した。今日英國教會の盛大になつたのは、兒童に對する教化に由來するといはれて居る。

かうして日曜學校は迅速なる速度を以て、全英國は勿論、歐米全土に亘つて設立さるゝに至つた。

是に於て日曜學校相互の聯絡、統一が必要とせられ、その地方々々に日曜學校協會なる團體が起る。それ等が集つて米國日曜學校協會とか、英國日曜學校協會とかいつた協會が起る。更に進んでは、世界日曜學校協會なるものが起つて、世界の要所々々にその世界大會が開かるゝのみならず、屢々各地に大會小會を開いて新計畫及發展策が講せられるやうになつた。

最近に於ける心理學の進歩は、兒童心理宗教心理の研究を促し、兒童に關する各種の問題が、新しき意義を以て勃興すると共に、從來大人本位であつた宗教々育の様式が、漸次兒童本位に講せらるゝやうになり、米國に於ては、學者教授を以て組織する宗教々育協會なるものが起り、その研究の結果は常に宗教々育に關して、多大の利益を與へて居る。今日の日曜學校が、その教育の方法及内容に於て、又昔日の比でない所以のものは、此協會に負へる所多大であると云はねばならない。

歐米に於ける日曜學校の現在 現今世界に於ける基督教日曜學校は、二百數十萬人の教員と、三千萬に近き生徒とを有し、世界に於ける最大の團體として、世界の注目を引きつゝある。その建築物の如きも、從來の大人本位の教會から轉じて、兒童本位の設備を盡した日曜學校建築物が、歐米の各地に巍々として聳ゆるやうになり、又その教師養成の機關を設けて、盛に聖書教育學兒童學等が講せられ、米國教會の如きは牧師の外に有給の宗教々育幹事を置き、銳意斯道の發展を計つて居る。

從來兒童は大人の小形であるといふ思想から、大人の爲めの聖書をそのまゝ、兒童にも暗誦せしめ、その實行を強いて居つたが、兒童心理學の進歩と共に、各年齢の兒童心理に適應する教案

及教科書が編纂され、今や米國を中心に世界日曜學校に普及されつゝあるの盛況を呈しつゝある。

今歐米に於ける宗教々育の一斑を窺ふべく、米國教會に於ける組織機關を一瞥すれば、先づ各教會には事務局が設置されてある。これ即ち日曜學校活動の中堅である。其事務局中最も重要なものには教育委員會なるものがあつて、主として日曜學校と教會との連絡を司つて居る。此委員は教育上の理想を有し、且つ宗教々育に關する理解と興味とを有し、教育の實際に經驗ある人々を以て構成して居る。而して同委員會は兒童の環境に關する諸種の調査をなし、學校の設備、課程の内容、教授の方法等を研究指導し、兼ねて其地方に於ける宗教々育に關する輿論の喚起に努力して居る。その直接教育實施機關としては主管を置き、之に各部長、監察官、圖書館員、教員等を配屬し、而して其主管は、學校生活の巨細に亘りて全責任を有し、之には大學或は神學校出身の敬虔なる基督者を任命することになつて居る。生徒はその年齢能力に應じて通常、搖籃部、初學部、幼年部、少年部、中間部、青年部、成人部、家庭部、教師養成部の九部に分ち、各部にはそれ／＼部長を定め、其下に各級の級受持教員を置く。級は教育の單位にして通常十人或は二十人を以て成り、多きも三十人を限度とする。三十人を超へれば最早や級ではなく、聽衆となる

とされて居る。其他書籍の蒐集整理巡回を司る圖書館員、傳道、音樂の特科教員、學校會計を司る學校書記等がある。殊に此學校書記は、會計の外に、各級、クラブ其他の各部書記と連絡して、各部の綜合的報告を作成し、以て地方の宗勢調査及生活、父兄教員に關する一切の事項を明瞭ならしむることを司つて居る。

以上はその直接に日曜學校内部に於ける大體の組織機關であるが、之だけを見てもその大仕掛けの程が察せらるゝ、之を我國に於ける、寺の住職が法務の片手間に、御布施の一部を割愛して、役僧を驅使しつゝ、打つたり舞つたりして、兎に角お、つとめと一夜作りのお伽噺とてお茶を濁して居る佛教日曜學校に比べては、實に雲泥の差があるではないか。尤も斯うした組織機關の整頓して居ることやその大仕掛けの設備を直に之に倣へといふのではない。力瘤の入れ所は寧ろ他にあつて存することは云ふまでもない所である。

最近に至り又日曜學校では猶不充分とあつて、之を週間教育にせんとする運動が起りつゝある、又既にニューヨーク市の公立學校では、一週三時間宛必ず教會教育を受くることの決議を見。模範教育と稱せられたデレー市の學校では、宗教々育をその教育の主眼とし、放課後一時間宛は必ず教會に於て宗教々育を受けることになつて居る。今や、米國に於ては嘗て分離した學校と宗教と

が、新たなる意義を以て再び結び付かんとする努力が、年々高まりつゝある。のみならず「現に米國は、米國魂を教養すべく、國旗中心主義を採つて居る。男女老幼の別なく、常に國旗の下に集合し國旗の鼻歌で動き出すと云つた有様で、どんな田舎でも國旗を持たぬ米人はないと云ふ程に、何から何まで國旗盡しで、國民思想の統一を計つて居る。斯く米國そのもの米國魂そのものゝ象徴としての國旗に就て、星は敬神の念を、七條の赤色は犠牲的精神を、六條の白線は正義の觀念を表現するものとして、説明されて居ると云ふことである。されば米國に於ては、一種の宗教を以て國民教育の根本要素として居るものといふべきである。

第二節 我國に於ける宗教々育の狀況

上古に於ける敬神教育 我上古、殊に族制時代に於ては、民族の思想も極めて單純であり、社會現象も亦極めて簡易であつた、従つて各個人の念頭には家と國、及び國と社會といつた區別も確立せず、又後世に於けるが如き、家庭教育及社會教育といつた嚴然たる區別もなかつた、家庭に於ける教育が其まゝ社會に於ける教育であつたと思はるゝ。而して當時一般家庭に於ける教育中、最も重きをなせるものは敬神及忠孝の實際的教養にあつたと察せらるゝ。殊に敬神は當時

各家庭に於ける最も重要な教養であつたのみならず、一般社會の平和秩序も一に此敬神教育に依つて維持されたやうである。當時に於ては、政治も教育も總て祭神を中心として行はれ、特に崇神垂仁の二帝は、祭神を以て民心統治の最良策とされたやうである。當時盛に兵器を神社に納められたことの記録があるが、一朝事あるの時、神威の添へる寶器を取つて、敵に向はしめんとする、いはゞ尙武的教育の一種であつたやうである。今も猶兵器が神寶として崇められ、或は出征に或は凱旋に際して、必ず神祇に奉祭するの風習は、此教育が民族性に傳へられて居るものと思はるゝ。

王朝時代には、藤原氏の勸學院、和氣氏の弘文院、橘氏の學館院、在原氏の獎學院、及文章院、淳和院等の私學の勃興は、公學を凌駕するの盛況を呈したが、その目的は何れも門閥本位にして、専ら自族子弟の教育の外餘念はなかつた。唯此間にあつて何人の氏族學校でもなく、何族にも偏しない平民的教育を行つた學校として、空海の綜藝種智院があつて、然かも宗教教育を施したといふことは見逃すことが出来ないが、然し之とても僅かに一部分の子弟を收容し得たもので、一般子弟は何等の宗教的教育を受くることなく、從來通り其父母に見做つて、朝夕を祖先崇敬にいそしんだものと思はるゝ。

武家時代に於ける神佛併稱の教育　鎌倉時代以後、學問は公卿と僧侶の専有物となつた。殊に民衆と接觸の機會多き僧侶は庶民教育に多大の影響を與へたやうであり。寺小屋の如きは此時代に萌芽したものであらう。殊に北條足利氏の崇敬措かざりし京鎌倉の五山の僧侶を始め、幾多傑出せる高僧輩出して、宗教の隆興を圖ると同時に、他面に於て熱心に教育事業に盡精した。別に學校の設備があつた譯ではないが、或は訓誡を與へ或は講筵を張り、其他辻説教、著述に由つて盛に庶民教育をしたのである。

又此時代に於て宗教々育上見逃すことの出来ないことは、從來儒佛二教は主として上流社會に弄ばれ、一般庶民は依然敬神本位であつたものが、此時代に於て、敬神と崇佛とが並べ稱せられ、一口に神佛と稱へ、その間に差別が漸次薄らいで來たことである。

貞永式目第二條に「寺社異れりといへども崇敬は是れ同じ、仍て修理の功、恒例の勤は、宜しく先條に準じて、後勘を招くこと莫るべし」とあるは、敬神崇佛の思想涵養を以て、當時武家階級の教育主義となせることを窺ふべく、又同式目結末の起請文に「若し一事なりとも、曲折を存し違はしめば、梵天帝釋四大天王惣じて日本國中六十餘州の大小神祇、殊に伊豆函根兩所の權現、三嶋大明神、八幡大菩薩、天滿大自在天神、部類眷屬、神爵冥罰、各罷り蒙るべきもの也」とい

ふに至つては、奈良平安以來の神佛習合（第二編第貳章第四節）の利き目が確實に現はれて、神と權現、大明神と大菩薩、印度の天部眷屬と日本の天神地祇との區別が、判然としないうやうである。又以て當時一般の信仰對象をトするに足るものである。

降つて群雄割據時代になると、信玄家法の中には「參禪可嗜事」及「佛神可信事」といふ二條が擧げてある。又北條早雲廿一ヶ條の初めには「佛神を信じ申すべき事」といへる個條がある。此等によれば神佛並稱といはんよりは、佛神と寧ろ口調惡しきに係らず佛を上にしたる所。當時佛教殊に禪宗が武家の信仰の中心となつて居たので、自然かゝる稱び方をしたものであらうと思はるゝが、又以て當時に於ける。武家教育が宗教を重視したことが窺はれる。

江戸時代に於ける三教一致的教育　庶民教育機關としての寺小屋は徳川時代に入つて非常なる發達を遂げ、今日の小學教育の先驅をなして、明治時代まで續いて居つたが、名目は寺小屋でもその實質は、主として當時素養ある浪人、或は零落せる儒者が、一般生活に必要な「讀み書きそろばん」を教ゆるに過ぎなかつた。宗教々育としては寧ろ當時、淨土眞宗の門徒子弟が、その檀那寺に行つて、在家おつとめの稽古をしたこと、及びその父母に伴はれてお説教をお相伴したことを擧げねばならない。殊に前者は、假名文の御和讀御文章、領解文は兒童の耳にも入り易

く又心ある僧侶は多少の講釋もしたであらうから、小さい頭にも臚ながら、在家信仰の大體は覺えたであらうと思はる。それは丁度歐米兒童がその昔、教會に於て讚美歌や祈禱の文句を覺へ聖書や信仰問答書を教はつたと同様に、否寧ろ是れは個人教育であつた丈、その効果も多大であつたかも知れぬ。實際彼等が寺に行つて温顔なる住職、夫妻から、節面白ろきおつとめを習ひ、お菓子など戴いて歸つた懐かしい記憶は、彼等の生涯を通じて忘れられない思ひ出であつたらうと思はる。今日の佛教日曜學校は、差し當り此方面を現代的に復活したものといふべきである。然しながら、おつとめの稽古は、どちらかといへば所謂お稽古ごとの一つとして、茶や花と同格に見做されたものである。宗教々育としては、當時隆盛を極めた心學道話を擧げねばならぬ。

聖德太子に源を發する三教一致の旨趣は、その後、行基良辨最澄空海等に依つて、神佛習合説を生み、一方惺窩開齋益軒藤樹番山等は神儒同歸を唱へ、こゝに江戸時代には神儒佛三教を合一し、然も通俗的に平易簡明を旨とする心學なるものが起つた。然かも、石田梅巖・中澤道二等、英才を抱きつゝ野に隠れた反官學黨によつて、廣く民間に宣傳されたのであるから、その民間勢力又推して知るべく、茲に聖德太子の理想せる三教一致は、一般民衆の頭腦に徹底し、その實生活動かすに至つたことは、既に述べた所である。今その宗教々育の一斑を窺ふべく、梅巖の門下堵菴が、七歳より十四五歳に至る兒童を集めて講話したる口演輯に、前訓といふのがあるが、今其前訓の概目の中から、宗教々育に關する項目を擧げて見ると。

- 一、朝をひなり候はゞ手水を御つかいなされ候て。まづ神様を御拜みなさるべし。
- 一、次に御佛壇に御むかひ御拜みなさるべし云々。
- 一、善惡とも報の來るは、のがれぬ事を御辨へなさるべく候。

といった風に先づ概目を擧げ、前訓といふのはこれ等の概目を丁寧平易に面白ろく敷衍し以て三教一致の精神を發揮したものである。

今その前訓に感化された兒童の中、河内國分村芝十平の子龜助といふ八歳の兒童は、その所懐を書して、

「人と生れ來るはおやこうくの爲め也。孝行にすれば天から福を下さる也。不孝にすれば佛のばちあたる也。孝行にせぬは犬猫も同じことなり」

といつて居る。以て心學の骨子と其感化の偉大なることを窺ふことが出来る。

明治時代に於ける非宗教的教育方針 之を要するに、我國上古より明治以前に至るまでの庶

民の宗教々育の内容は、先づ敬神思想に始まり、鎌倉時代に於て、崇佛思想が加味され、徳川時代に於て、神儒佛三教が渾然たる合一を示し、五穀豊穰、家内安全は神様に、修身道德世渡りの道は孔子様に、煩惱解脱後世安樂には佛様を、といつた風に、三教が分業的に一致して民間信仰となつたのである。而して一般に教育機關も整はず、況んや秩序的に宗教々育を施す機關もなく、その家庭教育の方針が、そのまゝ社會に於ける教育思想と一致し、そこには今日に於けるが如き、家庭の信仰と學校の方針と、社會の思想とが調和しないが爲め、兒童が五里霧中に彷徨するといつた悲惨はなかつたやうである。

明治維新に於ける復古の精神は、勢ひ神道の勃興を促し、廢佛棄釋等の無謀を試みたるが爲め、折角調和し來りし國民信仰に動搖を來たし、遂に再び神佛の信仰的一致を見ざりしのみならず、今日も猶ほ頑迷なる神官と僧侶との反目を持續し、愈々彼等の無能無知を色揚げせる次第である。折柄、歐米の科學萬能主義の滔流するあり、「理性は吾人の宗教なり」てふ知識萬能の強風は遠慮なく吹き卷くり、爲めに我國信仰界は、木枯吹き荒んだ後の、滿目荒涼たる世相を現出し、加ふるに宗教無視の施政の方針と、宗教敵視の教育家輩の誤黨陶とによつて、我國民は「無宗教なる國民」てふ尊稱戴くの光榮を得るに至つた。

然しながら我民族は由來決して無宗教なる國民でなかつたことは、その壯麗なる神社佛閣が之を雄辨に立證して居る。たゞ文部省の方針のみが非宗教であつたまでである。維新以前までは、相當宗教々育の實も舉がりつゝあつたことは、既に述べた所である。之をしも、非宗教的國民といふならば、世界何れの國民を宗教的國民なりといひ得るであらう。蓋し、宗教は人間必然の要求であるから、何時の世、何處の所に至るも、宗教なき人間は住んでゐない筈なのである。

日曜學校の勃興 (イ)、基督教日曜學校。日曜學校の事業は基督教會と共に我國に入り來つたのであるが、教室の不完全、教材及教師に乏しかつた爲め、未だ充分の發達をなすに至らなかつた。明治三十九年十二月、米人ジェー、エル、ブラウン氏は萬國日曜學校協會を代表して來朝し、各地に講習會を開き、日曜學校事業の鼓舞獎勵に努めた結果、四十年五月、日本日曜學校協會を組織し、爾來宗教々育に關する智識の普及、講習會の開催、部會の組織教師の養成教科書の改善通信機關誌の發行等に力を盡しつゝあつたが、大正十年東京市に開かれた、世界日曜學校大會は、一層斯界に鼓舞獎勵を與へ、今や大宗派には各日曜學校局を設け、盛に日曜學校事業の爲めに奮闘努力して居る。日曜學校協會も亦三十萬圓の資金を募り、東京市に於て一大會館を建築する計畫をなしつゝある。實に日本の基督教は此日曜學校事業にその運命をつないで居るといつても

敢て過言ではあるまい。

然しながら、外國から輸入されたまゝの一種の風に馴致された、所謂基督教日曜學校なるものには、どこか厭氣を催すものがないでもない。日本兒童の爲め、その心性にしつくり合つた宗教々育が行はるゝまでには、尙ほ幾多の年月を要するものがある。熱心なる基督教徒が、不斷の研究は、遠からず此の不滿を發見して、日本の宗教々育を實現する日のあることを待つ次第である。

(ロ)・佛教日曜學校の勃興。佛教に於ても、基督教日曜學校事業に鑑みて、明治四十年頃から日曜學校なるものが、各地の青年僧侶の手に依つて起された。大正四年十月、眞宗本願寺派本願寺が御大典紀念事業として、統一日曜學校制度を設け、全國末寺一般に獎勵したるが爲め、單にその宗派内のみならず、各宗派にも刺戟を與へて、佛教主義日曜學校事業の發展を促した。殊に最近に於ける一般思想が宗教的傾向を呈したると、及び兒童問題が、社會一般の注目を引きつゝある現状とに、日曜學校問題は一段の活氣を呈して來た。加ふるに活動的氣分が横溢せる現社會に於て、久しく沈滞し切つた佛教界に對して局面轉回を希求する青年僧侶が、自己存在の意義を示すべく、差し當り御手輕さうに見ゆる。日曜學校經營を思立つに至るは、蓋し自然の勢ではあ

る。かくて今や本願寺派本願寺部下に於て約三千校を數へ、大谷派本願寺始め淨土宗曹洞宗のそれ等を合算すれば、少くとも五千校位には達するであらう。勿論、中には看板丈掲げて久しく休校せるものもあれば、又本山に届出でずして致々として經營せるものもあり、或は、統一機關未だ備はざる本山もあるから、その實數は到底捕捉すべくもないが、兎に角社會の一勢力をなすのも、近きにあると思はるゝ。

然しながら今日我國に於ては、日曜學校といへば、未だ閑人の仕事の如く思はれ、又それに携はる人々に於ても、又之を研究する人々に於ても、何ういふ譯か、今一つ眞劍さを缺いて居る。他に活動の天地の無いものが、止むを得ず經營するといつた風が漂つて居る。かゝる疑霧を一掃して一般社會にその切要を知らしむると共に、之に携る者も、自己生命の仕事として、自己全體を打ち込んで掛つて貰ひたい氣がする。それにしても今日佛教日曜學校が單に基督教のそれを模倣したもので、いはゞ模倣の模倣たるの感があるのみならず、その經營の動機が、他教への對向的氣分、或は社會への見榮坊、宗派の勢力維持に幾多の卑しき不純分子が混入して居るやうであるが、かゝる不純分子を斷然棄て、純眞に兒童を愛し、現在の、そして日本の兒童そのもの、眞實の宗教々育の爲めにといふ點から、出發することを切望して止まない。

かゝる點に就いては、最も有利なる立場にある我神道家には、一向にその計畫すら聞かないといふことは、余輩の理解に苦しむ所である。之に關しては、後に詳述する積りである。

第三節 宗教々育と布教傳道

宗派擁護に利用される日曜學校　その基督教たると佛教たるとを問はず、所謂宗教家なるものは、不知不識裡に、宗教々育とは兒童に對する其宗派々々の布教傳道を意味するかの如く心得られ勝ちである。日曜學校を以て兒童相手の傳道場或は信者養成所と誤らるゝ傾がある。即ち兒童の時から宗教を教へ込んで置かなければ、將來の佛教が、基督教がと、直ぐ宗派の爲めへ持ち込まふとする傾向を持つて居る。之れでは兒童の爲めの宗教々育ではなくて、宗教家自身を擁護する爲めの宗教々育になつて仕舞ふ。換言すれば、教育を宗教の爲めに利用し、兒童を自家擁護の用に供するものであつて、教育の爲め兒童の爲め、看過することの出来ない問題である。何となれば宗教々育は他の道德教育、國民教育等と同様、何處々々までも兒童そのものゝ爲めの教育でなくてはならない筈のものであるからである。

勿論斯うしたことは今日既に言ひ古された觀がある。經營者に於ても既に百も承知して居るや

うであるが、それが單に議論理窟にのみ上滑つて、實際は依然傳道本位に流れて居る。即ち此方面に於ける最近の雜誌などにも「これを以て宗派宣傳の手段としてはならない」、「門徒を養成するための日曜學校や、寺門經營の廣告手段になつてゐる日曜學校が多く、さういふものには興味を有しない、功利的な人達が多いといふ事は事實である」など云つて居るのを見れば、今猶、理論と實際とが混沌として居ることがよく分る。又中には「直接宗門繁昌の爲めに仕やうとしない方が、却つて宗門の爲めになるかと思ふ」といつて、その結論に於て知らず識らず本音を吐き折角全文の打壞はしをして居るものもある。

又その實際を観察するに「生まじつか佛様の概念なんか與へない方がよい」と云ひつゝ、矢張り大人の衣服を子供に仕立て直したやうな、地味な佛様を連發して居る「純眞を失ふまでに抹香臭くなれば、日曜學校の効果もちと行き過ぎの形である」と云ひながら、兒童とはまるきり世界の違つた、歸三寶偈や禮讚文の直譯、さては四百年以前の領解文(信仰告白)そのまゝを唱へさせねば氣が濟まぬと見えて、兒童の情氣漫々たるには一向頓着なく、快活なるべき日曜學校に、敢て陰鬱なる影を投げて居る。又中には世俗に媚び過ぎて、「本會は宗教には關係いたしません」と無宗教主義を標榜しつゝ、内心ひそかに自己の信仰を押し付けんとする所謂羊頭狗肉徒もある。

宗教無關係を標榜する位ならば、何も宗教家をわすらす必要もなく、目下流行の兒童藝術會や、文化子供デーの方が遙かに徹底して居る。苟も宗教家の携はる事業に、何處に世俗に媚る必要がある。堂々と宗教を標榜しつゝ、眞實兒童の爲めの宗教へ慕進する丈の確信がなくてはならない。又中には、與ふべきものゝ解らないまゝ、日曜學校の名によつて、兒童の餓鬼大將となつて徒らに遊ぶことを以て満足し、何等訓育的精神の見るべきものゝ無いものも、尠からずあるやうである。目下の急務は、兒童の宗教々育よりも、寧ろ教師そのものゝ教育を絶叫せねばならないといつた状態である。

宗派主義日曜學校經營の動機

本願寺派本山の日曜學校教案なるものを見て、その讚佛歌なるものを見て、その他總ての施設を見るに、その日曜學校提要に示された通り「日曜學校の根本精神は堅實なる信仰中心主義に基く兒童の布教なることを忘れず、此の事業を擴充」せんとするものであつて、宗教々育の眞意義にもとるのみならず、その宗教宣傳振りは寧ろ厭や氣を催すものがある。又かゝる教案等あるが爲め、經營者の自由研究心を阻み、益々日曜學校を宗派化するのではないかと思はるゝ。

大谷派本願寺社會課經營に係る「兒童と宗教」は兒童の宗教研究發表として、その理論は常に幾

分の光を放つて居る。その一員が各地視察の報告に「教會外の人々に對しても、從來の自家利用的日校教育に反感を抱き咒詛を感じてゐたのを、少くとも今將に行はんとしてゐる宗教々育が、如何なるものなるかを理解せしめ、この仕事に對して滿腔の熱情と同情とを持たしめた」といつて居るのを見て、略ぼその意氣は察することが出来る。然かも斯く云つて居る人々が遣つて居る、日曜學校の實際は「まあ仕方なしに本願寺派の教案や讚佛歌を何して遣つて居るのです。全體本山がほんとうに遣る氣がないので、社會課——日曜學校事業もその一事業として居る——なんて云つても、ほんの申譯に置いて居る位なものですから」とこぼして居る。宗派でふ殻を脱せぬ以上、到底眞實の日曜學校事業の出來ないことは、此一斷片の中にも言ひ盡されて居る。

本願寺派日曜學校視察員の報告に、日曜學校を經營して居つた某寺の住職が死んだので、その後の經營に悩んだ未亡人は、幾度か止めやうと思つたが、祖師の御恩や、一宗の繁昌を思へばどうしても止める譯には行かぬので、人頼みをして續けて居るのは實に感心である。といつた記事が載せてあつた。余も亦其視察員と共に、此未亡人の努力と忍耐とには感慨の外はないが、しかし此報告文中、一つも教育の爲め、兒童の爲めといふ、眞實宗教々育に對する誠意の缺けるのを物足りなく感ずるものである。實際今日の佛教日曜學校經營の動機は、先づ此邊の所が其上の

部なのであらうと思はる。

一 宗本山の事業として、又宗派に籍を置き門徒てふ因襲に圍まれてゐては、その總てが宗派の爲へと陥らねばならない事情のあることは、余も亦充分同情するものであるが、さりながら折角兒童の爲への宗教々育を施しつゝ、却つてそれを裏切る如き經營方法を見ては、かゝる言ひ古された問題を、今猶聲高く叫ばねばならない譯である。

宗派的宗教々育の齟齬

數百年否甚しきは幾千年以前の人々の、胸に響いた宗教々義を、そのまゝ、然かも多くは世の中を渡り盡した大人の、苦悶の結論ともいふべき信仰そのまゝを、これから新しく生きて行かうとする、純真な小さな魂に注ぎ込むことの、到底兒童心理に、戻るものなることは云ふまでもなく、その一度、感じ易い柔かな心に、かゝる既成宗教の頑強な烙印を刻み付けることによつて、その兒童の將來に如何なる陰い影を投げ付けるか。之をトルストイの口調を借りて云へば、

1. 子供は理性と智識とに矛盾した所謂基督教の教理によつて、催眠術にかけられる。三位一體、復活昇天、エスの再臨、永遠の刑罰といった不合理な教義が、暗示に感じ易い子供の心に消えない印象を與へる時、彼等はやがて是等の教理から流れて來る矛盾の眞ん中に立つて、自

分の道を見出す爲めに、幾多の苦悶を重ねなければならない。

2. 然かも如何にしてその矛盾を調和すべきかに就いては、誰も教へてくれる者は無い。宗教家に聞けば益々混亂の度を増すばかりである。こゝに大懷疑に陥り、怖ろしき曲解を生み、理性を信せず、善惡眞偽てふことを無視するに至るか、或は自分にとつて最も大切な事は、自分の理性に導かるゝことでなく、人のいふことに依つて導かるゝものだといふやうになる。

3. 會々かゝる虚偽の催眠状態から逃れ出で、新しき智識の流れを辿るやうになると、凡ての宗教は寧ろ人生の進路を遮ぎる所の、有害無用の長物であると信するやうになり、宗派を棄てるのみならず、宗教そのものをも棄て、再び顧みないやうになる。即ち彼等の良心そのものをも棄て、慾望のまに、生活する者になつて仕舞ふ。不道德漢に陥る譯である。

4. これ等の人より少し弱い人間は、疑は惹き起すが、全々かゝる詐欺状態から脱し切らないで、狡猾な而して茫漠たる理窟を捏ね廻して、敢て自己辯護をこととする。懷疑、茫漠、詭辨自己詐瞞の中に生きつゝ、會々心に萌し來る眞理の曙光に反抗する。かくて遂に眞實の自己に生き切らないで、煮え切らない態度の裡に一生を葬つて仕舞ふ。

5. 而してその大多數の人間は、催眠状態から醒き出やうとする力も機會も持たないで、盲目

的に生きては死に、生きては死に、遂に人生に於ける眞實生存の意義に觸れないで、彼等を欺く宗教家のお手軽な道具となつて仕舞ふのである。
といつて居るが、こはそのまゝ、今日多くの宗派的日曜學校を出る兒童の將來を豫言して居るのではあるまいか。

第四節 宗教々育の意義及範圍

日曜學校に對する悲觀の聲 最近中外日報紙上に「佛教日曜學校の前途」と題して、「一般に十四五歳になれば、子供々々したお伽噺にも興味を失ひ、従つて漸次寺院を遠ざかつて行く。その結果はいふまでもなく、十年の効を一簣に缺くやうな始末で、折角それ迄教養した兒童が、中途から全く佛教と交渉を絶ち、世間普通の青年と何等異らないものになり果てるのが大多數である。此實情に對して經營者はそれ／＼苦心中心であるが、女子ならば茶や生花を中心にして集められもするが、男子の方には一寸これを引つけるに足る丈の道具立がない。基督教が英語研究に藉りて聖書の講義などをするに倣つて、佛典の講義も出來ず、音樂の教授をやるとすれば、教師招聘の經費が要る。かくして彼等を寺院に引きつけ置く工夫もないので、日曜學校事業も畢竟徒

勞に終るべく、且つ父兄に於てその心がないとすると、いよ／＼前途が悲觀されると、某日曜學校の當事者は語つた」といふ記事があつた。何といふ自信のない悲哀の聲であらう。かゝる半信半疑の態度でなさる彼等の宗教々育の程も、略ぼ察することが出来る。かゝる杞憂は布教傳道即ち是宗教々育で誤解から來るのである。「世間普通の青年と何等異らないものになり果てる」やうに、彼自らが仕掛けて居るのではあるまいか。青年自らが「中途から全く佛教と交渉を絶つ」のか、彼等が青年等を追ひ拂つて居るのか、不純な引留策に苦心する前に、先づ彼等自身の施しつゝある宗教々育そのものに就いて反省する必要がある。彼はたゞ將來に於ける宗派的効果ばかりを考へて、現在の兒童そのものゝ心理を忘れて居る。青年期になつて一時佛教を離れても、一向構はないではないか。何を苦しんでお門違ひの遊藝などに依つてまで、彼等をいつまでも惹きつけようとするのか。勿論、生涯彼等と結び付いて、御同朋御同行として、同じ道に進んで行きたいといふ美しい人情は之を諒とするが、信仰は自由である。彼等が將來撰む所の信仰は、假令自己と型が異つて居つても、飽までも尊重してやらねばならない。「汝の信ずる汝にならしむればよいではないか。結果など考へて居る餘裕は毫もない。たゞ現在の兒童と共に、兒童の魂に浸つて行つたら善いではないか。兒童の時に、兒童相應の宗教々育を施して置けば、彼等が青年にな

れば又青年相應の思想を持つてあらう。然しそれは當然、少年の時に施された適當なる基礎の上に、築かるものなることは疑へない事實である。要は少年に如何なる基礎を興ふべきかにある。宗教々育を施す時期の決定 又彼等の手を離れたからといつて、どうしてそれが徒勞に終る」と悲觀する理由になるのか。兒童期に與へた印象、特に宗教的感化の如きは、青年期に入つて一時消え失せたかの状態に陥つても、それは全く消失して仕舞つたものではなく、將來機會を得れば必ず再び蘇るべき精神的活動力として、彼等の奥底深く潜在するものなることは、前編、潜在的精神活動と宗教々育の節に縷述して置いた通りである。我々が現在兒童に望む所のものは、強ち自己と同、一宗教を信せよといふのではない。彼等の好む信仰に生きてくれ、ばよいのではない。唯、彼等をして無宗教で終らしめてはならないといふのが、吾等の唯一の願でなくてはならない。そこで彼等に與ふる宗教々育は、彼等の一生を通じて無理のないもの、換言すれば、理性の發達によつて打ち壊さるゝやうな不合理のものであつてはならない。又彼等が將來何れの宗教を撰ぶに就いても、毫も差し聞えのない。全くの基礎的なものでなければならぬといふのである。

こゝに於て余輩は宗教々育の範圍を確定すべく、先づその時期を決定して置く必要を感ずる。

宗教々育の客體即相手を、普通幼年少年青年壯年等と細別して論じてあるが、實際に於ては幼年期から、少年期の兒童のみに限られて居る。余輩もその實際に従ひ學齡期の終りに至るまでの兒童を以て、その客體とし特に滿三歳から十歳位迄の兒童に重きを置きたいと思ふのである。それは一つは、甚だしく身心の状態を異にする青壯年を含むことによつて、益々所論の混雜を來す恐れがあるのと、今一つは此期間即ち幼年期が諸種の點に於て宗教々育を受くるに適し、且つその効果も永久的ならしむることが出来ることは前編に於て屢論じて置いた通りであるからである。

我小學校令第一條の精神 斯くの如く宗教々育の時期を學齡期の終りまでと限つて仕舞へばその宗教々育の内容性質及その範圍も、自然限定さるゝ譯である。即我國小學校令第一條に、小學校に於ける教育の範圍を限定していふ、

小學校は兒童身體の發達に留意し、道德教育及國民教育の基礎、並に其生活に必須なる普通の知識技能を授くるを以て本旨とす。

之れに依れば小學校では、道德教育の完成、國民教育の達成、及大人としての生活に要する智識技能を授け終らんことを期するのではない。即ち小學校では兒童を一人前の人間に造り上げることを目的とするものではなく、その期する所は、道德教育國民教育の基礎を興へ、及び普通の智

識技能の中、其生活即ち兒童生活に必須なるもの丈ける授くるにある。換言すれば兒童をして成人の後、道德家たり國民たり又自己の生活に事缺かない丈の、特別の知識技能の所有者となり得る、その基礎として先づ、子供らしい道德家、小國民としての魂の持主、及び現に子供としての生活に役立つ智識技能の所有主たらしめんとするにある。換言すれば、將來に於て大人としては大人らしき生活者たらしむべく、今はその基礎として、子供をして子供らしき生活をなさしめんとするにある。年齢の長すると共に漸次大人らしき生活に向つて、進み得る素地を作るにある。従つて小學校を卒業したばかりの彼等は、大人としての一人前の資格は備へては居ないが、將來之を備へ得る基礎は出來て居る筈である。即ち彼等は此基礎の上に、各その一人前の生活者たるべく、或は農業の稽古、商家の見習、大工左官の年期奉公、或は各自の職業に應じた専門教育を受けるのであるが、卒業したばかりの彼等はまた、農夫でもなく、商人でもなく、太工左官でも學者でもないのである。然かしながらそれ等のいつれへでも進み得る素養が、與へられて居るといふことが必要なのである。

然しながら今日小學校の先生達は、此精神を没却して、屢大人の道德を與へ、不似合な國民教育そのものを授け、或は必要以上の智識技能をなるべく多量に教へんとする不心得の者があ

る。かくてはその成績を擧げんとの好意が、却つて不成績を持ち來すことになるのである。その飽くまで基礎的な、而して兒童に必須なる普通のものであるといふことを忘れてはならない。こゝは規則であるからといふよりも、兒童教育の原則であり、眞理であるからである。

宗教々育の内容限定

宗教々育亦然りである。余輩の望む所を卒直に云へば、小學校令第一

條に「宗教々育の基礎」てふ文字を入れて貰ひたいのである。之に就ては或は、道德教育國民教育なれば兎に角、宗教々育の基礎まで小學校で教ふることは、到底不可能であるといふかも知れない。そは從來宗教を無視した習慣が云はしむるのである。教育が人格の完成にある以上、而して宗教は人格の中樞をなすものとすれば、宗教々育の基礎を教ゆる事は、毫も不都合ではあるまい。若しそれ教員に宗教の素養なき爲めに不可能だと云ふならば、道德教育國民教育に就いても亦同様ではあるまいか。要するに五十歩百歩の問題である。唯それ宗教々育に就いての考へ方及其の施設如何によつては、強ち不可能と斷するにも及ばないであらう。之に就いては又後に詳論するつもりであるが、要するに余の所謂宗教的教育はかゝる精神によつて、小學校教育に於てなされることを希望して止まないものである。兎に角、余が宗教々育の時期を學齡期の終りまでと限定したのも、要するにその以後に於ける宗教々育を不必要とするものでもなく、又此期に於て

宗教々育を完成せんとするものでもない。唯その基礎的教育を施すに最も都合好き時期として、此時期に於て他の普通教育と同じ意味に於て、兒童らしき宗教的生活を味はしめ、年長すると共に、その年齢相應の宗教的生活を營みつゝ、遂には正當なる宗教を撰ばしめ、以て再び彼の明治時代の人間の如き、無信仰無目的なる悲惨な生活に陥らざらしめんことを期するのである。

されば余輩の所謂宗教的教育は、將來眞實の宗教生活否眞人間としての生活をなし得る根本的素因を作らしめんとするものであつて、飽まで普通のものであり、且つ兒童生活に相應せるものでなくてはならないといふのである。即ちそれは基督教とか親鸞教とか、將た日蓮の教とかいつた、既に出來上つた大人の宗教、所謂既成の宗派宗教を教へるのではなくて、將來自己眞實の要求として、彼等が自發的に、基督親鸞日蓮等の宗教、その他の上に、彼自身の希求する宗教を見出すに足る素地を作らしむるにある。我文部省が教育から宗教を除外したのも、特に宗派的宗教を除いたものであつて、決して余が此所に言ふ所の、一般的宗教の信念までを、排斥したものでないことは、云ふまでもないことである。此意味に於て彼の布教傳道即是宗教々育者流の教育は、文部省ならずとも、余も亦排斥するものである。即ち彼等は、普通なものを與へる代りに、特殊的、専門的な教義を詰め込まふとする。又彼等は、その基礎を作らしむることをせずして、徒

らにその完成を急ぐ傾きがある。即ち大人の宗教そのまゝを、言葉を柔げて注入し、以て立派な信者を急造せんとする。これでは兒童をして自己信仰の途に向上せしむるのではなくて、トルストイの所謂、將來その與へられた無用の長物によつて、彼等を苦しめんとするものである。その結果は、前節に於て述ぶる如き無信仰無宗教状態に陥らしめずんば幸である。

宗教々育と宗教的教育 今更宗教々育の意義を論ずることの、聊か時代後れの感が無いでもない。今は既にその實行期に入つて居る。然し我宗教々育の實際が、猶如上の不合理を繰返しつゝあるを觀ては、まだ宗教々育の眞意義を徹底せしむべく、叫ぶことの必要を感ずる。

輓近長足の進歩を遂げつゝある心理學、特に兒童心理學は、一面教育學の改新を促したと共に宗教々育といふ言葉も、これ等の學理に裏付けられて、こゝに新たな意義を以て用ひらるゝやうになつた。そこで宗教々育といふ場合の宗教は、最早や教育と對立して居る宗教といふ意味ではなくして、實は彼の道德教育國民教育など、云ふ場合の、道德、國民と同様、寧ろ教育體内のものとしての宗教、即教育の一部分としての宗教を意味するものである。もつと卒直に言へば、宗教々育とは兒童の宗教性を啓發する爲めに、如何なる宗教的刺戟を、如何に與ふべきかを意味する言葉である。然らば如何なる宗教的刺戟を、如何に與ふべきか。思ふに、特種の宗教的教材

を、教育的に整理して、之を兒童に與へ、以てその宗教性を啓發することも、元より必要である。我教育界目下の實情よりして、特にその必要を感ずるのである。しかしながら、余輩の信ずる所に依れば、如何なる教材も、一として其根底に宇宙的意義を藏せざるはなく、又其背後に宗教的生命を宿さざるものはないのである。従つて此意義を掴み、此生命を呼吸して居る教育家であり父兄でさへあれば、學校教育又家庭教育に於ける總ての教材(廣義に於ける)を、教育的に又宗教的に取扱ふことに依つて、兒童の宗教性を啓發することが出来る譯である。余は寧ろ此方法に依る宗教々育こそ、最も有効なる教育方法であると信ずるものである。此意味に於て、宗教々育も亦「道德教育及び國民教育」と共に、國民教育の一大要素として、否總ての教育の根本生命として、教育家の勢力範圍に屬すべきものであつて、斷じて世の所謂宗教家の手に委すべきものではないのである。若し宗教家にして、特に宗教々育の任に當らんとする者は、宜敷く彼の宗派根性の如き不純分子を悉く捨て去り純な教育家と云ふ立場に立つ氣に爲り切つて、事に當るべきであると云ふのが、余輩年來の主張である。されば余は斯る意味に於ける宗教々育を、特に宗教的教育と名づけ、彼の一定の宗派的宗教々義を注入せんとする所謂宗教々育即ち非教育的宗教々育と區別したいと思ふのである。

然らばその宗教性とは如何なるものであるか。それは丁度卵には、適當なる温度を與へさへすれば、將來完全なる雞となるべき可能性を胎藏すると同様、兒童には先天的——それは遺傳に由るか生後の影響に由るか、將たこれ等の兩者に由るか、兎に角兒童に取つては先天的といふの外なき——に、將來完全なる人間として俱備すべき所有性情が、可能的状態として惠まれて居る。従つて兒童には、吾人が有する宗教的信念の根本素ともいふべきものをも、俱へて居るものと認むべきである。余は之を稱して特に宗教性と言ふのである。それは單なる情操でもない、單なる理知でもない。それは性とても云ふの外言表はしやうがないものであると思ふのである。

多くの心理學者は、宗教心の成因を分類的に説明して、恐怖・愛・欣仰・感謝等を擧げて居る。然しながら恐怖は恐怖、愛は愛、欣仰は欣仰、感謝は感謝であつて、如何にそれ等を結合されたればとて宗教心は出て來ない。勿論宗教心の中には、さうした情操を含んでは居るが、宗教心そのものは、もつと廣い而して深い、且つ活きた心的事實そのものである。生命そのもの、人間の根本的の要求そのものといつても、徒らに茫漠たる感じを與ふるのみである。到底言葉を以ては言ひ表はし難き事實、余輩は敢て之を宗教性と稱し、無意識界に於ける潜在的活動力ともいふべきものであらうと思ふのである。即ち絶えず意識界の表舞臺に向つて、躍出せんことを求めつゝ

ある一種の力強い力である。宗教的教育とは畢竟斯る力を助長して、その發現を容易ならしむる作用に外ならないのである。

醫學の進歩は、大人と小兒とは、單に體量の差のみではない、その體質に於ても大に異なる所あるを認め、之に投ずる藥劑そのものも、各異らねばならないことを認め、茲に小兒科の獨立を見るに至つた。之と同様に兒童心理學及兒童學研究の結果、その心意は大人のそれとは非常なる相違あることが明かにされ、従つて兒童の要求せる宗教も、從來の如く大人の宗教をそのまゝ、言葉丈を柔げて教ふることの無謀なることを覺つた。從來の遣り方は、小兒に牛乳を與ふる代りに、牛肉を與ふる如く、寧ろ害あつて決して營養にはならないものである。そこで兒童の宗教は飽くまで、兒童本具の宗教性に基いて施されねばならない。恰も兒童に飲食慾・睡眠慾・遊戯慾をその性能として持つて居るから、兒童をして飲食睡眠遊戯をなさしめ得る如く、兒童が有する宗教性に基いて、それを合理的に啓發させねばならない。然かも、鐵はその未だ熱の冷めない間に、之を打たねばならない。熱が冷めてからは、幾ら打つても形成は不可能である如く、兒童の宗教性もその萌芽の現はるゝ時機に於て、之を適當に教育せねば、遂にその萌芽を枯死せしめ、再び救ふべからざるものに陥るゝであらう。之に反し兒童の時に、兒童らしき宗教を與へて置けば、

彼等は青年壯年老年と成長するにつれて、それ相應の宗教に生きて行けるやうになる。從來非宗教的教育の方針の下に、教育された我國民が、終生遂にその美はしき宗教的生活を表はし得なかつた所以は、その幼少年期に於ける適當なる宗教的指導を缺いた結果である。斯くの如きは決して完全に教育されたものといふことが出來ないのである。若しもその幼少時に於ける宗教的教育によつて、その情操が適當に陶冶されてあるならば、たとひ一時潜在的状态として、生活の表面から姿を消しても、何等かの機縁に觸れて、再び幼少時の情操が、新たなる意味を以てよみがへるといふことは、心理學的にも、又實際的にも、最早疑ふ餘地もない事實として信せらるゝやうになつた。宗教的教育は、其根據をこゝに置かなければならないのである。

第五節 宗教々育機關と神佛耶三教の比較

佛耶二教の教義から來る困難 一口に佛教基督教と云へば至極單純に聞こゆるが、その實はそのいづれもが數多くの宗派に分れ、互に宗派心を固守して相譲らずといつた有様である。されば兒童を或宗派主義によつて教育して置いても、それが父兄及その地方一般の信仰と相反する場合、その兒童の困惑も亦甚だしいものがある。現に眞宗の日曜學校に通へる兒童が、その親が

日蓮宗であつたが爲め、嚴しく親から反對された。すると昨日までの日曜學校生徒が、今日からは大の反對者となつて、他の生徒にまで惡影響を及ぼすといつた例は、屢經營者から聞く所である。或は甲宗派の僧侶によつて經營さるゝ日曜學校は、常に乙宗派丙宗派の僧侶達より非難さるゝ。甚だしきは同宗派の僧侶までが、妬の餘り陰に陽に妨害するといつた醜態は、常に見聞する所である。かくの如きは皆、宗派心或は寺門擁護てふ宗派宗教に附きものゝ淺ましい根性骨から起るのである。そこになると基督教の方は稍便宜な點がある。教會や牧師の間に於てこそ宗派的反目はあつても、一般信徒には同一の神と救主とを戴き、同じ聖典に基く教義によつて生活するのであるから、比較的統一され易い。特に歐米に於ては、學校家庭及社會より受くる宗教的感化も、略々一致して居るから、宗派を異にする毎に信仰の對象經典教義を全然異にする佛教に比して、基督教は遙かに統一性を持つて居る。

然しながら基督教々義に於ける、絶對唯一神や基督神性説、その他贖罪説等に至つては、到底我民族性にひつたりと一致するを許さぬものである。殊に我國に傳へられてからまだ日が淺いといふことが、一般民衆にはどこか外國の神てふ感情を起さしめ、爲めに眞實自己の神としての親愛を感せしむるには、餘程困難なる立場にある。況んやその儀式なり祈禱が、風俗習慣を著しく異

にせる我國兒童には、どこか肌が合ひ兼ねる所がある。之れ日本基督教がその始めから、日曜學校に全力を注げる割合に、その影響が遅々として振はない所以ではあるまいか。若しそれ特に努力する御愛想や贈物、或は若い魂を魅するその設備などを除いて、純宗教のみを以て臨むならば、その猶教會に留まる者果して幾人あるであらう。

此點になると佛教はその東洋的思想なる點が大體に於て一致して居る、況んや渡來以後久しき年月を経て漸次日本化され、その教義も亦、深遠なる哲學を背景として融通無碍なる長所を以て居るが、既に屢論じたが如く、佛教全體に漂へる消極的退嬰的悲觀的氣分は、到底快活なる兒童の活動性と一致しないものである。されば是れ亦何程の効果を擧げべきやは、甚だ疑問たらざるを得ないと思ふのである。

僧侶牧師の立場から來る困難 今日僧侶牧師がその寺院及教會所屬の檀信徒から、甚だしく制約を受けつゝあることは、殆ど門外漢の想像も及ばぬ所である。彼等僧侶牧師は因襲的に宗派心に強き檀信徒、殊に頑迷にして我儘なる資産家の御機嫌を害はざらんことを努むるが爲め、幾多の有意義なる思想も、單に思想として葬り去られつゝあることは、實に夥しい。今日宗派宗教が依然數百年前の舊慣を繰り返しつゝある所以、亦こゝに存するのである。彼等が檀信徒に於け

る關係は、恰も幼弱な遺子が專横なる後見人に於ける關係にあるのである。

そこでたとひ日曜學校を起したとしても、矢張りその頑迷なる父兄の意を迎へねばならないから、よしんば經營者が宗教々育の眞意義を理解し、それを實現せんとするも、忽ち父兄側から反對論が持ち上がる。例へば御經を教へて呉れねば駄目だとか、子供が騒ぐと本堂の疊がいたむとか、佛様に對して御勿體ないとか、愚な横鎗が絶えず起る。かうして今日多くの日曜學校が兒童の心身に反すると知りつゝ、依然舊式の勤行・祈禱・儀式等を、無理々々に詰め込まねばならない破目に陥つて居る。昨夏、日曜學校經營に相當の經驗を有つ我研究會の一員が、親しく關西地方の日曜學校を視察したが、十年以前に於ける状態に比して、毫も進歩の認むべきもなく、依然寺姑即檀信徒の意を迎ふるに汲々たる有様であると云つて居る。

加之、佛教僧侶は新聞雜誌によつて、屢無爲徒食者の如く排斥さるゝが、その實は決して然らずで、たとひ間歇的にもせよ繁忙極まる職業である。そは社會一般に葬式法事を以て彼等の本業の如く思つて居るから、人口の増殖と共に、これ等の業務は増加しても決して減少するためではない。恐くは人間のあらん限り葬式法事に携はる人間を要求するのであらうから、僧侶達は殆どその所謂本業に忙殺されて居る。これ又門外漢の想像以上である。且つ一般檀信徒なるもの

は、因襲の久しき、有意義なる新しき日曜學校に關しては、些の同情もなく寧ろ寺院としては餘計な氣紛れ仕事の如く心得て居る。「僧侶は葬式を營み門徒の位牌を祭るべきものなり」てふ筆法で、日曜でも土曜でも一向お構ひなく、葬式法事を申し込む。若し僧侶が之に應ぜざる時は、忽ち不信任、寄附金拒絶とくる。かゝる因襲を打破するには、餘程の決斷を要する。かゝる状態の下に、其日曜學校の如きは、屢々時間や場所の變更を餘儀なくさるゝのみならず、甚しきは一ヶ月二ヶ月も流會となることすらある。これが爲め看板丈は揚げて居るが、有名無實廢校同様のものも決して少くないのである。かくては兒童の頭にも、日曜學校なるものは實に不徹底な權威なきものに考へられ、又實際地方に依つては日曜學校といへば、既に教育家方面などから一種輕蔑の意味を以て遇せられつゝある所もある。不真面目なる日曜學校が、後に起る眞實の日曜學校にまで悪く影響するのである。

寺院及服裝から來る困難 僧侶が寺號を持ち寺院に住み僧服を着ることが、一般民衆から判然區別が立ち、その威嚴を保つ上に於て、基督教牧師等が一般民衆と何等異なる所なきに比して遙かに好都合であると言つて居る人もある。然しながらあの陰鬱なる殿堂殊に禮拜本位に傾きたる佛教殿堂は、到底日曜學校に不適當である。況んや兒童を幾組かに分ちて教育せんことは、

望んでも得られない。之れ佛教日曜學校が自然、聽衆向きの講演或はお伽會的に流るゝ所以である。之に關しては前にも述べた如く、米國教會では漸次教室本位の教會に改造されつゝある。新しく建設さるゝ教會は先づ教室を如何なる設計にせんかといふことが議せられ、講堂禮拜堂の如きは第二の問題とされつゝある。是れ從來と大に異なる所で、紐育市に於ける新しき教會は、學校と異なる所がないといふことである。強ち歐米に陶酔する譯ではないが、單に子供の宗教のみならず、青年壯年の宗教も秩序的教育的に施されねばならないてふ意見の現はれとして注目に價する。

次に服裝の問題である。滑稽地味たあの僧服、特に葬式と連關せるあの異様の服裝である。日曜學校の教師としての僧侶が、あの寧ろ滑稽に近い時代服を着けて葬式に列せる時、その日曜學校生徒に對して、隠れたいやうな感じを禁じ得ないであらう。某佛教女學校に於て、曾て親鸞の活動寫眞が催された。開く幕も開く幕も、頭を剃り立てた圓頂ばかり出るので、遂に學生は吹き出して仕舞つたといふことである。佛教經營の女學校生徒に於て既に然りとせば、以て一般兒童生徒が如何なる眼を以て、圓頂と異様の服裝とを見て居るか推察さるゝではないか。

之を要するに、今日の佛教僧侶、少くとも日曜學校經營者は、その僧侶としての生活様式に斷

然たる改造を加へない限りは、日曜學校經營は寧ろ絶望であるかとさへ感せらるゝのである。

宗教的教育實施上より觀た惟神道の長所

佛教基督教に如上の經營難ありとすれば、宗教的

教育は何人の手によつてなさるゝを適當とするか。余輩はこれを小學校教師に囑望するものであるが、若し日曜日を利用して特別の機關を設けるとするならば、之れをその性質上からいふも、その立場からするも、惟神道の精神に徹底せる神官神職及特志家、或は宗派外に超然たる宗教家に依つて、經營さるゝを最も適當なるものと信するのである。その理由は即本書の著述を思立たしめた所以であるから、既に以上の各章に於て既に其要を盡して居るが、今之を箇條書として擧げて見れば、大要左の諸點に歸する。

1. 惟神道は宗教の宗教とも云ふべく、如何なる宗派宗教とも衝突せず、寧ろこれ等の宗派宗教の基礎として、その人間本位に立脚する宗教の眞實生命を傳へ得ること。
2. 惟神道はその絶大なる溶和力を以て、如何なる宗派の信者をも之を抱擁し、彼等をして現代の要求する「宗派から宗教へ」嚮はしむるを得ること。
3. 惟神道は宗派をなせる宗教でないから、信教自由の問題に觸るゝことなく、然かも能く我民族魂に合致し、その宗教的生活を全ふせしめ得ること。

4. 惟神道の精神は學校教育の方針と一致し、その儀禮は國家の大祭祝日、皇室の典禮、氏神の祭典等あらゆる國家社會の儀禮と一致し、且つ家庭宗教の根本精神なる祖先崇拜は、全く惟神道の精神の發揮なるを以て、兒童は國家社會學校家庭に於て、統一したる精神の下に、その宗教的生活を營み得る便宜あること。

5. 日本神話に基く惟神道の精神は、民族の原始状態ともいふべき日本兒童の心性そのものであり、爾後の日本文明は總て此上に築かれ、又築かるべきものなるを以て、日本兒童の基礎的宗教として屈竟なるものなること。

6. 鬱蒼たる鎮守の森に千木高しける社殿は、原始的なる兒童の純朴性に適し、その晴々しき祭典儀禮は、樂天的な兒童の快活性に合し、沈鬱なる寺院教會に反して、神社は常に兒童の樂天地たるの觀がある。殊に寺院が死を連想せしむるに反し、神社は生を思はしむる點が、兒童教育上好影響を及ぼすこと。

7. 特志家は勿論、神官神職は、僧侶に比して日曜學校實施の時間を得易きこと。人道問題から觀た惟神道の長所 以上の理由に依つて、余輩は我日曜學校が惟神道主義に依つて經營されることを、最も適當と考ふものであるが、今一つ人道問題に關する根本的理由を舉

げねばならない。

「汝その敵を愛せよ」と言ふ、其口を以て異教徒を極端に排斥する基督教徒の基督教には、どこか超ゆべからざる人種的宗教的の差別的偏見を胎藏するものである。

「基督教では愛せねばならぬ敵を認めるが、佛教ではその敵すら認めない」と、平等觀に徹底し切つた如く公言しながら、矢張り他教徒を毛嫌するのみならず、同一佛教内に於ける宗派争を是れ事とする。嘗に現在ばかりでなく、來世までも極樂行と地獄行とを別けて、睨み合ふ宗派的差別觀は飽迄も徹底するのである。基督教でも佛教でも世界的宗教と口は廣くとも、その腹の狭さ加減には唯敬服の外はないが、宗派争は既成宗教の附きもの、蓋、人情の止むに止まらぬ弱點ではある。されば宗派主義の宗教々育は、兒童をして所謂宗旨争の戰士を養成すると云つた淺間敷い結果を招來する恐がないとは限らないと思ふのである。

然しながら人類の要求は、最早基督の教、釋迦の教といった、言教の争を聞く丈の餘裕は持たない。もつと根本的に魂と魂との交渉にまで進んで來た。人類の共同愛を叫び、人格の平等を求めて止まない現代には、人種の垣を築き、宗派の繩張りを擴げ、差別偏見の城に立て籠る彼等には、用事はないのである。垣もなく繩張りもない、おつ開いた人間の原野が手招いてゐるからで

ある。そこには神様の意思を覗き込んでびく／＼する必要もない。人間が自己あり丈の至誠を張り切つて、生きて行ける世界がある。影の薄い禁慾生活をいや／＼ながら遣る必要もない。天下晴れて人情暢達の生活を樂める世界がある。それは人生の平等相に立脚する惟神道の世界である。至誠一貫主義、人情至上主義、人情的國家中心主義を内容とする、我々大和民族が生んだ惟神道的精神である。我民族的宗教であるといひながら、敢て他教異宗を毛嫌ひする程、しかく偏狹ではない。寧ろ佛教儒教を消化して、彼等をしてその生れ故郷以上に、發展せしむる丈の雅量を持つものである。實に宗教の宗教として外人をして「神道より眞實なる宗教は少ない」と嘆賞せしめ、又「神儒佛を打つて一丸とする爲めには、いはゆる方便以外に向或るものがあつた。それは總ての宗教の本質的統一を求め、外形上異つた物をば出来るだけ調和させようとする人間の眞實の本能である。日本の宗教史は斯の様な盡力に充ちて居る」と叫ばしめた、その宗教史の中軸としての惟神道は、生れは日本でも廣く世界を光被する運命を藏して居る世界的宗教である。此の「之ヲ中外ニ施シテ悖ラ」ざる大道こそ、將に是れ人類の平等に徹せんとする現代人の要求する宗教であり、道徳であり、生活であらねばならない。又、將來世界の日本人として立つべき兒童の爲めにも、實に撰ばれたる宗教ではあるまいか。

敢て惟神道を推賞する所以である。

第二章 日曜學校論

第一節 宗派主義日曜學校に於ける教材

教材選擇の實際　つらく我宗教々育界の實情を觀察するに、兒童に何を與ふべきかの問題すら明瞭になつて居ないことを遺憾とする。勿論宗派主義の日曜學校に於ては、それ／＼その宗派々々の宗派的教材が與へられつゝある。然しその教材なるものが宗教々育の眞意義に對して甚だ不満足なものが多い。實際從來の宗教が専ら大人本位に發達し來つて、兒童の宗教てふことが殆ど顧みられなかつたが爲め、今や兒童は大人の宗教そのまゝを與へられて居る。幼兒に與ふるに牛乳の代りに牛肉を以てするの觀があるのである。尤も總ての人類に共通する人間性に大人小兒の區別はない。従つてその人間性を對象としてそれを開顯することを目的とする宗教々育に於ては、大人小兒を共同に同一教材を授けてもよい筈であるとも考へられ、又實際上さうした場合もあることは間違のない所である。しかし種子は同一でもその發芽以後の發達程度が違へば、又それに應じて與へる肥料の種類と分量とを異にしなければならぬ事も亦間違のない所である。

現代の科學は大人と小兒との差異點を教へて與れる。大人科の外に小兒科専門の御醫者の必要がある通り、吾々は大人にそれに傾聽しなければならぬ。特に此方面に未だ注意を拂ひ兼ねて居る我宗教家達に對しては、此方面を強く叫ばねばならない譯である。小兒科が獨立したからと云つてそれが大人科と少しも共通する所がないと云ふのではない。大に共通する所があると同じやうに、兒童教育上の教材と大人のそれとも共通のもので、間に合ふこともあることは論を待たない所であるが、今は兩者の相異點に應せんとする方面に就いて論せんとするのである。

余輩は昨夏以來關西及東京附近に於ける日曜學校を視察すると共に、その果して何を與へんとするものなるかを仔細に觀察したのであつたが、不幸にして未だ之れに對する明確なる意識を持つる者に出會はなかつたことに、少からず失望を感じて居る。彼等は唯漠然として何かを與へんとして居る。しかも彼等は何かを多量に詰込まんとすることに腐心して居るのであるが、その教材選擇の精神は何であるか、何を標準として擇材して居るのか、その邊の所が一向不明瞭なのである。否かうしたことすら考へることなしに、唯漠然と、兎に角、自己所屬の宗派々々の教義や開祖の傳記を賣り付けて居るのが多い。そこには兒童そのもの、現在及將來如何といふことよりも宗門繁昌信者製造てふことが、意識的に或は無意識的に、より強く動いて居る。そこで宗門の

十) (月 十) (月 九) (月 八)

- | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|---|---|---|---|----------------------------|---|---|---|---|-----------------------------------|---|---|---|
| 1 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 4 | 3 | 2 | 1 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| <p>花の寫生</p> | | | | | <p>花を集めて(極樂の話)</p> | | | | | <p>蓮と中將姫の話</p> | | | |
| <p>鳥を助けた日校生</p> | | | | | <p>蟹を助けた少年</p> | | | | | <p>蓮の精(佛教お伽)</p> | | | |
| <p>果物を佛に供する遊び</p> | | | | | <p>少年合級、聖徳太子と藥狩(藥草狩の遊)</p> | | | | | <p>佛のお護り</p> | | | |
| <p>(山遊び)拾栗供佛、</p> | | | | | <p>大無量壽</p> | | | | | <p>卍字の折紙</p> | | | |
| <p>不寒不熱の極樂を偲ぶ</p> | | | | | <p>一切經の話</p> | | | | | <p>卍字の説明</p> | | | |
| <p>秋の彼岸</p> | | | | | <p>光顔魏々</p> | | | | | <p>自由<small>(六金色にちなみ)</small></p> | | | |
| <p>不寒不熱の極樂を偲ぶ</p> | | | | | <p>法藏の發願</p> | | | | | <p>七高</p> | | | |
| <p>二河白道(善導)</p> | | | | | <p>千菊丸(源信)</p> | | | | | <p>有無の二見(龍樹)</p> | | | |
| <p>煩惱障眼(同右)</p> | | | | | <p>勢至丸(法然)</p> | | | | | <p>大乘小乘(天親)</p> | | | |
| <p>出家得道(同右)</p> | | | | | <p>二河白道(善導)</p> | | | | | <p>往相還相(曇鸞)</p> | | | |
| <p>出家得道(同右)</p> | | | | | <p>煩惱障眼(同右)</p> | | | | | <p>正覺末ノ三時(道緯)</p> | | | |

二) (月 一) (月 二十) (月 一)

- | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|---|---|---|---|-----------------|---|---|---|---|------------------------------------|---|---|---|
| 2 | 1 | 4 | 3 | 2 | 1 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 4 | 3 | 2 |
| <p>子太徳聖</p> | | | | | <p>親鸞聖人の</p> | | | | | <p>「お母さん」(稱名念佛)</p> | | | |
| <p>何故逃げない</p> | | | | | <p>越後の雪</p> | | | | | <p>葉拾ひ遊び</p> | | | |
| <p>常盤を好む</p> | | | | | <p>御流罪</p> | | | | | <p>松若丸と粘土佛<small>(粘土遊)</small></p> | | | |
| <p>稲目と佛像</p> | | | | | <p>武田信勝の發心</p> | | | | | <p>兩親に分れて<small>(粘土遊)</small></p> | | | |
| <p>太子の孝心</p> | | | | | <p>法難と越後の生活</p> | | | | | <p>寂長の靈告</p> | | | |
| <p>四天王寺の建立</p> | | | | | <p>教行信證</p> | | | | | <p>吉水の法話</p> | | | |
| <p>十七憲法の精神</p> | | | | | <p>隠れたる偉人</p> | | | | | <p>法難と越後の生活</p> | | | |
| <p>和國の教主</p> | | | | | <p>祖師巡化地圖製作</p> | | | | | <p>法難と越後の生活</p> | | | |
| <p>太子の御事業</p> | | | | | <p>祖師巡化地圖製作</p> | | | | | <p>法難と越後の生活</p> | | | |

(月)	3	(太子忌) 聖德太子と親鸞聖人
	4	佛教に關係ある手工 一 御名による生活
三)	1	仇を恩に報ひし信者の話
	2	善人は必ず報いらる
	3	(春ノ彼岸) 郊外散歩
(月)	4	卒業式
		佛の御用を 薩摩ノ青木千代 日向ノ關團四郎 念佛軍人の話

此教案を一瞥すれば、その如何に周到なる注意が拂つてあるかが窺はれる。即ち幼年には巧みに自由畫手工遊戯を配して、主として習慣に依つて佛が親切なお方であることを印象せしめんとし、その取材も動物草花親兄弟等、幼兒の生活に親近なものを撰び、しかも言語年齢等に就いては十二分の注意が拂つてある。幼い兒童をして樂みの裡に、佛の慈悲に觸れしめ、佛の愛兒として情深き者たらしめずんば止まないものがある。少年下級には親鸞聖人聖德太子の傳記を中心し、小さき眞宗教徒としての信仰生活を教へ、且つ本堂莊嚴佛器佛具等を機會ある毎に活躍せしめ、殊に六金色の旗の下に、佛の軍人として勇ましく魔軍と戦ふことを教へし所は、確かに此時代の兒童の心理を捉へて居る。少年上級には、釋迦親鸞七高僧聖德の傳記を、寧ろ其教義信仰を

主眼として教へ、以て佛教徒殊に眞宗信者として心得べき簡條を盡くして遺憾はない。且つ最後に灼熱的信仰を以て所有迫害に耐へたる青木千代女、關團四郎等の傳記を擧げて、その信仰生活を卒業後まで印象せしめんとする 著者の配慮を尊敬せずには居られない。

又時機を巧みに利用せる所に、著者の用意が周到である。即四月五月には花祭り及降誕會を中心にして、幼年には釋迦の幼時を、少年下級には親鸞傳を、少年上級には釋迦の根本教理たる輪廻轉生、善惡因果、六波羅密の概要を教へ、以て釋尊及親鸞出現の意義を語りつゝ信仰生活の必要を説き、夏より秋へかけて 眞宗の根本經たる大無量壽經及七高僧の教理の概要を教へつゝ、十一月月中旬より一月中旬に亘りて、再び親鸞を高調し、以て報恩講を營み愈々親鸞の印象を強め二月には親鸞の理想的人格としての聖德太子を中心に、佛教と國家及皇室との關係を刻みつける所、實に眞宗信者への用意として間然する所がない。その他梅雨月明を利用しては 釋迦の雨安居、月夜の會を偲ばしめ、春秋彼岸を利用しては淨土の莊嚴を憧憬せしめ、孟蘭盆 秋の山遊にも、必ず慈悲忍辱を旨とする佛教の精神を傳ふことを怠らない。かくてこそ理想的な小さい信者が養成さるゝ。殊に宗教々育の資料に缺乏する現代に於て 著者の苦心の程は多しなげばならない。將に模範的に近いものと推賞するに足るものであらう。

教案に對する一般的批判

然しながらそれは宗派に立脚して、堅い眞宗信者を作るものとして特に模範的であるといふのである。若しそれ兒童そのものに立脚して、一般的に批評するならば甚だ意に満たぬものが少くないのである。それは或は教案そのもの、罪といふよりも、佛教殊に眞宗教義に伴ふ非難であるかも知れないが、今その二三を數へて見ると、

1. 此教案の基調が全然、宗教とは死に對する準備であるといふことである。例へば幼年部に「いつかは死別れるでせう、然しながら死んだら？（兒童に答へしむる）そう、み佛様のお國へ生れさせて頂きます。」又少年部に「私達は死んでどこへ行くのでせう？……そうです皆んな同じみ佛様のお國へ生れさせて頂くのです」といふのが、入校當日のお話の一節である。又彼岸の解には「此岸から彼岸へ川で云ふならば何によつて渡りますか？……そう舟です、舟がなくて渡れません。舟は佛様の御教であります。けれど舟さへあれば行けますか？……そう、舟がうです渡して呉れる船頭がなくてはなりません。それを善知識といふのです……佛様の御國はどちらにありますか？ お浄土にはどんな花がありますか？ どなたが待つて居て下さるのですか？……」といふ風に、徹頭徹尾死後生活の準備である。更めて御尋ねして見たいが、之を兒童に尋ぬる先生方は、御浄土にどんな花が咲いて居るかを、責任を以て答へることが出来るので

あらうか。先生は之れに對する兒童のどんな答を要求するのであらう。空想を眞實らしく言はせるつもりであらうか。かうして生徒は全く解らない世界のことを、詰め込まれたまゝに囀返しするのであるが、實際それが兒童の世界と何程の交渉を持つて居るのであらうか。如何にも眞宗といふ宗門の性質を知らせるには都合がよいかも知れない、然し兒童達には想像も出来ない世界であるから、必ず疑問を起すに違ひない。そこで上級には「なせお浄土は西にあるかと問はれたら皆さんどう答へますか」と設問し、「どれ程學問が進んでも學問の力で、お浄土のことを知ることとは出来ません。本當の智慧をお開きになつたお釋迦様の悟りのお心へ、現はれたまゝを御説きになつたお言葉通り信する外りありません」と、曇鸞の口調で答へしめるやうに教へ込んで居る。かくの如き不可解の問題を與へねば、宗教々育にならぬのであらうか。是れが爲め將來兒童がどんなに無益の苦悶を重ねねばならないかを思はざるを得ない。勿論余輩と雖も死後の問題を輕蔑するものではない。又眞宗のかうした教の背後には、深遠な哲學が裏付けられて居ることも知つて居る。然しながらそれを、いはゞ未だ生れたばかりの幼少年、これから眞實の生そのものを味致せんとする彼等に、その出發の門出に於て、かゝる豫定的結論を與へることは、少し考へねばならぬことであるといふのである。斯うして彼等兒童達をして、その出發點に於て、現世を極端

に無視し、方便視し、現世生活を以て總て死後生活の準備視せしめんとする豫定的觀念を與ふることは、恐るべき人生回避、薄志弱行の徒を作ることになるのではあるまいか。

2. 次に此教案は餘り經文に拘泥し過ぎて居る嫌がある。勿論宗派の本来本の出版物としての關係もあらうけれども、余は寧ろ、既に現代を解して居る筈の宗派當局が、何故にいつまでも古代の印度支那の思想を固守せねばならないのか、甚だ領解に苦しむものである。例へば少年下級に於ける大無量壽經、法藏の發願修行の條である。五劫の思惟永劫の修行といふことを、經典の文句通りに、その昔法藏菩薩といふお方があつて五劫といふ永い間考へ、永劫といふ長い修行の結果、功成り願かなつて今は阿彌陀佛といふ我等の教主になりました。而してその一劫といふは「高さ四十里、富士山の高さの四十倍した位、長さ四十里（其地より凡そ四十里位の處を擧ぐべし）位、幅も四十里位の大變大きな石、その石を三年に一度づゝ天人（本堂内の裝飾等にあらば其によつて説明すべし）が來て、薄い羽衣で、此の大きな石を、すゝと撫で、その大きな石が、すつかり摩り終つた時を一劫といふのです」と説明するのである。その餘りに大法螺な話に、兒童は寧ろ阿彌陀佛をお伽の主人公と解するであらう。しかもそれが嚴肅なる御經文で、眞宗の根本經といふに至つては、その餘りに荒唐無稽であるとの疑問を懐かむるばかりではあるまいか。兒童には此法藏菩薩が果して何を象徴してゐるのか、決して解る筈はない。爲めに將來、この一度押された奇怪なる烙印が付き纏ふて、眞實の阿彌陀佛の理解を益困難ならしむるであらう。丁度基督教に於ける創世記や贖罪説が、今日冷やかな理性のメスにかゝつて、基督教そのものをも根本的に轉へしつゝあるのと同様の運命が、やがてこれ等の兒童の上に巡り來る日があるのであらうと思はるゝ。經文をそのまま、絶對眞理と信する頑固者流の受くべき當然の報酬である。

3. 次に此教案は死語を教ゆることに力瘤を入れ過ぎて居る。之れも前同様宗派主義を固守する所から、自然に來る弊害であるが、例へばその少年上級に教ゆる死語を列記すれば、六道輪廻十界の名目、六度の行、難行道易行道、聖道門自力、淨土門他力、有の見無の見、大乘小乘、往相回向、還相回向、正像末の三時、色光心光、阿彌陀の二義、教行信證、眞佛土、化身土等、まるで宗教専門學校其ままである。しかもそれ等のどれが現代生活に活用されて居るか。他に現代慣用の語はいくらもある筈である。然るにかゝる無用の然かも難解の文字を詰め込むことの、殊に漢字制限論の唱へらるゝ今日、寧ろその無謀なるに驚かざるを得ないのである。況んや又その説明が現代とは没交渉に、古代の印度思想そのままを襲用するのであるから耐らない。例へば正

像未の三時を説明するに「佛滅後五百年正法、教行證あり。同千年像法、教行あり。同萬年末法教あり。同萬年以後法滅、教なし。」(板書)現在を像李末法の濁世と貶すことは、尙古思想の舊弊に囚はれた思想であつて、進展止まざる現代思想とは到底一致しないことはいふまでもない。又十界の説明にしても、地獄餓鬼畜生修羅人間天人(六道)聲聞緣覺菩薩佛(四聖)と、これ等は主觀の實感としてこそ、今日の吾人の生活に意義を持つものであるが、さうした抽象的主觀的な問題は、とても十二や十三歳の少年少女には六ヶ敷い。といつて「私達はこれ迄地獄にも餓鬼道にも乃至人間にも天上界にも、六道の内、どこにも居たことが分ります。それは私達の心の中には地獄へ落ちるやうな瞋恚——腹立ち肝癢の心があります。そして餓鬼道に居た證據には物が欲しい惜しいと思ふ心があります……斯うして六道の内を、あちらこちらと迷ひ歩き、次から次へと生れて行くのを輪廻と云ふのです」と、丁度進化論の説明に似て非なるものである。なせかなら輪廻には逆轉があるのみならず、餓鬼や修羅や天人の住むといふ世界は、遺骨や考證が上がらないから、兒童には困る問題である。實際今日、女學生中學生の間に地獄がよく問題とされる。餘程主觀的に傾いた寧ろ神經質の者であれば兎に角、一般の血に燃ゆる連中には、隨分難解の問題である。といつて從來の大宗教が曾之を説く以上、矢張り問題とせずにはゐられない。その結果

は一は益々苦しんで之が解決に没頭する。他は「地獄なんて假定ぢやないか、宗教つてつまらないうちやないか」となつて行く。要するに苦を與ふるか、宗教無視に陥るか、此二であるやうである。その極めて少數者が、然も苦心慘憺の結果、餘程成年の後に始めて地獄を自覺する。一人を救ふが爲めに九十九人を犠牲にするといつた教育方法は、宗教の基礎教育としての日曜學校に於て採るべき方法でないことは解り切つたことである。兎に角、現代吾人の實生活特に兒童のそれと没交渉な死語を、多く教へ込むといふことは考へごとである。かくいふ余輩も、十數年間眞宗經典に眼を晒した者であるが、第四十三願の意を、此教案によつて始めて知つたことを感謝する一人である。

厭世悲觀に充てる讚佛歌

次に基督教の讚美歌に倣つて讚佛歌なるものが作られ、これを見童達に唱はせて居るが、これ又頗る厭世悲觀に富んだものである、今その讚佛歌の例を二三擧げて見ると、

佛の御手に、我等は引かれ、樂しき國に、いざや行かなん。

我等の罪も、佛の御手にまかせまつれば、我が世は安し。——佛の御手——

清きまどぬ、いざ友來よ、我等は皆、慈悲の子よ。愛みの花咲く園、御親はとく待ちませり。

怒り憎み、愛し嫌ふ、幾多の咎、多き罪。かくて終に、沈む我等、導きませ。御手たふと。行く手暗き、よみぢの路、絶えず守る、父の慈悲。何にたとへん、此の悦、いざや讀へん、我が幸を。

— 清きまどる —

此二つによつてその一斑は窺はれる。總てが現實的であり、具體的のものしか感ずることの出来ない兒童の心理には、先づ第一に、「佛の御手」「待ちませる御親」といふものを何と解釋するであらう。又「樂しき國」「花咲く園」といふ世界を何處に求むるであらう。此世界とは別の御主人とこの御主人と解すれば、今日の科學によつて説明されない世界と神とである。余は敢て科學萬能主義を信する者ではないが、科學を信すべく學校で教へられて居る兒童は、之が爲め苦しむことは、一とほりではあるまい。主觀上の佛と國とせんか、さうした抽象的な内觀は、到底兒童の解らない世界である。かゝる茫漠たる事を烙印された兒童の將來は、トルストイのいつたやうな結果に陥り、宗教々育は寧ろ君等が豫期に反した結果を招くであらう。

次にかうした茫漠たる佛を、しかも懐かしき御親として、力強く感せしむべく、人と此世とを飽くまで、罪深く濁り切つたものと卑しめねばならなかつた。こゝに佛教の厭世悲觀の思想を遠慮なく打ちまけて居る。今讀佛歌の中から「我」に冠する形容を摘んで見ると、「罪咎深き我」「罪

に惱む我」「力よわき我」「よるべあらぬ我」「浮世の旅路に疲れし我等」また「念の入つた我がある。「罪咎つくりてうれへのふちに沈める我等」「ぬばたまの間路惡魔のちまた迷へる我等」「人の世の愛におぼれし我等」とある。愛することすら恐ろしき罪なのである。また「御念の入つたのは」「八千草亂る秋の野に露に咽びて啼く蟲の彷徨ふ如き我々」といふのがある。活社會に用事のない大人の弄ぶ歌ならば兎も角、兒童の心はしかく己が罪を感じ、又自分をかうも悲觀してゐるであらうか。斯くの如き悲觀的な思想を、あの快活な純潔な心に刻み付ける必要が何處にあるのか。成人の後に、かうした傷ましい心を持たせる準備を、今からして置かうといふのであらうか。

次に歌集の中には現世を教へていふ「迷の里」「あゝ夢うつゝの境」「爭妬慈や怒悶に責められて、逃ぐるすべなき罪の世」「實にこそ似たれや花の露や、人の世かくて亡ぶるなる」「げに世は露か稻妻かよ、水泡の如く消えゆけど」何たる厭世悲觀の哀調ぞ。余は之れ以上擧げるに忍びない。かゝる人生觀は君等が虚偽欺瞞の結果、嘗めさゝれた見苦しく、淺間敷き世相であつて、兒童の世界とは全々交渉の世界である。君等がねぢけた心で求めた、かゝる見すばらしき人生觀を、あの希望に輝く眼を持つた幼い魂に知らせることは、實はお咎しくはないのか。全體君等は

どうしようといふのか。將來かゝる淺間敷き人生を味ふべしといつて聞かせる積りなのか。余はかゝることを教へねばならない君等の心理を解するに苦しむ。

君等の遣り方は、膏藥の利き目を顯はすべく、先づ完全な皮層を掻きむしるのである。而して所謂傷口に鹽の浸み込むやうに、佛の御利益を味はせようとするのであるが、幸にして兒童は、かゝる厭世悲觀的な考は持ち合せて居ないから、何のことやらサツパリ解らない。君等が唱へといふから、譯わからずに唱つて居るのである。譯が解らないから害は無いものゝ、若しその意味が兒童に解つたとしたら、それこそ事だ。君等の遣つて居る宗教々育なるものは、全く、我と現世との打ち壊はしになるのである。恐ろしい事だ。「我等の罪も、佛の御手に、任せまつれば、我が世は安し」といつて居る君等のことであるから、餘り責任も感じないであらうが、兒童とその作る社會との迷惑は耐つたものではあるまい。

全體親鸞の惡人正機の宗教は、餘程徹底した者でなければ體驗されない深い味があることは、君等も充分承知して居る筈である。今例に擧げた讚佛歌にしても、その言葉は極めて優さしいが此中には正宗の名劍が含まれて居る。一步誤れば理智と經驗とに乏しい兒童を誤ること甚大である。君等が宗派宣傳といふことに急なるの餘り、かゝる危険を敢てする態度を見ては、黙する譯

に行かないのである。余は敢て毒舌を好むものではないのである。

君等にしても、かゝる厭世悲觀に満ちた歌が、兒童に不適當であるといふことは、あの唱ふことを好む兒童が讚佛歌を厭やがる態度を見ても、直く解る筈である。適當な歌が作れないのならば、それが作れるまで寧ろ唱歌など廢するがよい。然しながら此筆法で行くならば、現在今君等がやつて居る總てを、見合せねばならないかも知れない。兒童の爲めを思ふならば、それが却つて善いかも知れない。君等の心に「何を與ふべきか」の確立するまでは、寧ろ何も教へないで兒童からあの快活な、生きた神様のやうな遊び方を學ぶ方が、いくら効果があるか知れない。

序に讚美歌のことを参考までに言つて置く。基督教日曜學校では、讚美歌は餘程重要な役割を勤めてゐる丈に、細心の注意が拂つてある。讚美歌といふ名が示す如く、神の美を讃へる爲めに作つたものであるから、その歌詞が氣持よく出来てゐる。必要上人生や罪惡のことを云つても、讚佛歌のやうにくどくどしくはない。極くあつさりとしたわがよのたびち」とか、「さだめなきよ」とか、「よはきもの」とか、「まよへるもの」と云つて、直く神の美を讃へる方が重になつてゐる。この注意は殊に少年用讚美歌に於て著しく感ぜられる。諸君、試みに讚美歌を注意して讀んで見らるゝがよい。直ぐ氣付かれることである。

第二節 宗派主義日曜學校に於ける教材撰擇の標準

封建的教育の舊慣 以上の如き教材を採り用ゐてゐるのは獨り本願寺派の日曜學校のみではない。基督教各派に於ても佛教各宗に於てもその教材なるものを見すれば、直ぐそれと氣付かる。いはゞ宗派主義日曜學校の生命といつてもよい程である。その教材撰擇の唯一の標準は、「社會生活上の便宜」てふ一點にあるのである。之は敢て宗教家のみに限つた譯ではなく、教育家然り、社會一般亦然りである。而して又そこには左様すべく無理からぬ事情もあつたのである。

それは封建時代に於ては、社會の慣例習慣風俗といつたものが、一種の社會的良心ともいふべきものとして、嚴存して居つたのである。今日に於ても猶ほ、相當の權威ある道德上の言葉として残つて居る、あの「そんな事する者が何處にある」とか、「そんな事すれば人に笑はる」といふた類の言葉に、廢せらるゝ權威がそれである。かゝる社會的良心が萬事を裁斷する最後の權威となつて居つたのであるから、個人的に何等の進歩改造が許されない固定不動の社會に在つては、生まなかり新規な工夫をするよりも、かゝる既成の社會的良心を呑込みさへすれば、大人も子供も

安全第一社會的生活に必要な道は立派に會得出來る譯である。あの「大人しい子供」といふ諺辭が遺憾なく此間の消息を漏らして居る。かゝる社會に在つては、その子供をしてなるべく早く、社會の一員としての資格を備へた大人に急造することが、親や先輩の最も親切なる義務と感ぜられた。即ち「社會生活上の便宜」てふことを唯一の標準として、子供に與ふべきものを撰び兎も角もそれを詰め込むことが必要であつた。要するに教育といふものは、是れ以外にはなかつたのである。明治維新以來、幾多の新思想は這入つて來ても、四襲の力は恐ろしい。大正の今日も猶ほ、この「大人しい子供」を作ることが、頭にこびり付いて居て、教育家は國民道德、道德教育の名の下に、封建的變態道德を植ゑ付けることに腐心し、家庭も社會も矢張りさうした空氣の中に、無意識的にかゝる定型に篋り込んだ、こまちやくれた所謂大人しい子供を賞讃する傾向がある。かうして兒童は今猶、固定化した大人の型を強いらるゝことによつて、彼等の純眞さを早くから奪はれつゝあるのである。最近教育學の進歩は、最早やかゝる無意識な壓迫を、兒童に加ふることの非を覺り、兒童を飽くまで兒童として、その心理その生活に基いて教材が撰ばるゝやうになつて來たのであるが、然し猶社會の實際は、殊にその實踐道德の方面に於て、依然封建的舊慣が暴威を振いつゝあるは遺憾千萬である。

驚くべき舊慣の傳燈者 特に宗教家方面には、かゝる舊い頭の持主が多いやうである。その宗派宗門の繁昌、寺院教會の擁護の目的から、或は父兄信者達の頑迷なる要求に應せんが爲め、兒童に固定的教義を、化石的信條を、詰め込みつゝあることは、前に屢述べたやうな次第である。因襲的宗教に囚はれた家庭へ、その因襲的宗教そのまゝを詰め込んだ兒童を送る方が、差し當り便宜でもあり、評判もよいからである。

余嘗て某基督教會の秋期特別傳道に列席したことがある。二人の牧師の説教の後、洗禮志願、求道志願を申込み紙片が配布された。稍あつて同教會員の某博士が、余に向つて受洗申込を強いた。御断りをする。「では求道申込を」と勸める。之も亦お断りする。「受洗は兎も角求道なり」と更に嘆願する。其必要を感じて居ないときつぱり断ると、忽ち態度一變、「求道の必要がないといふ人があるか」と、怒氣を帯びた口調に、余は恐れ入つて辭し去つたことがある。十數年間教會に浸つた余輩に取つて、最も不快を感じた一つであるが、思ふに氣の弱い人達は、少くとも求道文は申込んだであらう。かうして一夜の中に何人かの信者が出來て御満足の體といふのが、基督敎の宣傳振りである。牛乳や新聞の押し賣りと撰ぶところはない。露骨に言へば宗派主義者には、多數信者の製造といふ考より外何物もないのであるが、それをそのまゝ、宗教、教育に持ち込んだのが、彼等の日曜學校なるものである。

眞宗には領解文といふのがある。即ち數百年前に定められた信仰告白文である。それ以來眞宗信徒は此御定りの領解文を一字一句違へずに鵜呑にする。さうして彼等の信仰告白（領解出言といふ）といふことは其鵜呑にした領解文を型の如き語調聲色で、鸚鵡返へすことになつて居たがかゝる馬鹿氣たことは今日跡を絶つて居るであらうと思ひきや、眞宗の多くの日曜學校では、今も此領解文を暗誦させて居る。基督教に於ても型の如き祈禱上手な兒童は、希有最勝の信者として賞讃されて居るのであるが、抑も信仰告白てふことが已に無意味なことである。然かも一定の型が極まつて居るに至つては、寧ろ滑稽に感ずる。兒童にかゝる事をまで教ゆる彼等の無反省に至つては更に驚くの外はない。

歐洲大戰は端なくも基督教信仰の無能力を遠慮なく曝露した。その原因として舊基督教が徒らに罪惡の起原を論じ、贖罪説や三位一體の愚論を、然かも絶對眞理として繰返しつゝ、現實社會とは没交渉に、否現在を死後の世界の方便手段として、全く死後の自己完成の道に没頭し過ぎて居たからであるとの、非難の聲が高くなつた。教會の内部に於てすら、現在の肉の生活を離れて何處に基督の精神があるかと、叫ぶ者が出來たといふことである。我々人間の住む活社會では既

に已に、其點からは數百歩も進んで居る。今日にして漸く醒めた教會は餘りに人間離れがし過ぎ
てゐるかの觀があるが、然しながら今も猶全く眠り込んでゐる宗教家に比しては、遙かに上の部
である。我佛敎界に於ても、日曜學校でも經營しようかといふ程の人々は、せめて今日の教育學
位は少し眞面目に讀んで貰ひたいものである。

教材選擇の唯一の標準 宗教々育教材の選擇は、以上の如く兒童それ自身以外の何か他のも
の、必要の爲めであつてはならない。飽くまでも兒童そのものを標準としなければならぬ。即
ち兒童は「何を必要とするか」「何を求めつゝあるか」少く共、彼等をして何を求めしめ得べきか」が
唯一の標準であらねばならないことは云ふまでもない。宗門の爲め、父兄の要求の爲めといつた
或る便宜の爲めの標準は、封建時代の遺物である。昔はさうした時代もあつたといふ丈の價値
しかないものである。兒童の人格が認められた今日、かゝる時代錯誤の標準を持つて廻る人には、
此點に於て既に宗教々育を云々する資格なきものである。サイダーを要求する兒童に、親爺が酒
好きだからと云つて、兒童に酒の効能、酔拂つた時の心地よさを説いて、無理強いする馬鹿はな
い。農夫ですら、その相手たる作物を標準にして、それ／＼施すべき肥料の性質と分量とを定め
て行くではないか。いくら利き目があるからといつて、その分量を過ぎたならば、却つて作物

を害する位は心得て居る。宗教々育を施さんとするならば、先づ相手たる人間の心性を知らねば
ならない筈である。兒童の心理とその發達の過程とを究めねばならない。勿論、宗派主義の日曜
學校經營者に於ても、「兒童の宗教心を啓培して人類本然の本性を開發せんことを期して居るの
であらう。又「年齢學年性情を異にせる兒童に各適當せる教材を提供し、多種多様な教化材料
を按排整理して教授」しつゝあるのであらう。或又「凡て兒童に親しい世界」から教材を選擇す
ることを怠つて居ないのであらう。然し實際に於ては、前述の事情に餘儀なくされて、その多く
は無意識的に兒童を虐殺して居るのを如何にせん哉である。理論上では人並に論じて居つても、
その研究に向油が乗らない。眞劍味がない。それは全く鬼の念佛否御寺様の虚念佛と同様、空虚
なる叫びでしかない。特にその實際方面では「何分本山にその意思がないから」とか「父兄信者が
それでは承知しないから」とかいつた、不徹底極まる態度である。かくの如くにして、何れの日
に眞實の宗教々育が實現さるゝのであるか、甚だ心細い次第である。

第三節 宗派主義日曜學校に於ける教育方法の實際

專制的詰込主義の教育

人性を極度に悲觀した宗教から割出した、彼の宗派主義日曜學校の

教育方法は、自ら專制的な詰込主義に陥らねばならなかつた。彼等の宗教によれば、児童の心性如何は顧みることなくして、頭から人間を悪性者扱にして、いろいろの教義を教へ込むことによつて、その悪性を矯正し或は渡金することを宗教の任務であるかの如く、思つて居るやうである。換言すれば、児童の心琴から自然に漏れ来る神の調には、毫も耳傾くこと無しに、無暗に既成の宗教思想を注ぎ込まふとするのである。しかもその注ぎ込まるゝ宗教思想なるものが、些も児童の生活とは交渉もない、罪惡とか濁世とか懺悔とか純れとか云つた、濁り切つた大人の頭から割出されたものであることは、既に前節に於て述べて置いた通りである。そこには尊き人性自發的に向上進歩せんと努力しつゝある人性そのものに對する信念は、微塵程もないのである。頭から「地獄一定の徒ら者」「罪の子」なりと侮辱されて、「何事も因縁ぢや」「神佛の御計ひぢや」と教へ込まれては、最早や努力奮闘の氣力もなく、自己に對する責任もなくなつて終ふではないか。かうして彼等は、種々雑多な誤つた固定觀念を詰め込まるゝことに依つて、その生きんとする尊き心性を殺されて仕舞ふのである。幸ひにして児童は、さうした自分等とは没交渉な御説教を餘所に、山野に遊び廻つた時の面白ろさや、お菓子を買ふ時の嬉れしさのことばかり考へて居るから、その心性を殺さるゝことから免れ得るのであるが、若し日曜學校に教へる所が、一々子

供に影響したならば、果してどんな結果になるであらう。思つても戰慄を禁じ得ないのである。

中には如何にも教育家振つた態度で、問答式方法を探り、表面開發的教育を遣つて居るやうに見へる者もあるが、元來が宗派的固定觀念で固り切つた頭腦の持主である上に、早く信者を造らうとする熱が加つて、畢竟りは児童にある所のもを引き出さうとするのでもなく、児童の求むる所を探つて之に應せんとするのでもなく、又求めて来るやうに仕向けやうと努むるのでもなく、ひたすら自己の持てる固定觀念の方へ、引ばり付けるやうに問答を仕向けて行く。これを名けて開發的注入主義とでも云ふべきか。開發主義を裝ふた詰込主義であつて、教育上最も惡辣なる手段と謂はねばならない。若しそれ教育の何たるかを解せざる輩に至つては、殆どお話にならない。例の領解文や信仰告白文を鵜呑みに誦讀させ、それをそのまま吐き出させる。児童の世界と全く没交渉な、否現代に全く無用な、三惡道、聖道門、淨土門、難行道易行道、十字架、復活再臨、三位一體といった死語を、遠慮會釋なしに詰め込む。彼等の頭腦でも消化して居ない雑多の知識を注ぎ込む。生活に何の役立ちさうもない、寧ろ誤つた道徳的固定觀念を植ゑ付け、地獄で脅し、「光の子」で鍍金といふ、專制、威壓、詰込、干渉、曾て教育家に依つて繰返された所有非科學的教育法を振舞して、児童の心性を傷けつゝあるのである。從來大人を殺ろして來たその凄腕を

今は脆弱な児童に向けやうとしてゐるから耐まらないのである。斯うして生きんとする生命を、その芽生への間に、摘み取つて仕舞ふのかと思へば凝つとしてはゐられないのである。

吾人心性の本質 靜かに吾人の内省の鍾を、心性深くく卸ろして行くとき、吾人はそこに絶えず何物かを要求して止まない一種の力を感ずる。而して吾人は此要求に動き、此力に生きつゝあることを感ずるのである。實際吾々の起す所の一々の行動は、無目的に動くものではなく、實は此生きんとする要求に依つて動きつゝあることは明かなことであつて、彼のアミバー時代から、進化に進化を重ねて、今日此複雑極まる生活體にまで發達し、將來も永遠にその完成に向つて進まんとするその根本原因は、實に此、よりよく生きんとする要求の然らしむる所であると思はるゝ。されば吾人の要求は、無限に連るものであつて、一を得れば二を、二を得れば三を、四をと永久に進展しつゝ繼續するものである。換言すれば、吾人の人間性は、次から次へと起り來る要求を満すべく、不斷に動き、絶えざる活動を續けて止まないものである。而して此要求此力の進路を妨ぐる何物をも、突破せざれば止まざらんとする強い力を持つて居る。否その障害が強ければ強い程、之を突破せんとする要求そのものも、一層強い力として動いてくる。此力こそ吾人の生命ともいふべきものであつてたゞに吾人自らを生かしつゝあるのみならず、吾人を圍繞する總

てのものに意義を與へ、價値を與へ、且つ一切のものを生命付けつゝあるものである。換言すれば總てのものは、吾人のこの要求實現を助くるものとして、始めて吾人に對して意義と價値とを生ずるものである。否一切のものは總てこの一大目的に向つて、進展せんとする根本原理に立てるものである。神といひ、第一原理といひ、真理といふ、其他名は異つても、一切の科學哲學宗教は此生命を追求すべく、各その異なる進路を取りつゝあるものと見ることが出来る。

されば吾人の心性は、この己を生かし他を生かしつゝ、生き通しに生き續けんとする力に生きて居るものである。此生命に目醒め、此要求を生かし、此力を延ばして、生命をして眞に生命たらしむる生活、それが眞實の意味に於ける宗教であらねばならない。されば宗教とは吾人の心性そのものが、心性そのものゝ行くべき道に生きて行く姿に名付けた名稱であつて、これが余の所謂惟神之大道なることは、前にも屢述べた所である。従つて宗教なき所に眞實の心性のあり得やう筈もなく、宗教無視とはやがて心性無視といふことになる。宗教抜き教育は、亦心性抜き教育を意味する、明治以來の教育は、將にこの心性抜き教育であつたのである。

今日の教育が、かゝる心性抜き教育の詰込主義のものとなつたに就いては、その最大なる原因は、此宗教無視にあるとしなければならぬ。それには、頭から宗教を迷信と貶し、野蠻の遺物と斥

け、終に宗教の眞實生命を探らうともしなかつた教育者にも罪はあるが、又宗教家それ自らが、依然として在來の形式化せる宗教、いはゞ宗教の屍を株守して居たのにも、その罪の大半を歸せねばならない。

心性を無視せる死の宗教　愚昧なる宗教家は、古代人の觀じた通りを襲用して、生命の進展して止まない相を、諸行は無常なりと悲觀し、心性の病的狀態をその眞實相と見誤つて、濁惡邪見の徒ら者と觀じた。而して又、此向上進化の途上に於ける一時的變態世相を觀じては、五濁惡時惡世界、未法濁世と嘲つたのである。地獄極樂、輪廻轉生といった所謂八萬四千の固定觀念に壓伏されて、南無阿彌陀佛と悲鳴を擧げ、助けたまへと乞食のやうに縋り付く何處に、尊き生命の相がある。生きんとする生命を撲殺すれば、最早や心性は永久に眠つて仕舞ふ。彼等の所謂安心あんじん即信仰は、かゝる尊き心性の撲殺を意味するものである。如何にも永く眠つて仕舞へば安心であらうが、かゝる狀態は決して生きた魂の堪へ得る所ではない。天國、罪の子、奇蹟、天に在す吾等が父なる神よなど云へば、如何にも舶來の新しいものゝやうに思ふかしらないが、矢張り悲哀極る聲を絞つてお助けを乞ふ乞食根性の表現、その生命撲殺の態度に於て、何等佛教と異る所はないのである。かゝるものが宗教であるとするならば、余も亦宗教無用、否宗教有害を叫ば

ねばならないが、釋迦や基督が、かゝる愚な生活をしたものとも思はれない。寧ろ彼等教徒によつて、かゝる愚な宗教に惡化されたものに違ひない。かうした似而非なる殺人的宗教が、特にあの科學萬能、智識偏重の明治時代に敵視されたのは、寧ろ敵視した方が正當であるといはねばならない。しかしながら眞實の宗教は、決してかゝる心性無視のものではないのである。最近、死の宗教に對して生の宗教を、殺人主義の宗教に對して活人主義の宗教を、永眠の宗教に對して覺醒の宗教を、外的な獨斷的教義信條詰込主義の宗教に對して、内的な合理的人情至上主義に基づく宗教、心性そのものから自然に生るゝ宗教が高調さるゝ。又新しき意味に於ける宗教々育即ち宗教的教育が勃興するに至つた所以のものは、この蒙昧な舊宗教に對する覺醒の叫びである。

しかしながら久しき惰性は、宗教をして今猶、教育家を動かす程の大勢力たらしめ得ざるのみならず、宗教家の方面に於ても、未だ蒙昧を打ち破つて、眞に徹底した宗教的教育の第一線に立つの勇士を缺いて居る。偶、新機運に動かされて、兎も角兒童にも宗教をと志す者があつても、既に棄てられた死の宗教を、永眠の宗教を、殺人の宗教を、そのまゝ小さい頭へ無理強ひすることをして、能事終れりと濟し込んでゐる。與ふべきものを誤つた彼等は又、その如何に與ふべきかの方法をも誤つてゐる。前に教育家によつて繰り返へされた專制的詰込主義を、今又宗教家に

よつて繰り返へされつゝあるとは、我國兒童こそよく／＼呪はれたものと云はねばならない。その極めて少数者が、科學的方法に依らんと焦慮して居るが、是又、科學的方法に拘泥して、却つて宗教的生命の枯渴を來しつゝあるのである。こゝに余は、孔子釋迦基督に依つて示された、超科學的方法——次章に詳述——を叫ばねばならない必要に迫つてくるのである。

第四節 日曜學校教育法の根本的誤謬

彼等の根本的誤謬は、その固執せる悲觀的、人性觀に胚胎するのである。生活に疲れ切つた敗殘者を仕末付けるのならば兎に角、これから生きて行かうといふ希望に輝いた兒童を育てるのに、「人にはたとへ悪い事あるが習と聞いて居る。私もきれいにあらためて、今より善い子となりませう」と、唱はせるのは餘り残酷ではあるまいか。求知心に燃えた、而して自の力を信じ、自の力を試めさんと勇む彼等に「智慧も力もないけれど、慈悲の佛のお名前を、稱へる時は私でも、偉い人と同じ事」と、歌はせるのは殺生ではあるまいか。天真爛漫、生命そのものともいふべき兒童の心理を、一旦悪いもの、力なきものと思ひ込ませて、更に悔ひ改めさせたり、依頼心を引きせたりする要は、何處にあるのであらう。「死中に活を説く」のだと云ふかも知れないが、さう

した權道は、悲觀のドン底にある人間を生かす特殊な方法でしかない。一般のしかも順當に伸びて行く兒童を救ふ道ではないのである。全體佛敎家は、一切衆生悉有佛性(三編一章三節)てふ、人性の根本的方面を忘れ、その病的方面ばかりを高調して、それが人性の全部であるやうに思つて居る。昔、或哲人が、火種を貰ひに隣家へ行つて、その火の傍に坐り込んで、議論に花が咲いて、遂に歸るのを忘れたといふが、彼等も亦人性に潜む佛性の火種を取りに行つたのだが、罪惡生死の餘談がはづんで、終に本來の目的を忘れて終つたのではあるまいか。さうして宗教と云へば直ぐ、人性を悲觀し現世を厭ふことの如く思ひ込むのである。しかし斯うした無氣力、病的状態に陥つた敗殘者は、人間の總てではない。否人間本來の常態は、その飽迄もより善く生きんとする生命である。今日此人間の常態を失して、いやに悲觀厭世家振る變態的人間の多くは、所謂宗派宗教の洗禮を受けた罰なのである。當然宗教家によつて癒やされねばならない大病人であるが、亦何も態々病人を作つてまで仕事を拵へなくてもよいではないか。それよりも宗教の眞實義に立ち還り、世道人心の爲め、國家の爲め、兒童そのもの爲めに、心性の本質を立派に育て上げて、健全な人間を作り上げることに骨を折つてはどうか。それが爲めには、どうしてもその固執する人性觀そのものから、改めて貰はねばならない。その人性觀を改めない以上、それから

胚胎する、専制、詰込、壓制と云つた所有非人道的な教育法を、脱却することは到底出来ないものである。正直に云へば、人性を無視した舊い宗教を棄て、今一度人間の第一歩から出直すに如くはない。そして燃ゆるやうな人間の生命に基く宗教を、汝の同朋と一緒に味ひつゝ、共に俱に人間向上の途に上ることをお勧めする。全體宗教は人間の持つべきもので、特に宗教家てふ宗教専賣業があると考へるのが、そもぐの間違である。

宗教家てふ特種な殺人團を作るから善くないのである。過去に於て此等の殺人團が如何にその暴威を揮つたか。注入主義、鍍金主義の本来本元たる彼等殺人團は、形式主義の儒教と締携して専制主義の幕府を援けて、こゝに人情壓殺主義の封建的氣風を作り上げたではないか。その餘弊は今も、我國の政治家道德教育家の頭を支配して、立憲の美名を冠つた専制的政治、封建の舊殼を脱し切らない國民道德、開發を裝ふた詰込主義の教育が、當り前のことのやうに行はれてゐる。而してその黒幕にかくれてこれ等を操つて來た魔手は、彼等慈悲を裝ふた殺人團であるのである。

第五節 日曜學校の向ふべき目標

しかしながら、世はいつまでもかゝる魔手に愚弄されてはゐなかつた。人間の心性に目醒めつゝ、漸次個人の生命を尊重する氣運が、社會の各方面に擡頭して來た。それと共に既に論じ古された兒童の個性を尊重せよてふ教育理論も、今や教育の實際問題として、眞面目に考究さるゝやうになつた。特にその知識技能の教育に於ては、既に改新の實を擧げつゝある。兒童の力を信じ、自發自活自働と、飽までも伸んとする兒童の心性そのものに教育の動機を置いて、その伸びるがまゝに伸びさせやうとするまでに進歩して來た。此傾向を知るや知らずや、依然非教育的方法を繰返して居ては、今に兒童からも見向かれないうやうになるであらう。否既に某縣に於ける日曜學校が、教育者間の問題となつて縣當局まで動かした事實は、これを證明して居る。今は大に覺悟を要する秋である。此際彼等はその立て籠つた専制的殺人團を脱すると共に、社會に漲る専制的氣風撲滅軍の第一線の勇士、これが此際探るべき諸子の最も忠實なる道である。それは何も變つたことをするのではない。諸子の渴仰する釋迦基督は、立派に活人劍を遺して居る筈である。既に敗滅に近い所謂信者達は致し方はないとして、これから新らしく生きて行かうといふ兒童の教育方面に於て、家傳の活人劍を揮つたなら、それこそ兒童の爲めに慶賀すべき丈でなく、恐くは釋迦も基督もその久しい愁眉を開かるゝこと、思はるゝ。「心性もとよりきよけれど、此世はまこと

のひとぞなき」と云ふその「けれど」以下の泣き言はよして、その「もとよりきよき心性」の積極的開顯に努むべきではあるまいか。こゝに立派に自發自動の教育主義の根本原理が閃いてゐる。「虚假不實」「貪瞋邪偽」といつた雜草を取り除くことに全力を注いで、その根本目的たる清き心性の木の根を荒すが如き愚は止めたがい。心性の根本さへ育て、行けば、邪惡の雜草は自然自滅する筈ではないか。然るに従來こゝに出でざるのみか、寧ろ雜草を木の根と取り違へて、雜草の培養に力瘤を入れて居つたのではあるまいか。かゝる根本誤謬を敢てしたが爲めそれより出づる教育方法が、專制鍍金威壓、あらゆる非合理的なものに陥らざるを得なかつたのである。されば余は彼等が一日も早く、その心性悲觀の態度を改むべきことを望んで止まないものである。

之を要するに、從來誤つた宗教家によつて、兒童の生命が傷付けられつゝあることは、如何に多大であるかを思ふの餘り、寧ろ過激と思はるゝまでに宗教家を非難したのであるが、余輩は別に諸君を攻撃して、以て快しとするものではないのである。實は、余自身が過去二十年間、坊主として、教員として、かゝる殺人的大罪を敢て犯し來つたことを反省し、衷心戰慄を禁じ得ないのである。されば先づ余自身が此非難攻撃に價する第一人者なることを自白せねばならない。攻

撃者である余は、又同時に被攻撃者の先頭第一に立つものである。黒住宗忠の云つた「言葉を以て人を殺すは、劍を以てするよりも其罪深し。劍は形のみを殺すものなれども、言葉は人の心をも併せ殺すべければなり」の一言は、深く余の心臓を刺つたのである。その諸君を罵倒する所にも亦、願くは自己の過去に向つて、深刻な反省を重ねつゝ、新たなる出發點を産み出さんとする陣痛の苦悶に外ならないのである。

而して目下余が懷抱する宗教的教育の機關としては、現今の所謂日曜學校なるものに俟つよりは、寧ろ幼稚園及小學校の先生達をして、宇宙人生に對する敬虔なる信念を持たしめ、その教授遊戲の間に自然に漏るゝ彼等の信念の感化が、不知不識兒童の生活をして、宇宙人生に對する深厚なる信念を、持たしむるものであらしめたいと思ふのである。而して強いて日曜學校なるものを用ゆるとするも、それは現在あるが如きものではなく、矢張り此精神即惟神道的精神に基く所の、もつと自由な子供の樂園であらしめたいと思ふのである。余が特に宗教的教育を主張する所にもこゝにある。その教育方法に就いては、以下二章に於て、これを論ずることとする。

第三章 宗教々育方法に關する概説

第一節 注入主義の教育法

注入主義的教育の弊害 前章に於て余は現今の日曜學校教育の實際が、全く注入主義詰込主義に陥つて居ることを指摘した。こは教育界に於ても常に問題とさるゝ弊害であつて、實の所を云へば、新しく起る教育主義なるものは、畢竟この詰込主義的教育の跋扈に對する、反抗の聲と云つてもよいのである。實際今日の教育界も、その理論としては、或は開發主義が唱へられ、或は自發主義が叫ばれ、又は活動主義が主張されつゝあるに拘らず、その實際に於ては、依然として詰込主義に陥らんとする傾向が改まらない。殊に道德教育、國民教育の方面に於ては、今猶封建時代傳來の徳目例話の詰込みを繰返して居るのである。全體教授細目といふものがあり教授案と云ふものがあつて、此時間には是非とも、是れ丈のことを教へ込まねばならないと、始めから先生の頭の中——その實教材は國家の命令で一定され之に依つてその教法も亦制限されて居る譯である——に、教へる分量と方法とが決めてあるが、生きた兒童生徒が、果して先生の思ふ壺に

篋り込んで來るか否かは、保證の限りではないのである。況んや其教授細目及び教授案なるものが、大人が斯くあるべき筈だと考へた考案に基いて、拵へられたものであるから、多くは兒童の考へ方とは違つて居る。そこで先生が、教育學の指示する問答法によつて、教授を進めんとすると、兒童生徒の應答は、全く先生の思ひ設けぬ方面に走つて行く。さうしてとても豫定の教授が出来ないことになる。そこで威壓的方法を以てしても、兒童の應答をして先生の思ふ壺に落ち込んで來るやうに、仕向けねばならない。従つて兒童の答なるものは、先生の顔色や暗示から判斷して、先生の御意のある所を覺つて、偽りの答をしなければその場が治まらない。この機轉の利かない生徒は、永久先生の教授を妨害する劣等生たらざるを得ない譯である。かうして表面は問答式開發的方法によつて居つても、その實は、先生の意見を強いて生徒に言はしめたまでのことである。依然注入主義たらざるを得ない、即ち開發を裝ふた詰込主義であるから、開發的注入主義とでも謂ふべきであらう。

かゝる開發的注入主義によつて教育された兒童生徒は、常に先生の顔色を窺ひ、先生の思ひ、を悟る習慣を養成さるゝ。自己の裡にあるものを大膽に表現することの代りに、大人びた先生の意見を迎へることに忠實たらざるを得ない。而して今日、所謂學力優等品行方正の光榮を贏る

生徒は、實際かうした利口者であつて、彼等が將來社會に立つに及んでも、人の顔色ばかり窺つて居る。さうして巧みに人の目を胡魔化して、上手に生活するやうになる。會その度を過ぎた小數者が、模範生模範青年の不正事件として警察の御厄介になるのである。

注入主義教育の由來 抑も教育學開卷第一に、教育とは引出すといふ程の意味を持つ言葉である。されば教育は兒童の天性自然に従ふべきであると、教へてあることを百も承知の教育家がどうして引き出さうとは努めずして、詰込まうとするのであるか。又どうして人間性無視の干渉主義を振舞はさうとするのであるか。その由來する所も決して少くないのであるが、今その有力な原因を擧げて見ると、先づ第一に徳川時代から持越して來た專制的氣風を擧げねばならない。

徳川三百年の治世は、實は專制主義が政治道徳宗教教育その他所有方面に徹底し切つた時代であつた。專制を專制と感ぜない程、國民の頭腦を專制化した時代であつた。その餘弊は今日も猶國民生活を動かす最後の力として有してゐる。時代の新人を以て任ずる人さへ、この深く植ゑ付けられた專制的氣風を脱し切れないで、ともすると平素の主張とは反對の專制振を發揮して、世を驚かすことがある。而して本人自身も一向それとは氣付かないといふ程、この專制病は膏盲に

入つて居る。注入主義植込主義干渉主義形式主義、その名は異つても要するに教育上の專制主義に外ならない。我國民の頭腦には、教育と專制といふ二つが、不可分離の關係のものとして密着して居る。即ち教育とは、親達から見て世に立つに必要とされた智能習慣作法等を、無理やりにも兒童に詰込むことであると云つた考が行き亘つて居る。斯うした國民の注文に應ずべく餘儀なくされて來た教育家は、自己の懷抱する教育理想など、とても實現する機會さへ持たない。會少壯教育家がその所信を斷行せんとは、忽ち危険視されて教育界を放逐されねばならない。そこで彼等は教育界以外にその活路を求むるか、又は不平滿々、その日暮しに例の注文に應じて行くの外なかつたのである。實際今日に於ても猶、教育家とし云へば、先生てふ一定の鑄型に依り込んで、その惠まれた自己の天性を無理矯めに、早くから若年寄になり濟すべく要望される。又その若年寄になつて居る方が父兄にも信賴され、當局のおぼへもよい。かうしてせつせと、大人しい子供即若年寄を作つて行くのが、彼等の天職とされて居る。そこには殆ど何等の自由も許されてゐない。唯世間から要望さるゝ通りに、父兄から注文さるゝ通りに、又當局から命令さるゝ通りに、機械のやうに動いて居る外仕方がない。兒童の天真に見入つたり、自然の囁に耳傾けたりしてゐては、とても仕事が勤まらない。不精無精にでも專制主義を振舞はして、早く一般

から要求さるゝ若年寄を作り上げねばならないと云ふ破目になつてゐる。斯うして専制主義が、詰込主義、植込主義でふ色々の形を採つて、教育界に横暴を極めてゐるのである。

次にその第二の原因として、教師の便宜といふことを擧げねばならない。多數の生徒を共同に教育し、しかも世間の注文通りに若年寄を急造するには、特別な簡便法が必要となつてくる。内部から練り上げた堅い品物を作つて居てはとも間に合はない。そこで内部は兎に角、上塗り鍍金で胡魔化して置かなくてはならない。此要求に應ずべく豫ねて出来合の簡便法が、例の詰込主義押入主義である。兒童の小さい頭にあれもこれも詰込むに限る。一定の鑄型に押入れて、早く押出すに越したことはない。だがしかし詰込むにもなか／＼骨が折れる。骨の折れるのも道理、元來兒童の個性などを一切無視して、無理やりに欲め込ふとするのであるから、思ふ通りに行かない。そこで丁度待つて來いの威壓主義を適用する。學校の威、先生の威、賞罰、試験と云つたあらゆる威壓機關を活用して、否應言はさず鵜呑にさせる。是非の沙汰は抜きにして、兎に角盲従させる。特に便宜に出來てゐるのは、此威壓主義専制主義を更に簡單化した規則萬能主義である。これさへあれば、仕事は益輕便に且つ迅速にはかどるのみならず、不徳な教師、未熟な先生でも、充分間に合ふから至極重寶である。引き出すとか、自然に従ふとか個性に應ずるとか、兒

童の意志を重んずるといふことになる。兎角面倒がある。時には先生を手古摺らせる場合も起つて來ないとも限らない。それには詰込押入専制で押し通す方が遙かに片付きもよく、父兄の注文にも應じ得る便宜がある。斯うして詰込主義が是非の沙汰を通り越して、世間並の共通法でもあるかの如く、教育界を風靡して行つたのである。之を要するに詰込主義は人間性そのもの、裡に、教育の目的も方法も立派に備つて居るといふことを無視した方法である。人間魂の尊嚴を忘却して、たゞ外部から人間を整理して行かふといふ思想である。かゝる思想は又明治の中葉まで、隆盛を極めた歐化主義中にも胚胎して居たのである。換言すれば當時歐米の思想界に漲つて居つた啓蒙的思想の餘波を蒙つた譯である。されば余は詰込主義の第三の原因として、啓蒙時代の思想を擧げねばならない。

近世の自然科学が出立した自然現象に對する器械的解釋、即ち物體の變化は、それ自體から起るものではなくして、全く外部からの影響に基くといふ思想が、人間の解釋、精神生活の解釋にも應用されたのが、啓蒙時代の一般思想であつた。即ち彼等は、精神生活の本質を以て、自己内部よりの發達とせず、全く外部から及ぼす影響によつて、形成せらるゝものとするのである。これやがて人間を生命なき自然の事物と同様に取扱ふものであつて、その教育といふも、唯外部的生

活、感覺的存在、記憶、想像、慾望、行爲の結果と見るのである。されば道德に關しても、兒童は全く善惡何れにも付かざる中性のものであつて、教育者は之れを何れかの型に造り上げべき權能を持つものとされた。兒童は丁度教育者の掌中に置かれた粘土であり、教育者はその欲するがまゝに、之を形成することを得ると考へられた。そこには兒童自身の裡にある、自ら伸びんとする力は毫も認められてゐない。彼のロックが兒童は白紙であるとして、教育萬能説を説いたのは、將に此時代の教育思想を代表せるものと云ふべきである。かゝる思想の流行せる世には、教育とはたゞ詰込むこととせられ、それが一般教育者の頭を支配し、折柄一般の風潮をなせる專制的氣風と呼應して、詰込主義の教育法が拔くべからざる固疾となつたのである。

注入主義教育と悲觀的人性觀 以上の如く注入主義の教育は、兒童生活の自然を無視して、單に國家や父兄や教師の便宜から割出した教育法であるから、元來兒童に無理を強ひるものであることはいふまでもない。『されば先生の思ふ通り成績の擧らないのが寧ろ當然である。そこで「いくら教へても覺えない」、「如何に言つて聞かせても薩張り直らない」、「どうも表裏があるので困る」、「拗ね根性があるので閉口だ」、「直ぐ反抗的態度をとるので始末が悪い」との嘆聲となる。かうなると教育方法の誤つた結果とは氣付かないで、人間性に對して一種の悲觀的信念を持

つやうになる。兒童の性を悪いもの、執拗なものと思つてかゝるやうになる。人性は惡なり、その偶善なるものは、人爲即偽なり、といつた荀子の説は眞理である。宜しく人爲の儀禮を以て外部から人間を規制して、出来る丈け性の自然を飾り付けねばならないと觀じ、遠慮なく威壓的專制的方法を以て、外形丈なりと整へやうとする。斯うして專制と悲觀とが、互に因となり果となり尊かるべき教育事業が、恰も體裁のよい監獄でともあるかの如き醜いものとなるのである。即ち尊かるべき教育事業が、恰も體裁のよい監獄でともあるかの如き醜いものとなるのである。即ち先生と生徒とがたゞ形ばかりの對立で、内心は離れ、となつて、先生は生徒を疑ひ、生徒も亦先生を信じない。而してこの離れ、の偽り心を結び付けるものは、冷やかな威壓と、嚴かな校則とである。かゝる教育から作り出された所謂人間なるものは、「他人を見たら泥棒と思へ」て人を疑つてかゝる排他主義の人間でしかない。

最近心理學及兒童學の進歩は、かゝる詰込主義の、徒らに兒童生徒を毒するものであることを示す材料を、無數に提供して居る。こゝに教育界方面に於ても大にその非を覺り、漸次科學的方法に依らんとする傾向が、愈々切實になつて來た。しかるに茲に余の奇怪に堪えざることは、今日宗教家に依つて施されつゝある日曜學校なるもの、教育方法を見るに、既に教育界に於ては棄て去られんとしつゝある詰込主義の教育法が、これからそろ／＼と採用され然も層一層人間性を

無視して極端な教義信條の詰込みを始めんとしつゝあることである。余は宗教々育研究者の立場として、かゝる惡傾向に對して飽までも戦はねばならない。

第二節 科學的方法と超科學的方法

教育方法の出發點 抑も育兒上幼兒に如何なる食物を與ふべきかは、一に幼兒の身體發育の自然が、如何なる食物を要求しつゝあるかに基いてなされねばならない。總ての生物はそれ自身に、より善く生きんとする能力を失天的に恵まれて居る。即ち赤ン坊には、教へられずして本能的に乳房に縋り、大人が眞似も出来ないやうな巧妙さで母乳を吸ひ出す能力が、自然に恵まれてある。而して彼の身體の發育が固形物を吸収するを要する時期は、その齒の發生、言語及味覺の自然的發達によつて示さるゝ。幼兒が「おとゝ」なる言葉を發し得る時期を待つて、漸次固形的食物を與ふる習俗は、かゝる幼兒發育の自然から考へ出された育兒上の習慣である。

かくの如く幼兒が將來堂々たる大人にまで發達し得ることは、單に周圍から與へらるゝ養育法及教育法によるばかりではなく、既に幼兒それ自身が將來立派な大人となるべき、可能性をその生命として具備して生れて來て居るのである。育兒及教育なるものは、寧ろ此幼兒自身が胎藏す

る可能的狀態をして、現實的狀態にまで引き出す爲めの、補助的手段に過ぎないものである。されば幼兒に如何なる食物を與ふべきかは、養育者の勝手や都合に依つて決せらるべきでなく、飽までも幼兒自身の自然的發育に依つて決せられねばならない。それと同様に、兒童に如何なる精神的食物を與ふべきかの問題も、全く兒童そのものゝ、自然的要求に基かねばならないことは云ふまでもない所である。即ち養育者が、幼兒に何を與ふべきか、又それを如何に與ふべきかを、幼兒の自然的發育に應じて研究された育兒學の指示する所を、忠實に實行する如く、教育者の義務は、如何なる教材が兒童に要求さるゝかを見出し、且つその撰ばれた材料を如何に與ふべきかを、兒童の自然性に問ふべきである。教育學の研究といふことも全く是以外には無いのであるが宗教々育をして兒童に適切なるものたらしめんには、矢張りその教育をして、兒童その者の自然性に基くものたらしめねばならないのである。

臨機應變の活教育 育兒學及教育學が兒童の自然の發育に應じて、科學的に研究された賜として尊重すべきはいふまでもないが、しかし又一面かゝる科學的方法の實際的の價值如何、及その適用の範圍如何といふことも、教育に忠實なる人士の再省を要する問題である。

育兒法の指示せる法則に従つて、一定の食物を一定の方法に依つて型の如く與へてさへ居れ

ば、それで幼児は立派に發育して行くであらうか。そこには轉變窮りなき幼児の情況に應ずる、養育者の機轉が屢要求されないのであらうか。單に機械的に動く物體ならば兎に角、生きんとする生命に依つて動く人の子を取扱ふには、育兒法にも示されてない臨機應變の處置を、必要とする場合が常に起つて来る。何となれば育兒法は單に固定的抽象的な、一般的法則を示すに過ぎないものであるからである。これを個々の場合に活用せんが爲めには、養育者は常に幼児に對する温かい心持を以て、その時その折に於ける幼児の身體の情況を感知し、而してその特殊な變に應ずる食物の適否、分量の多寡を判定する鋭い直覺力と、之れを與ふる特殊な機智とに俟たねばならない。如何に整ふた育兒法も、個々特殊の場合に活用する養育者の機轉を缺いたならば、畢竟空文死法たるを免れない。そのこれを活かすものは、一に養育者の機轉にある。彼の「赤子を保つが如く心に誠に之を求むれば、中らずと雖も遠からず、未だ子を養ふことを學びて後に、嫁く者は有らざるなり」と云へるは、此意味に於て眞理である。科學的育兒法と云ふも、寧ろこの子に對する温かい誠から自然に自得されたものを、冷めたい理性の力に依つて整理し秩序付けた、一般的法則に過ぎないものである。されば生きた育兒法は、その法則にあるのではなくして、寧ろその法則を産み出す前提たる、母親の熱心な自得になくしてはならない。所謂文化的な若い夫婦が生半可

な科學的智識を振舞はして、却つてその愛兒を傷ふ場合も決して少なくない、寧ろ老練なる舊式の婦人が、「子を養ふ者、心を推して之を爲し、赤子の嗜慾に中つるものなり」と云ふ筆法で押し通す方が、屢成功することあるを忘れてはならない。要するに育兒の要領は、その場合々々に於ける養育者と被養育者との感應、交に任せた處置法の方が、單に機械的に科學的研究の示す所に従ふよりは、より以上の結果を得らるゝ場合も少くないのである。換言すれば、科學的研究の指示する所は、一般的豫備智識を與ふる丈の價值はあるが、決して之に拘泥すべきものではない。寧ろその法則を活用する臨機應變的方法、即超科學的方法が必要とせらるゝのである。つまり法則に拘らずして子を養つて行く所に、法則が生きて働いて居ると云つた育兒の仕方が、眞に子を養ふ道なのである。

精神的方面の教育に於ても、之と同様に考へることが出来る。勿論知的教育の方面に於ては、科學的研究の招來した心理學的方法、教育的方法に負ふ所も少くないのであるが、意志感情の方面を主とする道德教育、國民教育、特にそれ等の總てのものに意義あらしむる根本生命を培はんとする宗教的教育に於ては、寧ろ善い意味に於ける場當り次第と云つた行き方、即機に臨み時に應じて、「人を見て法を説く」と云つた變通自在な超科學的方法に依つて、却つて眞に人を動かす

眞に人を生かすに足るのではなからうか。孔子釋迦基督の如き教育的大人格、宗教的大天才の探つた道は、斯うした超科學的教育法に依つて、あの大きな人格的影響を、更に偉大なるものたらしめたのであらうと思はる。

宗教的教育に於ても此超科學的方法の活用には、大に研究する必要があらうと思ふ。無論科學的方法を全然無視せよといふのではない。超科學的方法に依るも、兒童の要求兒童の心性そのものを、充分呑み込んでなければならぬ以上、之に關する科學的研究の結果は、大に參考となるべき筈である。要は科學的超科學的のいづれの方法に依るも、兒童の要求、兒童の心性を基礎とする點に於ては、兩者間に毫も異なる所はないのである。たゞそれが故意か自然か、將た意識的か無意識的かの差があるのみである。されば超科學的方法を探るにしても、兒童の心性そのものに就ては、充分に考究しなければならぬ譯である。而して余が前に述べた詰込主義的教育はこの科學的超科學的のいづれでもない、全く非科學的のものであることはいふまでもない。

第三節 教材に即する教授法

教材と教授法との不調和 最近宗教教育に關する著述も少くない。又佛教基督教の教育實際

家の方面にも、最新の心理學に基く科學的教育法に依らんとするの傾向がある。宗教教育の爲めに慶賀に堪えない次第である。然しながらそれは多くは研究雜誌や機關誌の上の議論に止まりその教育の實際は口や筆程には雄辨でない。否寧ろ依然として極端な注入主義を繰返して居る。謂はゞ理論や道理では多少進歩して來たが、實際がそれに伴はないといふのが宗教教育の現状である。それには又大に原因がなくてはならない。余を以てすれば、その授けんとする教材が全く非科學的に撰ばれたものであるから、こゝに教材と教授法との間に調和しないものがあるからであるまいか。それは恰も古材木を以て新式の家を建てたやうなもので、調和を缺くのみならず無理がある。建築法を新式なものに採る以上、用材もこれに適當したものを以て、かゝらねばならないことはいふまでもない。然るに宗派主義の教育者は、その教育方法のみを科學的方法に依らんとし、その材料は兒童の心理的要求を無視した從來の宗派本位の教材を、そのまゝ費用しようとするのである。否、教材はその宗派々々で一定して動かすべからざるものとなつて居るのである。されば彼等が宗派てふものに拘束せられて居る限り、科學的に教材を撰擇することの自由すらも持たないのである。又彼等は敢てかゝる英斷を實行しようと思つて居ないのである。臆るまで宗派根性の染み付いた彼等は、信徒候補者を作ることより以外には何も考へないやうであ

る。好飲家が酒を百薬の長と信じてゐる如く、彼等はその宗派々々の麻醉劑的教義信條を唯一の眞理であると信じて居る。此靈藥を與へさへすれば、人間が神にまで完成さるゝと信じ切つて居る。その靈藥の加減で自己が既に癡痺して、餘程人間離れをして居ることすら氣付かずに居るのであるから、今又、此靈藥が小さい魂をも癡痺せしめ、人間離れがしすぎて、人間の世界に用事のない神にまで作り上げつゝあることは、夢にも思つてゐないのである。然もこれ等は先づ最上等の部で、彼等の多くは、かのやうに裝つて、實は一家生活の糧を食つて居るのである。

教材の撰擇の自由を持たない彼等が、その教授法のみを科學的方法に依らんとするのであるから、到底實行されない事は知れ切つてゐる。これ宗派主義日曜學校に於て、その理論は兎に角、その實際は非科學的方法に陥らねばならない一大原因である。大人の頭で撰んだ酒を、幼兒に牛乳の代りに與へんとして、その與へる方法のみを科學的育兒法に依らんとするものである。幼兒が苦い顔を背けるのはいふまでもなく、とても難事業たらざるを得ない。そこで育兒法には依ることが出来ないで、無理矢理に幼兒の口に注ぎ込んで、「どうだ、うまいだらう」と云つて居る格、されば兒童心理に基いた科學的教育法を探らんとするものは、先づ其教材から兒童本位に改めてかゝらねばならないのである。

教授法と教材との關係 余輩の信する所に依れば、教授法は一面教材そのものに備はつて居るものである。即ち一々の教材は、それ〴〵その教材特有の教授法に依つてのみ、その教材を兒童生徒の胸中に活かし得るものであると思つて居る。例へば整數を分數で除する場合と、分數を分數で除する場合とは、同じ分數除法を教へるのにしても、その方法は多少異つて來ねばならない。然もその多少異つて居る所に教授法の眞實生命が宿つて居るのである。生きた教授法は教材毎に異つて居なければならない。所謂教授法なるものは、餘り抽象的であつて、實際の場合には殆ど何等の用をもなさないものである。そはたゞ各教材に共通せる教授一般の豫備的知識として役立つに過ぎないものである。要するに教授法なるものは、一面教材の性質に依つて定まるものである。しかもそれは、兒童の自然に従ひたる教材、兒童を將來の理想に導くに必要なる教材であり、且つ兒童自身もそれを要求して止まないものであり、若くば、さうした要求を起さしめ得る教材によつて、始めて有効に適用し得る教授法である。されば教授法なるものは、又一面兒童そのものが握つて居るものと謂はねばならない。

某小學校修身教授に於て、勤勉の實例として二宮金次郎の實話を懇々と説き聞かせて居つた。それは修身教授法に示した、かうした教材取扱法を秩序整然と踏んだ、實に堂々たる教授振りで

あつた。さて愈、教授の歸結まで話を持ち込んだ先生は、一段聲を更めて、

「かういふ風に金次郎さんは心掛のよいほんとうに感心な子供であつたから、多くの人々から尊ばれました。皆さんも金次郎さんのやうにすると、屹度偉い人になります。皆さんは金次郎さんのやうにするでせうね。金次郎さんのやうにしようと思ふ人は手を」と

豫定の教授法によつて、豫定通りの効果を収めやうとした。然るに中に五六人の生徒は、先生の豫想をはずして手を挙げなかつた。先生は不快な容貌に幾分怒氣を含んで、

「手を挙げない者は、勤勉でなくてもよい。金次郎さんのやうにしなくてもよいと思ふのですか」

と發問して、その内の一人を指名した。指名された兒童は稍々顔を緒らめて、

「はい、勉強はするのですが……」

と丈答へて、後は言ひ漙つて仕舞つた。先生の權幕に辟易したのである。しかるに先生は豫定した教授法に當て條まらない此答を、適當に取扱ふ丈の熱心を持ち合さなかつた。そして無難作に宣告して仕舞つた。

「金次郎さんのやうにしない者は、決して偉い人にはなれません」と、

しかし此結論が、少くとも彼の一生徒に満足を與へなかつたことは云ふまでもない所である。

「勉強はするのですけれど……」と答へた生徒丈は、ぼんやりながらも、人は勤勉でなくてはならないに相違ないが、敢て金次郎のした通り、にせねばならない道理はあるまいと、考へたのであらう。果して然りとせば、此一生徒こそ、特殊の境遇に置かれた金次郎の勤勉を、敢てそのまゝ模倣するのではなくて、金次郎の勤勉の眞精神を呑み込んで、これを時と境遇とを異にした自己に生かさんとするものであつて、最も忠實な聞き手であつたのではあるまいか。若し先生にして教授法の死んだ型に囚はるゝことなく、教授の實際を兒童の心理そのものゝ上に置いて、圓轉活脫な超科學的教授法を活用したならば、或は其所から、兒童の要求に投じ時代の要求に應じた活説法が、始まつたであらうと思はるゝのである。

此一例によりて見るに、教材と教授法とが、如何に密接な關係を持てるものなるかゞ知れる。活きた教授は、固定した教材及豫定された教授法の上にあるのではなく、寧ろ兒童の心性から出る自然の要求の上に、活躍して居ることが知れる。而してこの先生の教材なるものは、既に現在の兒童の要求に反した分子を含めるものであり、従つてそれから組み上げられた教授法なるものが專制的な死教育とならざるを得なかつたのは、是非もないことである。

科學的教授法を活かす精神　されば科學的教育法の實際的效果は、寧ろ超科學的方法によつて活用さるゝ所に發揮せらるゝものである。殊に知識技能の頗る社會的意義を持つるに反し、宗教は頗る個人的傾向を帯び、しかも外部から強ひらるゝ性質のものではなく、全く内的自發を生命とするものであるから、一々強いて科學的方法を用ふることの、到底無駄骨折ることはいふまでもない所である。こゝに於て余は、宗教的教育に於ては特に超科學的方法を、その最も當を得たるものと信するのである。然らばその超科學的方法とは如何なるものであるか、章を更めて詳述することとする。

第四章 教育方法としての態度

第一節 超科學的方法と宗教的態度

宗教的態度　余は前章に於て、從來の教育方法を非科學的方法、科學的方法、超科學的方法に分類し、而して宗教的教育に於ては、その超科學的方法に依るを以て、最上なるものと結論して置いた。然らばその超科學的方法とは如何なる方法であるかといふに、余は速かに自然及び人生に對する宗教的態度これなりと答へる。

抑も宗教とは、余を以てすれば、自然及人生に對する、吾人の眞劍な態度に外ならないのである。神とはかゝる眞劍な態度の持主に奉つた尊稱であつて、別に吾人の生活を離れてさうした超人格的のものが、客觀的に存在する譯ではない。若し強いて神が存在すと許すならば、そは吾人をして眞劍な態度を持たねばならないやうに仕向ける力であると云つて置かう。吾等の祖先は天地萬物にさうした強い力を認めた。そしてそれに對して敬虔な態度を示した。又此強い力は吾等の祖先を動かして、彼等をして眞劍な態度を以てことに當らしめたのであつた。しかしながら吾

等の祖先達は事物そのものを詮索して、これをその成素に分折するとか、現象と實體とを區別して、その關係を推究するとか云つた細工をしなかつた。寧ろ事物そのもの、ありのまゝの姿を、直ちに眞理と認めた。又人生の如實相を徹觀して眞如生滅の二門に分ち、迷悟の區別を判すると云つた利口者でもなかつた。唯人間の自然相そのまゝに、直ちに價値を認めた。この自然及人生をありのまゝに見、それ等をそれ／＼生かして行くといふ態度に、日本哲學の根本基調があつた。そは本書の全編、特に第二編宗教編の所論から、容易に論結し得る所である。さればその哲學は、所謂哲學めいたものではなく、寧ろ道德的であり宗教的であつた。學究的理智的と云ふよりは、寧ろ體験的人情的であつた。さし并る太陽の盛なる姿を拜しては、分折のメスを特合はさない彼等は、之を赫灼たる皇祖の偉蹟と結付けて、敬虔な態度を示さずにはゐられなかつた。斯うして彼等には、天地萬有が個々の客觀的存在として、冷めたく轉がるものではなくして、總てが自己と相連れる一體のものとして考へずにはゐられなかつた。自己も萬有も凡てが神の生み給ひしものと信じつゝ、温かい感情を以て迎へた。彼等は兒童の如く活物論者であつた。自然を傷けず、自然に従ひつゝ、しかも自然を我有にすることが出來たのであつた。彼等の自然崇拜、祖先崇拜を幼稚なりと笑ふ者あらば、余はそれ等の人に問はん。諸子は理智の刃を以て幾何の自然を征服し得た

か。又汝の祖先を驕昧無知の禽獸と貶することによつて、幾何の光榮を感じたか。果してそれ等を敢てすることによつて、幾何の幸福と價値とを高め得たか。宇宙は永久の謎である。吾人はたゞ敬虔な態度によつてのみ、永久の不可解を味得ることが出來るのではあるまいか。吾人の所謂宗教的態度といふのは、この敬虔なる態度、眞劍なる態度を以て、物と人とに對するの謂であつて、彼の卑屈なる不可思議に對する平伏者にもあらず、又無謀なる自然に對する反逆者でもないのである。

明治天皇の宗教的態度

天地のなしのまゝなるいはがねの

姿はことにおもしろきかな

なか／＼に色こそよけれつくろはぬ

しづが垣根の朝顔のはな

くむ人もたえて野中のふるゐには

かへりて清き水やわくらむ

おのづからおひたる竹をへだてにて

垣根もゆはぬ小山田の里

となしのまゝなる自然を懐しみ給ひ、又

かざらむと思はざりせばなかくに

うるはしからむ人のこゝろは

思ふことつくろうこともまだしらぬ

幼なごゝろのうつくしきかな

思ふこと思ふがまゝに言ひいづる

幼なごゝろやまことなるらむ

吳竹のなほき心をためずして

節ある人におほしたてなむ

と他までも、すなほに伸び行く人間魂を懐かれ給ふた。是れやがて我惟神道的教育主義であつて

又我民族性に合致した教育方針であらねばならない。余輩の解釋によれば、教育勅語の御精神は、實に是に存するかに拜察し奉るのである。表面國民の實踐的道德を教へさせ給ひつゝ、その間教へさせ給ふとはなしに、惟神道的信仰を呑み込ましめ給ふものである。否、別に表と裏とがあるといふのではない。敢て特更に理想を言挙げさせ給はずして、現實に即して不知不識の間に、理想に契はしむるといふ御態度こそ、そのまゝが惟神道的におはします所である。

さればその教育とは、畢竟物に對し人に對し社會に對する心得を會得せしめて、人間として適當な生活の仕方を指導するにある。表面如何にも平凡で、何等の深味も奥行もない常識教に見えて、しかも甚深の意義を湛へつゝあるものである。元來真理は總て平凡であり、常識的判斷は屢最後の判決權である。吾人は眞面目なる態度、眞剣な態度を以て、當面の事象に應じて適當な處置をして行く外に、それとは懸け離れた特別の眞理といふものゝ、存在を認め得るであらうか。吾々の實際生活と没交渉な眞理が、孤立して何處かに存在するのであらうか。勿論哲學や宗教と云へば、直ぐさうした特別な存在を考へやうとする。又さう考へることを如何にも高尚幽玄であるかの如く、一般に考へられて居るが、それは要するに眞理てふ固定概念に囚はれて居るのではあるまいか。事實は物そのもの人そのものが、眞理であるといふことすら考へる餘裕もない程、眞

劍な態度で物及人に接してゐるのではあるまいか。その偶抽象された真理を弄ぶものは、理智を専らとする學究者間に於てのみのことであつて、一般には、否かゝる學究者すら實際に於ては、物そのもの人そのものを、直接の相手として生活して居るのである。寧ろこの實際的生活の方が概念的の眞理てふものゝ介在してゐない丈に、より多く物我一體、自他融合の境地に出入し得て人生に宇宙的意義を感じ、宇宙に人生的意義を見出し得ると思はるゝ。斯く感ずるとはなしに感じ、見出すとはなしに見出して居る所に、眞實の宗教眞實の生活があるのではあるまいか。

教育勅語の御精神、及吾等が祖先の宗教は、かうした實際的基礎の上に立つものであつて、寧ろ其所謂宗教臭なき所に、人間の生活と離るべからざる意味を持つものである。余が宗教的態度といふのは、物及人に對してかゝる觀じ方をするの謂であつて、かゝる態度によつてなされる教育を宗教的教育、否眞の教育といふのである。

宗教的教育の態度 要するに余の所謂宗教的教育は事物に對し人生に對する態度に存するのである。その教材は何であつても、それに對する教師の眞劍な態度が、自ら宗教的教育法を生み兒童をして不知不識の間に、自然と人生とに對する、眞劍な態度を採らしむるやうに感化する。たゞそれ丈のことである。而して學校教育の外に、若し日曜學校なるものを必要とするならば、

それは現今の學校教育が頗る非宗教的なるが爲め、これを補ふといふ點に意義があるのである。若し學校教育が余の理想する如く、宗教的になり得たならば——余はなし得らるゝものと信じ、且つ左様したいと切望する——特別の日曜學校なるものゝ必要を認めないのである。少くとも今日あるが如き日曜學校は、寧ろ無くもがなと思ふのである。

かゝる意味を實際に就いて、今少し明瞭にする爲め、余は以下數節に亘つて、教材の取扱方、兒童に對する態度、及教授の精神等に就いて論じて見やうと思ふのである。勿論、研究の便宜上、いろ／＼に分けては見るものゝ、要は専ら教師その人の教育に對する眞劍なる態度、即余の謂ふ宗教的態度にあることはいふまでもない所である。

第二節 教材の宗教化

宗教的教育教材に對する余の主張 一般に宗教々育といへば、道德教育國民教育等の外に、これ等に對立して或特種の教材を兒童に授けることのやうに考へられて居る。勿論かゝる考も一應の道理はある。宗教的智識を授ける爲めに、或は信仰生活の範を示す爲めに、適切な教材を必要とする。又環境に宗教的氣分を漲らすべく、特別の設備を要する場合もある。此意味に於て宗

教的教育の特別機關としての日曜學校の類も必要であらう。しかしながら、余は兒童の宗教的教育は固定の一宗派の教義を教へて、それが爲め爾餘の宗派を排斥するやうな、非宗教的人間にならしめてはならないと信ずる。あらゆる宗教の基礎としての、所謂宗教的態度に導くにあると信ずるのである。余は兒童のみならず大人に於ても、彼の一宗派に凝り固つて、他宗派を蛇蝎の如く厭忌する徒輩の信仰なるものを疑ふのである。彼等の態度は自の信仰を、その信ずる宗派によつて表現してゐるのではなくして、全く宗派の爲めの信仰である如き觀をすら呈して居る。即ち彼等の信仰は、宗教の爲めの宗教であつて、自己即人間の爲めの宗教ではないのである。彼等の態度は、自己が米食せるの故を以て、米食以外の食を取れる人間を總て野蠻視するのと同筆法である。食は必ずしも米食に限つた譯ではない。その均しく何か食はずしては生きて居れない人間として、互に尊敬し今ふといふ宏量を缺いて居る。米食か肉食かは、その境遇習慣によつて定められた偶然的出來事である。初めから食は米食でなければ食にあらずと、決めてかゝる態度を不快に感ずるのである。精神的食物としての宗教も丁度それである。始めから宗教は何宗教に限ると決めてかゝるから、排他自負の片輪者になつて終ふのである。人間として何かより高い理想を追はずにはゐられないといふ、宗教の基礎的態度を、先づ養ふといふことが必要なのである。こ

は殊に兒童の宗教的教育に於て必要とする所である。こゝに腹が坐つてさへ居れば、他の宗教を排斥する必要もなく、又自己の信ずる宗教によつて、自己の信仰を全人類的に生かすことが出来るのである。此意味に於て、今日宗派主義日曜學校に於ける宗教々育は、兒童を誤るものであることは、屢論じた所である。

斯く言へば一部の教育家は直ぐ、「だから宗教は無用ではないか」といふかも知れない。しかし余のいふのは、彼の明治の教育界が取つた宗教無視の教育を意味するのではない。前にも言つた通り、人間否、兒童には伸びんとする力がある。意識すると否とに拘らず、現狀に凝つとして止まつてゐるものはこの世界に一つもない。道の傍に見る影もない露草にも、伸びんとする力は満ちて居る。もの皆はかうした力に満ちて居る。若し普通の眞理なるものがあるとすれば、かうした進展止まざる力であらう。此力を或は神といつてもいい、佛といつてもいい、眞如といつてもいい。しかし名を附けると直ぐその名に執着するのが人情である。名に執着すれば既に力そのものゝ眞實は失はるゝ。故に名は付けない方が善いと思ふが、唯さうした力を感せしむることは出来る。又彼自身の裏にもさうした力を發見せしむることは出来る。そして漠然とはしてゐるが、自己及宇宙のものみなが、さうした大活物であることを信ずることは、何も不都合なことでは

はない。あらゆる科學哲學宗教、その他百般の事象をかゝる信念の下に融合統一し、自己に宇宙の意味を味ひ、宇宙に人生的意味を感じることは、毫も不都合ではないのみならず、これによつて人間は始めて自己生活の意義を確めることが出来るのである。然るに従來宗教無視の教育は、植物は單に植物として、個々の植物が何等の宇宙的意義もなく教へられた。況んや、吾人々類の間に何等の内的な親密さを感じることもなしに取扱はれたのである。斯る教育からは、宇宙は唯是れ星あり月あり、山あり川あり、植物あり動物あり、女あり男あり、大人あり小供あり、しかもそれ等が何等の温かい感情を以て包まるゝことなく、個々の物體として征服し征服されつゝある冷めたい宇宙と人生としか持ち來たさないのである。斯る宇宙から切り離された冷めたい一個の存在としての人間は、實に我儘勝手な厄介極まる生活しかなし得ない。現世を化して修羅叫喚の巷と化する外、彼は動くべき道を知らないものである。宗教なき人は手綱なき馬の如く、宗教なくして人を教育するは、智慧ある惡魔を作るものである。化石的宗教を以て、人類を疎んずると、宗教無視の教育を以て、人類を智慧ある惡魔化するとは、共に余の忍びざる所である。

余の主張せんとする宗教的教育は、兒童に對して「道德教育及國民教育の基礎、并に其生活に必須なる普通の知識技能を授くる」以外に特殊の宗教的教材を授くることは寧ろ第二義第三義と

するのである。そしてその第一義は教育的に選擇されたそれ等の教材を授くる間に、それ等の教材に對する教師その人の態度を宗教的たらしむる點にあるのである。換言すれば、從來學校教育に於て授けられつゝある教材の類を授くるのであるが、唯從來と異なる所は、之を授くる教師その人が、宗教的態度を以て教材を取扱ふことを意味するのである。もつと簡單に言へば、余は今日、の學校に宗教的教育を提唱するものである。

教材に對する宗教的態度　宗教的教育とは、總ての教材を取扱ふに際し、必ずその教材に對する教師の宗教的信念が裏付けられてあることを意味する。例へば修身教授に於て、一の徳目を取扱ふにも、それを單に古い乾燥し切つた訓話的説明に終らしめてはならない。修身書にあるから教へるのだと云つた、申譯的な訓話を以て御茶を濁してはならないのである。その一徳目に教師の全身全靈を打ち込んで授けなければならない。その一徳目を持つ内容そのものよりも、教師のそれに對する眞劍な態度そのものが、徳目以上の或る宇宙的意義を感せしむるものであらねばならない。兒童はその耳には一徳目の内容を聞きつゝ、その全身は人生の根本に生動しつゝある。一種の力に包まれてあることを痛感してゐなければならない。それは丁度一花の開くにも、全宇宙の力が加つてゐる如く、表面は一徳目の話ではあるが、それに盛らるゝ言葉の一々には、教

師の信念からつき出した全宇宙の壓力が加つてゐなければならぬ。余はかゝる御態度を、常に明治天皇の詔勅に於て感ずるのである。

『國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立』てさせ給ふに際しては、『躬ヲ以テ衆ニ先ンジ、天地神明ニ誓はせ給ひ、或は『朕嚮ニ汝百官群臣ト五事ヲ掲ゲ天地神明ニ質シ、綱紀ヲ皇張シ、億兆ヲ綏安スルヲ以テ誓フ。然ルニ兵馬倉卒未ダ其績ヲ底サズ。朕夙夜上ハ以テ、神明ニ畏レ、下ハ以テ億兆ニ慙ヅ』と示させ給ふのである。その一事を詔へ給ふにも、常に天地神明の前に立たせ給ふ御態度を拜し奉るのである。又陸海軍人に賜はりし御勅諭には、國家を保護させ給ふことを以て、『上天ノ惠ニ應ジ、祖宗ノ恩ニ報ヒマキラス』所以と信せさせ給ひ、忠節禮儀武勇信義質素の五ヶ條を示させ給ひ、之を一貫するに一の誠心を舉げて『一ノ誠心ハ又五ヶ條ノ精神ナリ、心誠ナラザレバ如何ナル嘉言モ善行モ皆ウハハハノ裝飾ニテ何ノ用ニカハ立ツベキ。心ダニ誠アレバ何事モ成ルモノゾカシ。況ンテヤ此五ヶ條ハ天地ノ公道、人倫ノ常經ナリ』と、五ヶ條に宇宙的人生的意義を裏付け給ふのである。又教育勅語に於ては、國民道德の要綱を示して『斯ノ道ハ、實ニ我が皇祖祖宗ノ遺訓ニシテ、直ちに神明上天の御垂訓と仰がせ給ひ、『之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ之ヲ中外ニ施ンテ悖ラズ』と、宇宙的意義を裏付け給ふのである。その他、憲法を起草させ給

ふにも『惟フニ立憲ノ大事ハ、朕ガ祖宗ニ對スル重責ニシテ、經營創始、朕自ラ之ヲ斷ズルノ任ヲ取ラレトス』と宣らせ給ふのである。明治天皇は常に皇祖祖宗を天地神明と同列に視給ひ（拙著「教育勅語の背景としての宗教」参照）その御一言御一句にも、常に天地神明に對する大信念の程を裏付けさせ給ひ、眞劍そのものとも仰ぎ奉るべき御態度を以て、事に當らせ給ふのであつた。

わがしれる野にも山にもしげらせよ

神ながらなる道をしへ草

いつはらぬ神のこゝろをうつせみの

世の人みなにうつしてしかな

千早振る神のひらきし道をまた

ひらくは人の力なりけり

と、政治に教育に其他百般の事に當つて、明治天皇は常に宗教的大信念を以て當らせ給ふたのである。天皇は佛教、基督教の信者でもまします、又所謂宗派神道の信者にもおはしませぬけれ

ども、其の生ける御信念を以て萬事を生かし給ふた。否、生ける萬象を如實に生きさせ給ふたのであつた。形式張つた世の所謂宗派的宗教のみを宗教と思ひ慣らされた人々は、一種の物足らなさを感ずるかも知れないが、そこに眞實の宗教があるのである。

又乃木將軍も佛教徒でもよく、勿論基督教信者でもない。又宗派神道の徒でもなかつたやうであるが、

國のため力のかぎり盡くさなむ

身の行末は神のまに〜

とあるから見れば、將軍の盡忠無比の日常生活は、深くこゝに根ざしてゐたことが知れる。殊更に何宗の信仰であるとも言明されないが、その日常の言行は、將軍の參徹したる天地神明から漏れ来るものであつたことが知られる。明治天皇は、所謂宗派的宗教の信者ではおはしなかつた。然かもその御生活は宗教的生活そのものを生活させ給ふたのである。若し強いて云へば、余の所謂惟神道の信者ではおはしましたと申し奉るべきである。乃木將軍亦然りであつた。

余の所謂宗教的教育といふのは、かうした眞剣な態度を以て教材に對し、兒童生徒をして不知

不誼の間に、又かうした精神に浸らしむるにある。余が教育をして宗教的ならしむべく、明治天皇の御信念を背景としたる教育勅語を以てせんとする所以も、亦是に存するのである。

各教材の宗教化

昔に「道德教育及國民教育の基礎」としての教材に止らず、「其生活に必須なる普通の知識」即ち科學的知識を兒童の常識中に織り込まんとするにもこの宗教的態度を忘れてはならないのである。例へば、物理學、數學上の法則を授くるにしても、それ等を單に個々の離れ々の孤立的のものとして取扱はないで、それ等が悉く大自然の整然として一系亂れざる大生命を物語るものとして、而して吾人々類がその大生命と脈絡貫通せるものとして、與へられねばならない。否、教師の意氣込みが大生命そのものを傳ふると云つた態度であることを要する。又生理學で眼や耳のことを授くるにしても、それを分析して微細の點まで明瞭ならしむることも、勿論必要であるが、一面又これを全體として見、身體から切り離された眼や耳には何等の生命なきこと、及眼耳等その一を缺ける身體が、身體として完全なものでないといふ、所謂有機的渾一體としての方面を明かにして、以て宇宙と個人との不即不離の妙趣を悟らしむべきである。殊に動物と植物との微妙な交渉、及それ等が人生に對する意義を除いては、所謂理科博物の教材は、徒に無味乾燥なる事實の羅列に過ぎないものとなるであらう。英國の文藝家、ジョージ。

ギツシグは「偉大な藝術家である自然は、普通の花は誰にでも眼につくことで拵へる。私達が呼んで最も卑俗な雑草と言つて居るものでも、人間の言葉を以てしては言ひ盡せない程の、驚異と可憐とを具へて居る。珍しい花はこれにくらべると、一層精緻微妙な自然の心づかひの下に秘めた場所に造り出されて居る。だから珍しい花を見つけるといふことは自然の神殿に一層近い、聖域に入ることを許されたといふ感じを味ふことになる。嬉しい中にも畏敬の念が湧く」と云つて居る。又ジョルダン博士の「石物語」や「マトカとコチク」や「鮭の話」を読むものは、單にそれ等の個々の科學的知識を得る丈ではなく、それ等の生物無生物を通して、一種の大生命力に觸れることは、世間周知のことである。或科學者は「余に顕微鏡を與へよ、さらば余は無神論を破つてみせん」と云つたといふことであるが、偉大なそして眞の意味に於ける科學者は、彼の「眞理の取次人」の如く、單なる科學的眞理に囚はれて、その心を硬化させてはゐない。深く科學的事實の奥に流るゝ微妙なる大生命力に觸れて居る。

かくの如く如何なる教材でも、その態度の如何によつて宗教的教材として、充分新たな意義を持たせることが出来るのである。然るに從來我國では、一般に宗教と云へば、人間生活から超越して全く人間離れた一種特別の生活に入る妙術でもあるかの如くに考へられて、一種の尊敬を

拂はれて居つた。或は時に吾々人間共には全く無用のものとして、敬せずして遠ざけられ、唯人間世界に影が薄くなつて、否應なしに人間離れなくてはならない運命に迫られて居る老人共に死に行く先の安心を與へるものとして片付られて來たのである。事實佛教各宗の教義中幾分でも人心に響いてゐた方面は全く是れであつた。斯る教義をそのまゝに、兒童の宗教々育に持込まんとするのが、宗派主義日曜學校當事者の態度である。元來人間性に光明を認め、人間をして人間たらしむることを以て目的とする學校教育と、人間性を暗黒そのものと認め、人間から人間魂を取去つて仕舞つて人間離れさせることを以て其目的とする宗派主義の宗教々育とに於て、兒童の取扱方とその授けんとする教材とを異にすることは云ふまでもなく、これが當然の歸結として、兩者間に矛盾衝突を免れないことも亦云ふまでもない所である。然るに余輩の主張する所は、眞人間の生活そのものを以て宗教と觀じ、兒童を導いて斯る生活を生活せしむるを以て宗教的教育否眞の教育と稱するのである。されば宗教的教育は學校教育とその目的を一にするものである。否學校教育の目的を徹底的ならしむるを以て目的とするものである。従つて宗教的教育に於ては大體上學校教育方面に於て撰擇された教材と研究された教法以外に、特別の教材と教法とを要しないのである。唯兒童をより神聖なるものと觀じ、教材により以上の意義を認め、教法により以

上の生氣あらしめんとする點に於てのみ大に相違する所があるのである。換言すれば學校教育の全體に宗教的生命を裏付けて、それ等を宗教化することである。否それ等の總ての背後に嚴存する宗教的生命を發見して、それを實際教育上に活用し、以て學校教育の効果をして滿全ならしめんとするものである。されば兩者間の調和は期せずして得らるゝ譯である。結局、兩者間の衝突も調和も、懸つて兒童に對し教材に對する教師の態度如何、宇宙及び人生に對し所有事物に對する教師の信念如何に存するのである。

抑も教育は人格の反映であるといはれて居るが、その人格の根本を成すものは此信念である。エマーソンは「教育とは學校で教へられたものを全部忘れて、然して後に残る所のものである」と云つたが、それは教師のかうした信念態度の無意識的感化による識見、人格的薰化力の残ることる意味するのであると思はるゝ。何等の信念もなく、徒に生硬な斷片的知識を詰め込むことに汲々たる我國の教育からは、その残る所のもは、疲れ初つた頭と、宇宙人生に對する些の信念もなき、所謂「手綱なき姦馬」でしか無いであらう。實に「日本には政治家あり、學者あり、大教育家はある。然も人なし」と云つた某外人の批評に對し、之を打ち消す丈の人物を缺くものは全く是に原因するのである。

人の問題

如何なる教材でも教育家その人の、是れに對する態度如何によつて、宗教的教材となつるとするならば、宗教的教育とは結局人の問題となつてくる。教育家に健全な信念の持主さへ得たならば、學校教育がそのまゝ宗教的教育の機關となる。而してたとひ又宗教的教育の特別機關たる日曜學校の類と雖も、教師その人を得ざる時は、却つて非宗教的のものとならざるを得ない。今日の宗派主義日曜學校に於ける宗教教育の多くは即ちそれである。そこで余は教育家諸君の間に宗教的氣分が漲つて來ることを切望して止まないものである。宗教的氣分を漲らすと云つて、別に諸君に向つて宗派的宗教を信せよといふのではない。又洗禮を受けよとも參禪をせよともいはないが、唯、諸君が今現に取扱ひつゝある教材を、眞劍な態度を以て精研して貰ひたいといふのである。それは、それ等の教材を單に實用とか地方向とか期節向とか、或は他の教材と強ひて結び付けんとする所謂聯絡とか云つたことの外に、否それ以上に、その教材の持つ宇宙的意義人生的意義にまで參徹して貰ひたいのである。と云つて余は今、教育家諸君にあらゆる智識の大學者になれといふのではない。あらゆる大科學者大哲學者が、自己の研究を投げ出して、大自然の前に畏敬した、その大自然の一部を取扱つて居るのであるとの信念を持つて貰ひたいのである。勿論自ら、科學の結論、智識の歸結は不可解の一語にありといふ所まで、精力の續くか

きり突き込んで貰へれば猶更結構であるが、そこまで教育家に望むのは、或は望む者の無理かも知れない。少くともその取扱ひつゝある教材に對して、相當の努力と尊敬とを拂ふならば、自然深い理解を生ずる。こゝに教材は自己の生命の一部として進み出で、その教材に最も適切な教授法即超科學的方法の自得となる。そして教授が、その自からなる自信力と眞劍さから來る熱を帯びて、兒童の上に不可思議な力を以て波及するであらう。その教師の眞劍な態度が描く一言一行は、恰も聽衆を魅する音樂の如く、兒童將來の性格の一部を構成せずには措かない所であらう。所謂訓育的教授と云ふのも、こゝまで徹底仕切らなければ嘘である。

第三節 教育方法の根本精神

眞劍味を缺く教育界 猫の眼のやうに變りづめの教育主義は、やがて我教育界の無見識を告白するものではあるまいか。曰く動的教育、曰く自由教育、曰く至我活動主義の教育と、前のものが充分消化し切らない裡に、後へ後へと新主義が布令舞はさるゝ。それを生嚼つてそのまゝ振舞はすと云つた有様、かくては教育者の眞劍味の程も疑はるゝのである。

余嘗てその或主義を主張する人を、その在職學校に訪問したことがある。その主義主張に關す

る大體の話を聞いて後、實地教授を觀せて貰つたが、一向その主張らしい所もない。變に思つて先生を詰問すると「まあさうムキになつて八ヶ間敷言はなくてもいゝぢやないか。そこは御互様なんだから、がくやの内幕はかれこれと言はないことにしよう。何とか言ひ出して少々餘分な收入でも得ないでは、實際遣り切れないではないか。まあ一つその邊でも散歩しようぢやないか。實はあれを書いて二千圓程儲けたいと思つて居るのだが、なか／＼骨が折れてねえ君」と、金に對して丈は眞劍味が溢れて居る。かうした先生も講習會などに臨むと、眞面目な顔をして、鹿爪らしく主義を論ずるから堪まらない。

某小學校教員の談に此頃は〇〇先生の教育の講習を受けてから、〇〇教育が流行つて居ます。四分郡視學か〇〇教育萬能主義ですから流行るのもその筈です。しかし一部では〇〇先生が講習會で、自分の主義に都合のいゝ實例計り舉げて、餘り痛く教育者の遣方を貶されたので、曾反感をいだいてゐます。まああれも段々下火になりかけて居ます。その裡に又何か流行り出せば、もう誰も何んとも言はなくなりませう。元々本氣に遣つて居る教員なんかありませんから」と云つてゐた。總ての教員がかうした調子であるとは思はないが、従求の如く變りづめに様々の教育主義にぶつかつては、誰しも斯うした心理にならざるを得ない。何時變るか知れない教育主義に、

カ窟の入らう苦もなく、彼等の多くは堂に入るは愚か、その門にすら入り得ないで、たゞ門前に空騒ぎをやつて居る始末である。最近に至つて幾分從來のかうした態度に反省を加へ、諸學說諸主義に一大整理を施さんとする氣運に向つて來たやうであるが、さもあるべきことと思はるゝ。如何なる主義にも一分の眞理はある。全身全靈を打ち込んで終始一貫の態度を採るならば、さうした眞剣な態度そのものが既に一大眞理である。少くともその態度には、必ず一大眞理を發見せずには措かない可能性を胚胎してゐる。ダルトン案の創始者、バーク・ハースト女史は、四十人の兒童を八學級に分つた不完全極まる田舎の單級學校に於ける、教授の眞剣なる工夫から、今日のダルトン案の萌芽を得たのであると云つて居る。女史の斯うした眞剣な態度こそ、ダルトン案の眞實精神であらねばならない。かうした血と肉とに裏付けられた主義主張にして、始めてそれが權威ある眞理として生命があるのである。又さうした命懸けと云つた態度を以て味つてこそその主義主張を眞實我ものとして活用することが出来るのである。流行氣分からは眞實の何物も生れては來ないのである。

偉大化ちれて行く孔子釋迦基督 孔子釋迦基督の説そのものは、今日となつては不都合な點もあらう。又平凡取るに足らないものもないではない。しかも今猶その權威を失はざる所以のも

のは、その所説そのものにあると云ふよりは、寧ろその金剛不壞の大信念と、それに全生命全人格を打ち込んだ態度の、然らしむる所と謂ふべきではあるまいか。彼等の偉大さは、彼等が直接道した教説よりも、寧ろ彼等の眞剣な態度が、後人を刺戟し、その刺戟された後人達が、自己の創見をも總て是を彼等の所説に歸することによつて、權威と満足とを感じた所にある。かくして彼等の生命は、漸次太りつゝ人類のあらん限りは、永久にその光輝を添へて行くのではあるまいかと思はるゝのである。されば彼等の永遠の生命は、その教理よりは寧ろその教理を體現する態度の、眞實性に宿つてゐるといふべきである。

孔子には際立つた迫害はなかつたが、彼は決して所謂幸運兒ではなかつた。それ丈にその生活は花々しさを缺いた陰鬱なるものであつた。けれども彼は詢々として仁を説いて倦まなかつた。彼が利の爲めに節を曲げなかつたあの粘り強い態度は、後の支那日本の士君子をして、飽くまでも義を貫くと云つた強い者たらしめた。かうした士君子の道義は、やがて孔子の生命の流れであり、且つ孔子の生命をして永遠なるものたらしめたことは疑へない事實である。何せかならば、彼等は如何なる苦難の裡にありても、たゞそれが孔子の教なるが故を以て、満足してゐたからである。今も猶、律義者、村夫子と云へば直ぐ孔子が浮ぶ程彼の生命は徹底してゐる。

豊かに恵まれた地上の所有幸福を棄て、道を求めて山に入つた釋迦には、惡魔、即ち地上の幸福を卻けることは、殊にあの幸福な宮殿に育つた彼には、眞に命懸けの仕事でなくてはならなかつた。彼のこの猛烈なる眞劍さは、後の佛教徒を痛く刺戟して、遂に佛教と云へば厭世教であるかの如く思はしむる程、左様に強く地上の幸福を塵芥視せしめた。今日も猶、僧侶は人生の歡樂を以て一種の罪惡であるかの如く考ふる程、釋迦の眞劍な態度に影響されて居る。此點は寧ろ釋迦の教理以上に徹底してゐる。

「我は神の子なり、神なり」てふ一語を取消しさへすれば、死を免れ得た基督は、飽までもその所信を貫いて、遂に彼自身の信仰に殉じた。「我は神の子なり」てふ言葉の眞否は、未解決の問題として、永久に残さるゝかも知れない。しかしながら、彼が生命を賭して信仰を固守した眞劍な態度は、後人をして「我は神の子なり」てふ言葉を、絶對の眞理として受け容れしめた。そして彼は遂に此地上に於ける唯一の神の子と信せらるゝに至つた。基督教の中心生命はこの基督の犠牲にある。犠牲、迫害、殉教等の項目を取り除けたら、基督教々會史は平々凡々たる記録と化するであらうと思はるゝ程、基督の犠牲の精神が後の教徒の心に生きて居る。而して今も猶、海を渡り國境を超えて基督は宣教師と共に、眞劍に働いて居る。

我神觀に一貫する眞劍味 その人の面影を永遠に傳ふるものは、その組織立つた理論でもなく、巧妙を極めた雄辨でもない。唯その態度の眞劍味にある。我惟神道に於ける神は、この眞劍味が投影した後の人々の心中に生れたものである。素盞鳴尊、日本武尊、應神天皇、武内宿禰、和氣清麿、菅原道眞を神化した所以には、武勇、精忠、報國等の諸性格も數へらるゝかも知れない。しかしながら、それ等は寧ろそれの人々に就いて、種々考量を巡らした後に漸く達する結論である。短的にこれ等の人々が神として吾人に迫る所のもは、その眞劍な態度にある。一生懸命命知らず「何養」といつた態度が、至誠一貫てふ一種の神の調子を帯びて肉迫する所にある。少くとも吾々日本人には、それ等の人々の有する性格を分析して、善惡の價値を判断した後に、神の列に加へると云つた餘地はない程、全的人格を直覺する傾向を持つて居る。彼の歐米人のやうに善惡の定規を持つて來て、或者を天國に生れしめ、或者を地獄に陥れんと云つた分別をする隙もない程、我等の祖先は行動の眞劍さを愛した。又彼の印度人のやつたやうに因に對する應報として、地獄と極樂との果を冥想して見る丈のゆとりもない程、吾等の祖先は行爲の眞實さに感泣した。されば一部の所謂識者からは公益と稱はるゝ秀吉、早雲、家康、將門の如きすら矢張神として、何の疑問もなく崇められて居る。實際誰が果して人間の善惡を正しく決定することが出來や

う。神の子基督でさへ、當時の猶太人には死に價する悪人であつたではないか。時の流れは、或は善人を悪人に、悪人を善人に變へるかも知れない。しかし善惡正邪を離れて、たゞその人の眞面目さ、眞劍味に感激した感のみは、總てを超越した絶對性を持つてゐる。しか感じたから感じたのだといふものに、何の理窟が打ち勝ち得やうぞ。公益としての彼等を祭つたのではなく、善かれ惡かれその人並はづれた眞劍味の漲つた態度に、民族性の感激があつたのである。従つて彼等の遣つて所を道德上の模範として自分達も遣ふと云つたやうな考は毛頭持たないのである。こゝに祭神整理てふ御門違いの企てをして、不成功に終らしめた原因がある。現今國民の眼界は廣く知識は進歩し、一方に於て眞偽正邪、是非曲直の論議は盛になつたと共に、他方に於ては事につて直往邁進の熱誠を欲し、鐵的射し人もあるものを、つらぬきとほせ大和ごころを云つた眞劍味の消磨しつゝある今日、殊に國神の權威を高調するの切要を感じる。況んや第二の國民を陶冶すべき大任ある教育家に、この眞劍味を欲といふことは、寒心に堪へない次第である。

教育法の基礎

佛教の偉大は釋迦の眞劍なる人格にある。基督教は基督の熱烈なる態度に依つて生命付けらるゝ。要するに法は人によるのである。教育に關する新學說、新教授法、最新教育法等、それ等が單に流行思潮として去來してゐる。謂はゞそれ等がたゞ單に借物である間は、

それに何等の權威も價値もないのである。その孰れを採用するにしても、先づ眞劍なる態度を以て研究して行かねばならぬ。創始者の名譽を奪ひ取る程の意氣込を以て、消化されねばならない。創始者が嘗めた苦心以上の苦を苦しむことに依つて、我ものとしなくてはならない。そこに教育の秘訣がある。人心の機微に觸れるものがある。殆ど絶望の航海を、唯一向に押し切つたコロンブスは遂に大陸を發見した。彼をして偉大ならしめた所以のものは、彼が一轍者であつた所にある。若しも彼が水夫等の心理を迎へて、彼自身の意志を左右する者であつたならば、彼は名もなき近海遊弋者として終つたであらう。「我も生き人も生かす天地の誠」の道は、飽くまでもその選んだ方向に直往邁進する愚直者の前に開かるゝ。眞理は平凡である。だがそれを捕へるには不斷の努力と眞劍な態度とを要する。否この努力と眞劍味との外に、眞理と稱すべきものはないのかも知れない。何故かならば、吾人は人を離れた眞理なるものを考へ能はぬからである。頻鎖な科學に組織立てられた教育法なるものも、その證明せんとする中心は唯一點にある。それは創始者が努力と眞劍とを以て體驗した一種平凡なる、しかも不可思議な或力である。若しもその體驗の一點を逸するならば、如何に整然たる理論も、畢竟活字の羅列に過ぎない。彼の横着な教育家が、何等の努力も眞劍味も支拂ふことなしに、新人氣取りで、人の造つた所謂最新式教育法

なるものを、そのまま踏んで居れば、或は人氣取りにはそれで充分であるかも知れない。けれども生きた教育は、かゝる死法によつて得ることは断じて不可能である。所謂最新教育法なるものを生かす力は、非凡な努力と眞剣な態度を支拂ふたといふ所にあるからである。努力と眞剣とによつて得た教育法には、宗教的生命が動いて居る。その宗教的生命が兒童を動かす力となるのである。さればたとひ人の造つた教育法でも構まはないが、此宗教的生命が湧くまでに、眞剣な態度で研究しなければならぬ。それは決して無駄骨ではないのである。數學の價値は答にあるのではない。答を出すまでに支拂つた努力にある。不斷の努力を續けて行く眞剣な態度が、教育家としての大人格を作つて行くのである。

かゝる教育者は、決して兒童に注目することを怠らない筈である。教材選擇の最後の標準が兒童の心理にある如く、教育方法の眞價を決定する最後の判決權は、兒童が握つて居るからである。パーク・ハースト女史が云つて居る、「此案(ダルトン案)の出來上る爲めには、兒童の共働と批評とに負ふ處が極めて多い。私の關係者諸君に自分の計畫を相談する前に、私は先づ兒童に計つたのである。彼等の暗示は非常に價値があつた。實際此案の不備な點を、種々に改良する方法を示してくれたのは兒童自身であつた。かく私の教育せんとする兒童の自由そのものが、自ら

正しい道を發見し來つたのである」と、教育に對する眞剣味に満ちた女史の眼光は、兒童に對しても鋭敏であつた。兒童に教へらるゝこと多ければ多い程、兒童に痛切な教材と教育法とを自得することが出来るのみならず、その兒童に教へられんとする彼の態度そのものが、既に兒童を生かさねば措かない可能性を持つて居る。されば兒童を救ひ得る教育家は、同時に兒童に教へられて行くことが出来るのである。かくの如き教育家にして、始めて兒童と共に宗教的教育を發揮し得ることが出来るのである。

第四節 兒童に對する宗教的態度

子供に對する誤れる態度 子供に對する態度如何は、また非宗教的教育と宗教的教育との由て分るゝ所である。何れの世、如何なる社會に於ても、子供は常に可愛がられて來た。それは無邪氣な彼等の性情が、大人をして可愛がらすにはおられないやうにするからである。斯うして彼等は多くの人々に依つて、神にまで讃へ上げられて來た一面がなると共に、彼等には又暗い他の一面がある。それは心なき大人達から、「餓鬼共」、「野郎つ子」、「はなたらし」として、苛酷に取扱はれつゝある一面である。彼等は家庭に於ては邪魔物の如く扱はれ、社會からは動物視せられ、先

生からは手古摺者と見限られ勝ちである。然かも力弱き彼等は、さうした無法な取扱ひに對して抗議を申立つることも出来ないで、所謂「一手の下の罪人」として永久浮ぶ瀬もなき運命の下に、無理非道な大人の言付けに絶対的服従を強いられて来た。かうした壓迫の下に育つ彼等が、窮鼠却つて猫を噛むとでも云ふべきか、その自衛上の必要から、常に大人の社會に對して、反抗的氣分を懷いて、隙さへあればそれを爆發させやうとする傾向を持つに至るは、蓋し自然の勢である。かうして所謂不良少年少女が造出さるゝ。勿論少年の犯罪に就いては、種々の原因も數へらるゝが、しかし彼等の神の如き純なる第一天性を曇らせるものは、どうしても無理解な大人達社會の罪と云はなくてはならない。

最近子供に關する各種の研究が發表され、大人の頭腦にも子供といふものが餘程はつきりとして来た。教育界方面に於ても、自由畫、童謡、童話劇等、子供の自由の世界が開かれ、又子供に絶対的自由を解放せんとする教育法さへ唱へられるやうになつた。又社會の各方面にも、子供の自由と權利とは漸次認められ、少年裁判、子供安全地帯、子供デー等が衆目を惹くやうになつたことは、大に子供の爲めに慶ぶべきことであると思ふ。しかしながら、一般家庭の視達は今猶古い因襲に囚はれて、子供を自分勝手に弄ばうとしてゐる。勿論親達は子供を可愛がりはする。し

かしその愛たるや屢自分達の満足を得る爲めに、或は身勝手の爲めに可愛がつて居ることが多い。そして子供の眞價を究はめ、子供それ自身の將來の爲めに計ると云つた、眞實の愛に暗いやうである。要するに彼等は子を愛することは知つて居るが、未だ子供を敬重する所まで行つて居ない。自己の勝手には一夕數十金を散財することを何とも思はない親達も、極く僅かなる子供の學用品代に對しては根掘り葉掘りして出し溢る者もある。家を建つるにも庭園を造るにも、先づ大人達の便宜趣味を第一として、子供の爲めの設備は殆ど顧みられない。斯うしたことは家庭のみならず、社會一般に、殊に子供本位なるべき學校に於ても、なか／＼脱け切らない愚なる因襲として残つて居る。子供は未來に於ける社會の希望であり、光榮であること、及び子供こそ神から尊重さるゝ純眞の持主であることを反省したならば、社會は今少し子供を敬重しなければならぬと思ふ。否、從來無暗に子供を輕蔑して、「どうせ子供だから」とか、「何子供の癖に」とか云つて、子供を馬鹿にしてゐた傲慢な態度を、懺悔せねばならない筈である。

所謂模範的人物の製造元 子供を餓鬼扱にする家庭、子供を動物扱にする學校、子供を罪人扱にする寺院教會、かうした社會の生んだ所謂模範的人物とはどんなものか。曰く模範教員の無理心中、模範青年の姦通、模範巡査の辻泥棒、油斷のならぬ念佛者、後家たらしの高僧智識、萬

引で名聲を拍する大牧師、日々に頻發する所謂模範人物の幻滅に、社會は驚異の眼を睜るのであるが、余輩から見れば驚異でも何でもないのである。「汝の信する如く汝になつた」までのことである。「人にはたんと悪いこと、あるがならひと聞いて居る」とか、「あらゆる罪は我身にあり」とか、子供を頭から罪人視してかゝる寺院教會の教通りになつたまでのことである。又自分達が作り上げた執拗さとは氣付かず、無暗に脩身訓話の膏藥を張り付けて、學力優等品行方正な人間を製造せんとする學校の、お誂向となつたまでのことである。憐むべき者よ、汝の名は子供なりである。寺院教會では、彼等がまだ知らぬ罪惡のことを教へ込まれ、學校ではそれを飾りそれを鍍金することを強いられる。教育の靈驗忽ちに現はれ、表面従順、偽り上手が直ちに模範生の免許を與へられる。皮一枚剥げば失態百出。元々罪の塊と信じさせて貰つて居るから恥づる色もなく、その信する如く、「罪咎つくりてうれへのふちに沈める」汝になつたのである。されば「飛んだ模範」の製造元は、兒童を惡しく觀誤つた寺院教會、及學校を先づ挙げねばならないのである。全體佛教及基督教の如き、救の宗教は兒童を誤るものであることは、屢述べた所であるが、彼等は元來大人向の宗教であつて、子供向の宗教ではないのである。然かも健全なる大人には一向御縁の薄い宗教である。見よ、寺院は罪咎造りて浮世の旅路に疲れ果てた老人や、病魔に見舞は

れて絶望の淵に臨んだ若年寄を、専門とする病院の如き觀があるではないか。教會は亦、悔改むべき罪を持つた青年、背負ひ切れぬ煩悶を感じて青息を吐く處女未亡人達の、同病相憐む治療所の如き觀がある。しかもそれ等の治療法なるものは、孰れも根治的のものではなく、癡醉劑や皮下注射で一時を胡魔化して、苦を忘れしむると云つた遣り方ではあるまいか、到底健全な人間に行く處ではないのである。偶には健全な人間も氣紛れに寺院教會に出入して、不知不識の間に病毒に感染して、立派な患者に成り濟まして、得意氣に見ゆる者もあるが、又中にはとても堪へ切れないで飛び出して來る人もある。しかも回天動地の宗教的革命は、屢かゝる異論者から出るのである。親鸞や日蓮ルーテルやウエスレーなども、その飛び出し黨の先輩であつた。今日の教會寺院にも、小親鸞、小ルーテルは澤山居る筈である。余はかゝる人達が、健全な人間共の爲めに氣勢を擧げてくれる日を待つて居る。

是を要するに今日の寺院教會の教ゆる所は、決して子供向のする宗教ではないのである。

兒童に對する惟神道的態度 教會の中にも既にかゝる誤つた態度を反省して「基督信徒の生活の理想は、悔改めといふことを經驗すべき必要なべき點にある」と主張し、「何等の罪なく従つて未だ悔改めの必要な兒童をして、夙に主の化育と訓誨とに親炙せしめて、之を靈化すべ